

墓場
から
のス
タート

ヤン
ント
レ

登場人物

(第 1 話)

三枝健人

パ
パ
ジ
ー

メイリーン

ア
イ
ナ

アラ

辛力人

ネ
ル
ソ

テイトボーリ

(第 2 話)

アンジエリン

リム

タ
ン

リン口

マ
リ
リ

丁
二
丁

ヴ
イ
ル

エド十

(男34) 三枝の部下
(女30) パパジーの妻
(女4) パパジーの娘
(女27) メイリーンの妹
(男30) 警官
(男34) 三枝の部下

2

クリス	セバスチャン	イアン	キコ	ビリー	ラニー	ドンナ	ジヨバイ	(第 4 話)	メロディ	マイキー	湯野	ロメロ	デレク	(第 3 話)	ラップ	ベル	
(女 4 0)	(男 5 5)	(男 3 0)	(男 3 6)	(男 3 3)	(女 3 8)	(女 4 1)	(女 1 4)		(女 3)	(女 2 8)	(男 6 7)	(男 3 0)	(男 2 4)	(男 3 0)	(男 2 5)		
家庭教師	中古車ディイーラー	ロメロの友人	ゲイ	ゲイ	レズビアン	レズビアン	未成年の母親		マイキーの娘	シングルマザー	料理長	三枝の部下	三枝の部下	三枝の部下	三枝の部下	ベルの夫	ホームレス

ナ ネ ツ ト	第 8 話	ジ ミ ー ン	ロ ビ ン	コ リ ー ナ	第 7 話	シ オ ニ	ミ ラ ー ナ	リ ガ ヤ	ビ ロ グ	マ リ ア	第 6 話	キ ム	カ ミ ー ル	第 5 話
------------------	-------------	------------------	-------------	------------------	-------------	-------------	------------------	-------------	-------------	-------------	-------------	--------	------------------	-------------

(女 4 5) 未亡人	(男 1 4) (男 3 5) ロ ビ ン の 部 下	(女 3 5) (女 3 5) ギ ャ ン グ 団 の 友 人	(男 2 8) (男 4 6) ミ ラ ー の 妻	(女 6 4) (女 3 4) ド イ ツ 人	(男 2 5) (男 6 5) 墓 地 に 住 む 少 年	(女 2 5) (女 2 5) 再 婚 希 望 の 母 親	(男 5 2) (男 2 2) 韓 国 食 材 店 經 營
----------------------	--	--	---	--	---	---	---

第一話

○ マニラ・マラテ・デルピラール通り（深夜）

100m先にはネオンが煌めき、派手な衣装と濃い化粧の女性たちが賑やかに客を誘っている。一方で、この場所は街灯もなく薄暗く、シャツタードは閉まり、人通りも少ない。

三枝健人（48）、とぼとぼ歩いている。

細い路地に少年たちが大勢、身を潜めている。角にいた見張り役の合図で一斉に飛び出してくる。あつという間に三枝を取り囲み、バッグ、腕時計、ジヤケット、小銭、最後にはTシャツまで奪い去り、少年たちは笑いながら走り去っていく。

三枝、その場に立ち尽くしている。三枝、右ひじを手で押さえながら、よろよろと花壇の縁に座り込んでいる。パパジー（男、34）、暗がりに座り込んでいる三枝を横目で見ながら、通り

過ぎようとしている。三枝だとわかる

と、慌てて駆け寄る。

パパジー「ボス！ シャツはどうしたん

ですか？」

三枝、うつろな表情でパパジーに顔を

向ける。

三枝「ああ、パパジーか！ 少年ギヤング団

に襲われた」

パパジー「こんな時間に日本人が一人で歩いたら危険だとわかっているでしょう。

怪我は？」

三枝、右ひじをさすりながら、

パパジー「右ひじが痛い、強く引っ張られた」

三枝「盗られたのは？」

三枝、舌を出して、引きつったような笑みを浮かべている。

三枝「バスポート、現金、クレジットカード、腕時計、ジャケットにTシャツか。ズボン以外全部な。スマホは充電切れで置いてきたからコンドミニアムにある」

パパジー「笑つてゐる場合ですか！」

警察に行きましょう」

三枝、左手を左右に振つて、
三枝「行かない。どうでもいい」

パパジー、怪訝な表情。

パパジー「どうして？」

三枝、左手で行け行けと合図している。

三枝「ポン引き野郎！俺なんかにかまつて
ないで、さっさと帰れ」

パパジー、真剣な眼差しで、

パパジー「この4年間、ボスにどれだけ世話
になつたんですか！ほつとけるわけがな
い」

パパジー「警察に行かないならそれでもいい
けど、帰りましょう。タクシー拾いますか
ら」

三枝、右こぶしを左手の掌に叩き、
三枝「そうだ！拳銃売ってくれないか？」

パパジー「突然、何を言い出すんですか！
拳

銃なんか買つて何をするんです?」

三枝、自分のこめかみに右手人差し指をつきつける。

パパジー「強盗にあつたくらいでなぜ自殺なんかするんです?」

三枝「実は、もう金がつきて、日本にも帰れない。コンドミニアムの家賃も払えなくて、もうすぐ追い出される。彼女も出て行つてしまつた」

○(回想) 東京・オフィスビル・経理部・内

4年前。

大企業。デスクネームプレートには(経理部長・三枝健人)と書かれている。三枝、下を向きながら座つている。部下、立つたまま話している。

部下「明後日、監査が入るようです」

三枝、顔を伏せたまま、手を握り締め、絞り出すような声で、

三枝「わかった」

部下、出でいく。

三枝、ゆっくり顔を上げる。大きく伸びをして、意を決した表情。

○（回想）東京・三枝の自宅

閑静な住宅。三枝健人、由紀の表札。三枝、慌てながら鍵を開け、飛び込んでいく。押し入れからスーツケースを引っ張り出し、身の回りの物、バスポート、パソコン、大量の現金などを詰め込んでいる。

キッチンに行き、引き出しから紙を取り出し、メモを書き、テーブルの上に置く。

メモには（由紀、すまない）とだけ書かれている。

スーツケースを押し、玄関に置いてあつたゴルフバッグを抱えながら、飛び出していく。

（回想終わり）

○ マニラ・マラテ・デルピラール通り(深夜)

パパジー、三枝の隣に座っている。

パパジー「大金持ちの日本人だとばかり思つていた」

三枝「俺は犯罪者だ。会社の金を横領してマニラに逃げてきた。妻を捨ててな」

パパジー「うひよー、やるじやないか！」

三枝、首をかしげている。

パパジー「いくら横領した？」

三枝「一億円くらい、マニラに持ってきたのは800万かな、4年で全部使い果たした」

パパジー「わはっ、それで死にたいわけ？」

三枝「妻と家のローンのために、20年以上

遊びは一切せず、真面目に働き続けてきた。

しかし5年前、その生活に虚しさを感じて真面目に働くことが馬鹿馬鹿しくなった。

会社の金を使い込み、女に貢ぎ、酒を飲み、ギャンブルに溺れた。マニラではパパジーの知つての通り、上流階級と付き合い、仕

事もせず、遊び続けた。大バカ者だわな」
パパジー「4年間、散々遊んでたなあ。近頃、
連絡がこないのでどうしたのかなと思つて
いた。そうか、金がつきたんだな」
三枝「8000万あれば永遠に遊べると錯覚
していた」

○（回想）マニラゴルフクラブ・1番ホール
約100人の著名なメンバーが見守つ
ている。三枝もその中にいる。老紳士
が煙の出るボールをドライバーで打つ
と拍手やナイスショットの声が聞こえ
る。

○（回想）パサイ・リゾートカジノ・VIP
ルーム
三枝、友人たち、正装してバカラに興
じている。

○（回想）ニューポートシティ・マリオット

ホテル・パーティ会場

参加者は数百人。オーケストラが演奏している。壇上でシックな装いの年配の女性が話している。

○（回想）パサイ・ゴーボーバー・VIPルーム

三枝、パパジー、中2階からステージを見下ろしながら、飲んでいる。ゴーゴーラガールがステージで裸で踊っている。ゴー
ルーザーのデッキに寝転んでビールを飲んでいる。トローリングの釣り竿が大きくしなり、慌てて釣り上げようと

○（回想）セブ・海上

る。

して いる。

(回想終わり)

○ マニラ・デルピラール通り（深夜）

三枝 「さあ、拳銃売つてくれ」

パパジー 「自殺はいつでもできる」

三枝 、ぶつぶつ呟いて いる。

三枝 「失敗した。少年ギヤング団に襲われたとき、抵抗すればよかつた。そうすればナイフで刺されて、死ねたな」

パパジー 「住むところがないのなら俺の家に行こう。それで落ち着いて考えてみたら？」

世話になりっぱなし だつたから恩返しする

三枝 「お前の家なんて行つたら迷惑になるだけだろう、金もない日本人を助けてもなんの

得にもならない」

パパジー 「ごちやごちや言つてないで。コン

ドミニアムに寄つてスマホや服とか持ち出

さないと」

パパジー 、三枝を抱え上げる。

三枝、元気なく立ち上がる。
パパジー、タクシーを止め、三枝を乗
せている。

○アセアナシティ・コンドミニアム・玄関（深
夜）

高級コンドミニアム。

パパジー、スーツケース、バッグ、ゴ
ルフバッグをタクシーに積み込んでい
る。

三枝、タクシーの横に立ち、コンドミ
ニアムを見上げている。

○トンド・墓地（深夜）

大きな門をタクシーが通過していく。
パパジー、右、左、直進とドライバー
に指示を出す。
お墓が無数に並んでいる。
窓を開けて外を眺めていた三枝、口と
鼻を手で押さえている。

三枝「臭うな、ここはどこなんだ」

パパジー「トンドにある墓地だよ」

三枝「なんで墓地なんかに来たんだ」

パパジー「俺の家がある」

三枝「冗談だろ！」

パパジー「俺は生まれたときからここに住んでいる。さあ着いたぞ」・

パパジー、金を払つてから、スーツケース、ゴルフバッグとカバンを後部座席及びトランクから引っ張り出す。

三枝、お墓を見まわしながら立ちすくんでいる。
パパジー荷物を運んでいく。
三枝、キヨロキヨロしながら、ついていく。

大きなお墓をパパジーが指さしている。
三枝「家つて？」
パパジー「ここが俺の家だ」
三枝「もう遅いからみんな寝ている。ボ
スが住むのは隣の小さいお墓。石棺の上に

マットレスが敷いてあるから、寝心地は悪くない。とにかく今は寝て！」

三枝「トイレに行きたいんだが」

パパジー「そのあたりでしょらしい」
パパジー「指さしている。

○ トンド・墓地・三枝の家（深夜）

三枝、スマホのライトでスイッチを探し、明かりをつける。6畳ほどだが、掃除は行き届いている。中央に石棺があり、その上にマットレス・シーツ・薄い掛布団と枕が置かれている。小型テレビ、プラスティックの椅子が2脚、小さな折りたたみ机、扇風機、洗濯籠がある。

三枝、荷物を部屋に運び入れ、椅子に腰かける。マットレスをめくり、拳で石棺を軽く叩いてから。頭を抱えて嗚咽を漏らしている。

三枝 N 「死んだほうがましだ。ここまで落ち

て生きていいくことになんの意味がある」

三枝、明かりを消して、ベッドに入り、
目を閉じている。しばらくして起き

三枝 N 「ギヤギヤウギヤガヤーー」

何度も吠えて気が晴れたのか、げらげら笑つてゐる。

○ 同 · (朝)

ニワトリがあちこちで鳴いている。老人たちの話す声、バイクの音、ドアの開閉音、パンデサル（塩パン）を売る声、子供たちはしゃぐ声、母親が子供を叱る声が響き渡っている。

三枝、目を開けて、起き上がり、外の様子を見ている。

誰かがPARAISO（楽園）を口ずさんでいる。

(フラツシユバツク)

スモーキー・マウンテンのゴミの山で働く
子供たち。スモーキー・マウンテン(フ
ィリピンの歌手、グループ)がPAR

AIS(歌)を歌っている。

x

三枝 N 「ばかやろう、ごみの山や墓地が楽園
かよ。そういえばこの歌、紅白歌合戦で聞

いたことがある」

18

メイリーン(女30)が中を覗いている。
三枝が起きているのを見て入ってくる。
三枝、眉をしかめている。

る。

。

メイリーン(パジ)はまだ寝てるけど、朝
ごはん食べる?」

。

三枝「誰?」
メイリーン「メイリーン、パパジーの奥さん

だよ」

三枝、うなずきながら、

三枝「初めまして三枝です」

メイリーン「タガログ語！上手だねー、独り言までタガログ語で話すんだ。それだけ喋れたら誰も日本人とは思わない」

三枝「トイレはどこ？」

メイリーン「裏に簡易トイレがある。そこでシャワーもできる」

三枝、外に目をやると女の子が二人、じっと見ている。

三枝「女の子が見てるけど」

メイリーン「うちの娘だわ。大きいほうがアイナで小さいほうがアラ」

メイリーン、手招きするがアイナもアラも入つてこない。

メイリーン、二人に向かって、

メイリーン「恥ずかしがってるんじゃないよ。こっちに来て挨拶しな！」

アイナ（女8）、体を捩らせながら入つてくる。

アラ（女4）、アイナの後ろに隠れてい

る。

アイナ「こんにちは」

三枝「アイナ！アラ！こんにちは」
メイリーン、三枝を手招きして、
メイリーン「ボス！朝ごはん食べにおいて」

○同・パパジーの家（朝）

広さは20畳の立派なお墓。前に長机、
その上に透明の蓋のトレイが10個並
べてある。長机の左右にバイクと電動
バイクが置かれている。ハエ取り紙が
ぶら下がり、ハエがびつしりついてい
る。扇風機がリボンを揺らしながらくる
る回つている。後ろには大型冷蔵庫があり、4つのコンロ、プロパンガスのボンベ、10個のポリタンク。3人が料理を作つてい
る。

その後ろに石棺があり、マットレス・

机・棚・ソファがある。

メイリーン、キカイ（女27）、トレイ

の後ろに立っている。

三枝、トレイを見ている。

キカイ、トレイの蓋を次々に開けてい

く。
メイリーン、皿・ナイロン袋・カップ
を持つている。

メイリーン「どれにする？」

三枝、あれこれ見ながら迷っている。
メイリーン「テイクアウトだけやつてるの。
このお皿あげるから、次からは食べるとき
に持ってきて。ボスはいつもタダだから

ね」

メイリーン、ナイロン袋を皿に被せて
いる。
メイリーン「このナイロン袋でお皿を包む
の。その上から食べ物を置く。食べ終わっ
たら袋を捨てるだけで皿を洗わなくてすむ。

またナイロン袋を手にはめて手掴みで食事すれば手も洗う必要はないでしょう」

三枝、一つのトレイを指さしている。メイリーン、スプーンで小さなカツプに惣菜を入れ、ひっくり返して皿にのせ、ライスを添えて三枝に渡す。

三枝「なんとも不思議な食べ方だなあ」
キカイ、けらけら笑っている。

三枝「これはいくらで売ってるの?」

メイリーン「ライスと惣菜1品で120円」

三枝「安すぎる」

メイリーン「貧乏人しかいなからね。それ

でも高いって言われる」

客がやつてきてトレイを指さし、お金を

を払っている。

キカイ、惣菜をカツプに入れ、ナイロン袋に放り込み、口をしばつて渡している。

メイリーン「やっぱリスプーンとフォークはいるよね。スープが飲めないわ」

メイリーン、スローンとフォークを渡し、スープとコップに入れた水を三枝に渡す。

三枝「ありがとう」

メイリーン、キカイを指さし、

メイリーン「この子はキカイ、私の妹」

三枝「三枝です、よろしく」

キカイ、につこり笑つている。

アイナ、アラ、キカイの横にいてスマ

ホで遊んでいる。

三枝「アイナ、アラ、バイバイ」

アイナ、アラ、手を振つている。

x

x

x

三枝、再びやつてくる。

三枝「おいしかった。パパジーはまだ寝てる？」

メイリーン「よく寝るからねー」

三枝「付近を見て回りたいんだけど危なくな

いかな？」

メイリーン「死にたいって言つてる人が怖が

つてどうする？ キカイ！ 迷子になつて

キカイ！

迷子になつて

も困るから案内してあげて」
キカイ、日傘を掲んでいる。

○ 同・墓地・内

キカイ、日傘を差しながら歩いている。

お墓が3段4段に積まれてる。道を曲がると立派なお墓や小さいお墓が延々と続いている。子供が多い。外に椅子を出して老人が座っている。手洗いで洗濯をしている。洗濯物がお墓の入り口にずらつと干してある。

三枝、首を左右に振りながら珍しそうに見ている。

よく見ると小さい店がある。看板もなく、一見しただけでは何の店かわからぬ。

理容店、バイクの修理、歯医者、コーキーショップ、プロパンガス、水、ハンバークー、雑貨店、薬局、アイスクリーム、パン、美容院、クリーニング、

古着、果物、肉、野菜、マツサージなど。

広場がある。

キカイ、店を指さして話している。

キカイ「ここはお粥だけ売つて、安いよ。こつちは肉煮込みの店、ここはフライドチキン、隣でバーべキュー焼いてる。あの店は密輸たばこ売ってる。正規のたばこの半額だよ。密造酒もある。あの店はパパジー御用達で精巧な偽造 I D を作ってくれる」

三枝「なんでもありだな」

三枝、ネズミの死骸を踏みそうになり、驚いて飛び跳ねている。

三枝「ははは、危ない危ない。しかしそあ、

ここは害虫の宝庫だな」

キカイ「ゴキブリ、ハエ、蚊、ネズミ、ヤモリ、うじやうじやいる。カタツムリ、カエル・トカゲもいる。猫や犬にニワトリは放し飼いだからそこら中に糞をするしね」

三枝「不衛生なんでものじやない」

キカイ「ここで暮らしていけそう？」

三枝、ため息をついている。

三枝「うーん、どうかな」

つばめが低空飛行で三枝の脇を猛スピードですり抜けていく。

三枝「ここには何人くらい住んでるの？」

キカイ「5000人くらいじゃないかな」

三枝、驚いている。

三枝「そんなに？ 犯罪も多いだろうな」

キカイ「ギャングもいる。麻薬中毒者もいる。

喧嘩は時々見る。でもほとんどの人は安い給料でまじめに働いている

三枝「拳銃買うのは簡単？」

キカイ「うん、改造銃ならすぐに手に入る。

本物も売つてるとと思うけど。まだ自殺したいの？」

三枝、返事に困っている。

キカイ「それよりバスポート取られたんでしょう。偽造バスポートや偽造一口を買えば？」

三枝「金もない。いらない」

三枝、落書きを見て笑っている。

落書きには（ここで盗むな、金持ちから盗め！）と書かれている。

三枝「家賃つて払つてるの？」

キカイ「払つてない。どこのお墓も所有者がいてその人の了解をとつてる。墓守つて」と

三枝「石棺の上に寝るといふのはいいの？」

キカイ「亡くなつた人が寂しがらなくていいじゃない？」

三枝、苦笑いしている。

ソフトクリーム屋の前で、

キカイ「ソフトクリーム食べよう」

三枝「お金持つてない」

キカイ「それくらい大丈夫」

キカイ、ソフトクリームを2つ受け取り、椅子に座る。

三枝、隣に座る。

三枝「電気はあるんだ」

キカイ「盗電だよ。よく切られるから、うち

は 2か所から引いてる

三枝、絶句している。

三枝「盗電つて！」

三枝、空を見上げている。沈黙の後、
話し出す。

三枝「WIFIはあるの？」

キカイ「うちはないけど、近所のWIFIパ
スワード、全部教えてあげる」

三枝「ありがたい」

キカイ「ボスのおかげで家族の生活がガラツ

と変わったんだよ。2年前に店を始めて、

バイク、大型冷蔵庫、電動バイクもスマホ
も手に入った。私はナボタスでぶらぶらし
てたんだけど、店を始めるときにここに來
たの。利益も出ているのでアイナは学校に
通える。だからボスは一生食べ物は無料！

それくらい感謝している」

三枝「俺の無駄遣いも少しは役に立ったんだ

な」

警官のネルソン（男30）やつてくる。

キカイ「カイ、小声で、

キカイ「嫌な奴がきた」

ネルソン、三枝を嘗め回すように睨んでいる。

ネルソン「キカイ！ 誰？ 見かけない奴だ

けど

キカイ「三枝さん、日本人だよ」

ネルソン「なんで日本人が墓地にいる？」

キカイ「昨日からここに住んでるの」

ネルソン「よりによつてこんな掃き溜めに！」

三枝「金がない」

29

ネルソン、座つていいた三枝の胸ぐらを

つかみ、引っ張り上げる。

ネルソン「俺は日本人が大嫌いなんだよ。幼

い少女を弄んだり、札束でやりたい放題し

やがって

三枝、苦しがつていてる。

ネルソン「お前もそただつたろうが、金がなくなつてい氣味だ」

キカイ、立ち上がり、ネルソンの手を掴んで、引き離す。

キカイ「何も悪いことをしていないのに手荒なことしないで」

キカイ、三枝の顔を覗き込んでいる。

キカイ「大丈夫？」

三枝「あー、大丈夫だ」

ネルソン「金がない日本人がフイリピンにいる意味はない。さっさと日本に帰れ！」それとも帰れない理由でもあるのか？」

キカイ「自殺しそうだつたからパパジーが連れてきたの」

ネルソン「そりやまた都合のいい場所に來たもんだな、自殺してそのまま棺にすぐ入れる。土葬だからなんの手間もかからない」

キカイ、三枝の手を掴んで、

キカイ「笑えない！ 帰ろう」

三枝、キカイ、歩き出す。

ネルソン、じっと見ている。

キカイ「ネルソンは賄賂をもらつて家を建て、

ベンツを乗り回している。密輸たばこは正規品の3分の1の価格で売れるのに、賄賂を払うため、半額にしかならない

三枝、うなずいてる。

三枝「賄賂を払わないとどうなる?」

三枝「払うしかないな。俺はもう少し歩いてくる。キカイにいつも付き添つてもらうわけにもいかないだろ」

キカイ「気をつけて」

三枝、ぶらぶら歩きだす。道はぬかるん

んでいて、糞やゴミがあり、まっすぐ歩けない。

しばらく歩いて、

椅子に座つてる。テイトボーア(男34)と若者3人が

テイトボーア、三枝を指さしながら、

テイトボーア「おい!ここを通るなら通行料払え!お前、見ない顔だな」

三枝「金なんか持つてない、調べて見ろ」

若者1、立ち上がり、三枝のポケットを探っている、両腕を前に突き出し、お手上げのポーズ。

ティトボーア「小銭も時計も携帯も何もないのか、何しに来た?」

三枝「ここに住んでるんだ、昨日からだけど」

ティトボーア「中国人なのか?」

三枝「日本人だ」

ティトボーア、目を細めて三枝の顔をじろじろ見ている。

ティトボーア「どこに住んでる?」

三枝「パパジーの家」

ティトボーア「ポン引きパパジーか」

三枝「そうだ」

ティトボーア「あいつも貧乏な日本人なんかをよくもまあ引き受けるものだな、物好きな奴だ。金のないやつに用はない。さっさと行け! 但し、ここから先は電気も通つていない。トイレもないから穴を掘つて用を足している。スクワッター(不法居住者)

しかいないし、あそこに見える少年たちはギヤングだ。警察は見て見ぬふりだからや
りたい放題。麻薬の売人は野放しで、中毒者だらけだ』

三枝、少年たちをじつと見ている。

三枝『帰るとするか』
ティトボーアイ『おう、俺はティトボーアイ、パパジーによろしくな』

○同・墓地・パパジーの家・前

パパジー『ボス、アイナを小学校まで送るけど、一緒に行く?』
三枝、帰ってくる。パパジー、アイナ、アラ、電動バイクに乗っている。

三枝『行く』
3人乗りの電動バイクの前の席にパパジー、膝の上にアラ、後部座席に三枝とアイナ。
アイナ、制服を着て、ピンクのバック

パックを膝の上に置いている。
パパジー、電動バイクをスタートさせる。

三枝、アイナに話しかける。

三枝「何年生?」

アイナ「2年だよ」

三枝「学校は楽しい?」

アイナ「うん」

三枝「好きな科目は?」

アイナ「タガログ語と英語は大好き。でも算数は苦手で足し算は10までなら指で数えられるけど、10を超えたらい難しい」

三枝「おじさんは算数は大得意、帰ってきたら教えてあげる」

アイナ、につこり笑つて、

アイナ「本当? 約束だよ」

○ 同・小学校・前

送り迎えの車、ジプニー、トライシクル、電動バイクで大渋滞している。

アイナ、バツクバツクを背負つて、パパジーの頬にキスをする。三枝に手を振りながら学校に向かつて歩いていく。

パパパジー、「この小学校は生徒が多いので、午前と午後の2交代制なんだ。アイナは午後組。入れ替えの時はとても混雑する」

三枝「午前組は何時から始まる？」

三枝「おお、それは早い」

パパジー「6時だつたかな」

三枝「これ使つて！」

三枝「いらぬい。現金はないけど、スマホの残高には10万くらいある」

パパジー、「三枝にお金を渡す。三枝「パパジー、「そのお金は使つてはダメだ」

パパパジー「なぜ？」

アラ、駄々をこねている。

パ　パ　ジ　ー　、　T　W　I　N　K　L　E

K　L　E　を　歌　つ　て　い　る　。

ア　ラ　、　一　緒　に　歌　つ　て　い　る　。

三　枝　「何　か　し　た　い　な　？」　日　銭　く　ら　い　は　稼　が　な

い　と　」

パ　パ　ジ　ー　「時　間　は　有　る　か　ら　ゆ　つ　く　り　考　え　て　み

て　、　死　ん　だ　と　思　え　ば　なん　だ　つ　て　で　き　る　」

三　枝　「そ　う　だ　よ　な　。　ポン　引　き　の　く　せ　に　い　い　こ

と　言　う　」

パ　パ　ジ　ー　、　笑　つ　て　い　る　。

三　枝　「こ　の　お　金　も　ら　つ　て　お　く　わ　」

○　同　・　墓　地　・　三　枝　の　家

翌　日　。

三　枝　、　スマ　ホ　を　操　作　し　て　い　る　。

パ　パ　ジ　ー　や　つ　て　く　る　。

三　枝　「な　ん　と　か　W　I　F　I　が　使　え　る　。　ぶ　ち　ぶ　ち

パ　ジ　ー　「ボ　ス　は　子　供　は　い　な　い　ん　だ　よ　な　。　な
ぜ　作　ら　な　か　つ　た　の　？」
パ　ジ　ー　「ボ　ス　は　子　供　は　い　な　い　ん　だ　よ　な　。　な
切　れ　る　け　ど　」
三　枝　「な　ん　と　か　W　I　F　I　が　使　え　る　。　ぶ　ち　ぶ　ち

三枝 「あまり話したくはないんだが・・・」

○ (回想) 東京・三枝の自宅・寝室
カレンダーには赤丸で排卵日が書かれ
ている。

三枝、由紀、セックスをしている。
三枝、顔をしかめている。

由紀 「我慢しなさいよ」

三枝、顔をしかめながら続けるが、と
うとう諦める。

由紀 「子供がほしいほしいって言つて
どうしてやめてしまうの?」

三枝 「やればやるほどだんだん臭いがきつく
なつてきて耐えられなくなる。昔はそうでも
もなかつたのに」

由紀 「産婦人科に何度も行つたけど、よくな
らない。鼻をつまんでできないの?」

三枝 「集中できなんだ」

由紀 「言い訳ばかりね。浮気でもしてるんじ
やないの?」

三枝 「馬鹿言うな」

由紀「もうセツクスなんて金輪際しない。今
日から別々に寝ますから」

（回想終わり）

○トンド・墓地・三枝の家

三枝「それでセツクスレスになつて、当然子
供はできない」
パパジー「耐えられない臭いつてあるな、ボ
スが悪いわけじやない。今は奥さんはどう
してるの？」

三枝「さあな、まったくわからぬ。恐らく
家を売つて実家に帰つたとは思う。貯金は
残したもの、妻は俺が横領してたことを
知らなかつたから、きつとひどい目にあつ
ただろう。謝罪のメモだけ残して姿を消し

たから、殺したいほど恨んでるに違ひない。

二度と会うことはない」

パパジー「パパジー、笑いながら、

パパジー「そうか、日本には帰れない、家も
ない、妻もない、子供もない、パスポ

「トもない、金もない！　ないないづくし」

三枝、大きく口を開けている。

三枝「ぐへ！」

○トンド・ウグボマーケット（早朝）

翌日。

メイリーン、キカイ、三枝、野菜・肉・魚を仕入れている。

三枝、珍しそうに見ている。

メイリーン「このお店で売れ残つて、廃棄寸前のものを買うの。毎日よ。値段は半額以

下」

キカイ「そうしないとあの値段では売れないからね」

三枝「納得。なぜ八百屋も魚屋も米屋も玉子屋も、同じような大きさの店ばかりあるの？」品揃えも同じだし」

メイリーン「初期投資が少なくてすむからじゃない？」

キカイ「競争より共存だと学校で教えてもら

つたけど

三枝「なるほどー」

○同・墓地・三枝の家

2日後。

アイナ、折り畳みの机の上でノートを開いて考えている。

三枝、紙に問題を書きながら教えている。

アラ、退屈そうにしている。

メイリーン、「教え方、うまいじゃない」

三枝「アイナもアラもいい子だな！」

アイナ

メイリーン「喜んでないで勉強、勉強」「アイナ、アラ、飛び跳ねている。」

○同・教会

2日後。

アイナ、席に座り、友達と話している。
三枝とキカイ、アイナの後ろの席で話
している。

三枝「ここで日銭を稼ぐ方法はある？」

キカイ「ボスが働くの？」

三枝「もちろん」

キカイ「簡単なのは物売りだけど」

キカイ、しばらく考えて、

キカイ「そ、だ、お墓の掃除なんてどう？」入

り口で待つていて、墓参りに来た人の後を
ついていく。お墓に着いたら、掃除をしま
しょうかと提案する。たいていはOKして
くれる。100円くらいはくれるよ」

三枝「やる」

○ 同・墓地・入り口

入り口横にはろうそくの店、花屋があ
る。

三枝、ベンチに座り、チリ取りとほ
きを横に置き、入口を見ている。

パ　パ　ジ　一、心配そ　うに三枝を見　て　いる。

パ　パ　ジ　一「本当にやるんだ」

三枝「や　るよ、少しでも稼　がないとな」

パ　パ　ジ　一「墓参りの人は来　ないなあ」

三枝「スマホを見　て　いる。」

パ　パ　ジ　一「墓参りの人は来　ないなあ」

ダル工場を經營して　いる中国人のリムさん
パ　パ　ジ　一「金持　ちのゴルフ仲間がたく　さんい
たよ　ね。ヴァレンズエラの副市長で、サン
ダル工場を經營して　いる中国人のリムさん

い　る。
リム、サンダル工場で伝票を確認して
（フラッシュバック）
x x x x x x

リム、市議会で議長を務めている。
(フラッッシュバック)

		パ ジ ー「大手中古車デイーラーでフィリピ ン人のセバスチャンさん」	x
		(フラツシユバツク)	x
	x	セバスチャン、ずらつと並んだ中古車 を部下を引き連れ、見回っている。	x
x	x	セバスチャン、「マカティの病院長で上院議員の選 挙参謀をしている中國人のタンさん」	x
x	x	(フラツシユバツク)	x
x	x	タン、病院内を歩いている。	x
x	x	医者、看護婦は姿勢を正し、制服を整 えて、軽く会釈している。	x

ん	パ ン	パ ジ ー	「五 つ星 ホ テ ルの 料 理 長の 湯 野 さ	x	共 に 調 べ て い る 。	キ ム 、 韓 国 食 材 店 で 在 庫 状 況 を 部 下 と	x	(フ ラ ツ シ ュ バ ッ ク)	x	て い る 韓 国 人 の キ ム さ ん	パ ジ ー 「大 型 韓 国 食 材 店 を い く つ も 経 営 し	x	を し て い る 。	x	(フ ラ ツ シ ュ バ ッ ク)	x
---	--------	-------------	---	---	--------------------------------------	---	---	--	---	---	---	---	----------------------------	---	--	---

(フラツシユバツク)

湯野、レストランの厨房で部下が作った料理を厳しい表情で味見している。

パパジー 「彼らとはもうつきあわないの？」
三枝 「会いたいけど・・・メールも電話も無視している。ゴルフなんて行ける身分じゃない」

パパジー 「お客様だよ」
パパジー 、三枝の膝を軽く叩いてる。

ろうそくと花を買っている4人の墓参り客がいる。

買い物が終わり、ゆっくり歩いている。

三枝、チリ取りとほうきを持ち、4人の後ろ20mほど離れてついていく。
積み上げられたお墓に着くと、三枝が近寄り、話しかける。

三枝 「よかつたらそのお墓のまわりの枯葉やゴミを掃除しましようか？」

お客 1 「頼む」

三枝、掃除している。ポケットからゴ
ミ袋を取り出し、枯葉やごみを入れて

いく。

4人、見ている。

x x x

お客 1 「丁寧に掃除してくれてありがとう」

お客 1 , 三枝に 200 円手渡す。

○ 同・パパジーの家

46

三枝、アイスクリームをアイナとアラ
に渡している。

アイナ、アラ、おいしそうに食べてい

る。

メイリーン、怪訝な顔。

三枝「お墓の掃除で 500 円稼いだから」

メイリーン「あらまあ」

○ 同・墓地内

数日後。

三枝、手押し車でベルをチリンチリンと鳴らしながら、アイスクリームを売り歩いている。

近所のおばあさん、家の前の椅子に座つて外を眺めている。

おばあさん「おやおや、日本人がアイスクリ

ームを売っている。墓掃除はやめた?」

三枝「待っている時間が長すぎる。こっちの

ほうがいい」

おばあさん「2つ頂戴」

三枝、アイスクリームをスクープで3回すくい、コーンに白黄紫の3色アイスを盛り付けて渡している。

○ 同・パパジーの家・前

ネルソン、トレイを開けて指さしている。
メイリーン、ナイロン袋に惣菜を入れている。
三枝、手押し車を押しながら帰つてくる。

三枝、ネルソンを見て顔をしかめている。

る。

ネルソン、三枝を見て、

ネルソン「お前、まだいたのか！」なんだよ

それ！アイスクリームなんて売ってるん

じやねえよ。日本人はもつと賢いのかと思

つてたけどお前はマヌケだな。貧乏なフイ

リピン人の仕事を奪つてるだけじゃないか。

少しば俺が感心するような仕事をしろよ！

マイリーン「アイスクリーム売つたつてい
じやない」

ネルソン、金を払い、ナイロン袋に入

つた惣菜とライスを受け取つてゐる。

ネルソン「おい！日本人！仕事は終わり

なんだろ。マイリーンがうるさいから歩き

ながら話そう

メイリーン「行かなくていいよ。ろくな目に

合わない」

○ 同・墓地・内

三枝、躊躇してゐるが、歩き出す。

ネルソン「名前は?」

三枝「三枝健人」

ネルソン、ナイロン袋を持ちながら、スマホに入力している。

ネルソン「犯罪者だな?」

三枝、たじろいでいる。

ネルソン「日本から逃げてきたんだろう。不法滞在もあるな」

三枝「ああそうだ。パスポートも盗まれて、

I Dすらない」

ネルソン、スマホを見ながら、

本で何をやつたか知らないが国際指名手配

ネルソン「いいこと教えてやろう。お前が日本で何をやつたか知らないが国際指名手配

はされていない。名前が本当ならな。フィ

リピンと日本の間には犯罪者引き渡し条約

があるから、指名手配されていれば捕まえられるんだが、運がよかつたな」

三枝、にやりと笑う。

三枝「本当か！　不法滞在はどうなんだ？」

ネルソン「金もない貧乏な日本人はオーバーステイでも入管に収容されない」

ネルソン、パン屋で皿、スプーンとフォークを借り、ナイロン袋を逆さまにしてごはんと惣菜を皿に移し、椅子に腰かけて食べている。

三枝、横に座っている。

ネルソン「メイリーンはな、口は悪いが料理はいける」

三枝「たしかに料理はうまい」

ネルソン「密輸たばこ売ってるだろう。なぜ捕まえないか」というと、あいつら貧乏人にな。

はなくてはならないものを売っているからな。1箱450円もする正規のたばこなん

て誰も買えない」

三枝「わかるけど」

ネルソン「それなら見逃して、少し賄賂をも

らつてるほうがみんなのためだろう」
三枝「一理はあるが、150円で売れるのに

2 2 0 円になつてゐる

ネルソン「まあな、俺が全部取つてゐるわけじ
やない。上司や同僚に配らないといけない
からな」

三枝「キカイやティトボイが言うには、ネ
ルソンは賄賂を受け取つて、高級車や家を
買つてゐる。警官としての職務を怠つてい
るから、ギヤングはやりたい放題。麻薬密
売人は野放しで、中毒者が増えてゐる」

ネルソン「ほう、ずけずけと耳の痛いことを
言うじゃないか！まあ何とでも言つてく

れ！俺が一番許せないのは近所の子供を
集めて盗みや恐喝、物乞いをさせたりする
やつらだ。金は巻き上げ、食事やおやつだ
け与え、学校には行かさない。結果、子供
は将来ギャングになるしかない。入り口近
くにN P Oがあるだろう。彼らも子供たち
を助けようとがんばつてるがほとんど効果
がない。俺も少年ギャング団を束ねてゐる
ボスを捕まえたいが、自ら手を下さない奴

を捕まえるのは難しい

三枝「少年ギヤング団を見た。なんとかしろ

よ」

ネルソン、食べ終わり、皿、スプーン

フォークをパン屋に返している。

ネルソン「またな、物売りなんかやめて、日
本人にしかできないことを考えろ！」少し
はスラムの役に立つようなことをな

第2話

○ トンド・墓地・パパジーの家・前

アイナ・アラ、女友達2人とビニール

プールに入り、歓声をあげている。

キカイ、椅子に座つて監視している。

三枝、やつてくる。

三枝「環境は良くないのにアイナもアラも素直ない子たちだ」

キカイ「メイリーンがしつかりしているからね」

ね

アイナ「ボス、一緒に泳ごう、プールに入つ

て！」

三枝「そのプールは小さすぎる」

アイナ「それじやあ、息止めて潜るから、何

秒か数えて？」

三枝「ようし、30秒我慢出来たらコーラを

買ってやる」

アラ、友達、キカイ、アイナを応援している。アイナ、潜る。

三枝 「1 , 2 , 3 , 4 , . . . 3 0 ━」
　　「アラ、友達、キカイ、大喜び。」
　　「アイナ、ガツツポーズ。」
　　「三枝、にこにこしながらコーラを買
　　に行く。」

○ 同・NPO事務所
　　「古い建物。壊れかけたNPO
　　IC-Eの看板がある。」

I C E の 看 板 が あ る 。
N P O

三枝、「どんなん活動しているのかと思つて覗い
てみただけです」
アンジエリン「なんでしょうか?」
アンジエリン「韓国人ですか?」
三枝「日本人ですか?」
アンジエリン「日本人ですか?」
アンジエリン「英語上手ですね。日本人が来
たのは初めてです。お入りください」

ア を 開 け る 。
アンジエリン(女25) 気が付いてド

ス タ ッ フ 2 名 、 仕 事 を し て い る 。
O F F

三 枝 、 中 を 覗 い て い る 。
O F F

三枝、入っていく。

アンジエリン、三枝、ソファに座つて
いる。

アンジエリン「私たちの活動は虐待から子供
を守る、働かされている子供を保護する、
家庭内暴力、性的虐待などから子供を守る
などが主です」

三枝「成果は上がっていますか？」

アンジエリン「少しずつです。ここには15

00人ほど子供がいますので」

三枝「そんなにいるんですか？」

アンジエリン「はい、でも資金が足りないも
のですから、どうしても限界があります」

三枝「ボランティアは足りていますか？」

アンジエリン「ボランティアは足りています。

日本人ならお金持ちですよね。いくらかで
も支援していただければ助かります」

三枝「金はありません。ここに住んでるくら
いですから」

アンジエリン、呆気にとられて、

アンジエリン「フィリピンでも最下層の地区です。こんなところに住む日本人なんてどうかしてますよ。危険だし、不衛生だからさっさと出て行つた方がいいですよ」

三枝「お邪魔しました。お役に立てなくて申し訳ありません」

三枝、出でいく。

○ヴァレンズエラ・リムの家・居間

豪邸。民兵が2名、ライフルを持ち、玄関で見張つている。

リム（男57）、タン（男51）、中国茶を飲み、月餅を食べながら話している。

メイド、ティーポットを持ちながら、立つている。リム「三枝にメールしても電話してもまつたく返事がない。ラインを送つても既読にならない。タンさん、なにか知ってるか？」

リム「三枝にメールしても電話してもまつたく返事がない。ラインを送つても既読にならない。タンさん、俺も3度ほど電話したけど、返

事がない」

リム「ゴルフ練習場で出会い、何十回も共にプレイした良きライバルだったが、日本に帰ったのかな。俺に挨拶もなしにいなくななるなんて信じられない。事故にでもあったんだろうか。ゴルフに行くたびにあいつのことを見出す」

タン「タガログ語も英語もネイティブ並みに話せる。あんな日本人には会つたことがない。仕事もせず遊んでばかりなのに、どうして金が続いているのか不思議だつたよ」

リム「三枝の手下でポン引きのパパ活っていいただろう」

タン「真面目なやつだつたな。ゴルフと一緒に行き、プレイ中はずつと待つていて、夕方、俺たちは食事と酒で楽しんだが、彼は一切飲まずに酔っ払つた俺たちをアセアナ、マカティ、オルティガス、ケソン、最後にヴァレンズエラまで送り届けてくれた。そ

スを乗り継いで帰宅したはずだ。丸一日つ

きあわせたんだ、チップを奮発したよ」

リム「俺もけっこう払った。払いなくなるわ
な」

タン「何度も付き合わせたからいい稼ぎにな
つたはずだ。セバスチャンは自分の好みに
合つた最高の女性を紹介してもらつたつて
言つてたな、パパジーはセバスチャンの女
性の好みがわかるようで、いつも間違いな
く気に入る女性を連れて来るらしい。セバ
スチャン曰く、ポン引きは彼が一番だと」

リム「パパジーに電話したいのだが番号を知
らない。これまで三枝を通して連絡して
いたから」

タン「そうだつたか」

リム「1年前かな、俺のサンダル工場で働く
中国人がフイリピンのIPOが欲しいって言
うから、試しにパパジーに頼んだら3日で
精巧な偽造IDを持ってきて驚いた」

タン「そのID見たいな」

リム「今度見せてやるよ。別の中国人も I D を欲しがっているが、三枝に連絡取れないから困ってる。もし何かわかつたらすぐにお知らせてくれ」

タン「パパジーはトンドに住んでいと言つていた」

リム「スラムだろうな、パパジーとしかわかつてないんじや探すのは無理だ」

タン「ポン引きだから夜のマビニ界隈、マカティのブルゴス、ケソン通りにいるかな」

リム「どこも夜は人通りが多いし、危険だな。探しにはいけない」

○ トンド・墓地・三枝の家

1週間後。

家の前にはアイスクリームの手押し車。アンジエリン、やつてくる。三枝、寝転がっている。アイナ、アラ、三枝の横でポテトチツ プスを食べている。

アンジエリン「あーいたいた。やつと見つけたー。おばあさんが日本人ならここだつて教えてくれた」

三枝、起き上がる。

アイナ、アラ、振り向く。

三枝「N P Oの人だつたよね」

アンジエリン「娘さん？」

す」

アンジエリン「この前はここに住むのを止め

た方がいいなんて失礼なことを。すみませんでした。私はアンジエリンといいます。今日はお願ひがあつてやつてきました。知り合いが日本語教師を探してゐるの。やつてみませんか？」

三枝「いきなり言われても・・・うーん！」

三枝「三枝、戸惑つてゐる。

教え方がわからぬ」

アイナ、アンジエリンの横に来て、

アイナ「教えるの上手だよ。私の算数の先生

なんだ

アンジエリン「あらまあ、そうなの、だつて
あれだけ英語、タガログ語を話せたら、教
えられると思うよ。アイスクリーム売りよ
りいいと思うけど」

三枝「うーん、場所は？」

アンジエリン「チャイナタウン、週3回、各
2時間、給料は安いけど」

三枝「一度、見させてくれる？」

アンジエリン「明日、どう？」

○ヴァレンズエラ・リムの家・リビング

リム、妻のリンロン（54）、話してい
る。

リンロン「明日の夜、みんな集まるでしょう。

長男夫婦が子供を3人連れて、ドンドン夫

婦、長女も来る」

リム、うなずいている。

リンロン「長男夫婦が子供を連れてきて賑や

かになるのはいいのだけれど、ドンドンに

は子供がないでしょ。話題が長男一家に偏つてしまふ。あんなに子供を欲しがつて、いたのに、奥さんの子宮に問題があつて、もう子供は難しいようね」

リム「それで夫婦関係もギスギスしてるようにだな」

リンロン「それが心配、犬を飼つてみたものの、効果ないみたい」

リム「結婚して7年になるか、代理母に産んでもらうなんてどうかな？」

リンロン「あてはあるの？」

リム「長男の嫁のマリリンに頼めないか？」

リンロン「無茶言わないでよ」

リム「どうしても欲しいんだつたらなんとかしないとな」

○ トンド・墓地・三枝の家

パジー「アイナが会いたがつてる」

パジー「三枝、寝転がつていいる。

パジー「やつてくる。

三枝「なんだろう、後で行くわ」

パパジー「ボスは元気そう。まだ死にたい気持ちはある?」

三枝「元気なのはアイナとアラがなついてくれるからかなあ。金はないのに以前より楽しそう」

パパジー「おうおう、それでなくちや、連れてきた甲斐があつた」

三枝、スマホを見ながら、

三枝「またリムさん、タンさんからメールがきていい。これ以上無視するのはあまりにも失礼なので、あとで電話してみるわ」

パパジー「墓地に住んでるとは絶対言つてはダメだよ」

三枝「言わない。連絡しなかったのは日本に帰つていたと言えば納得してくれるだろう」

○ 同・パパジーの家

三枝、皿を持つてゐる。
メイリーン、客と話している。

アイナ、ノートを持って駆け寄つて、
三枝にしがみつき、ノートを見せる。

アイナ「ボス、見て見て、算数で90点だつ
た」

三枝、ノートをチェックしている。

三枝「アイナ！ やつたなあ、でもな、算数
は100点じやなきやだめなんだ。EXC
E L E N Tを目指せ」

アイナ、不満な顔。

三枝、アイナの頭に手を置いて、
三枝「もう少しだ！」がんばれ、ご飯食べた
らまた教えてあげる」

アイナ、につこり笑つて、

アイナ「うん」

メイリーン、微笑みながら、

メイリーン「今日は何食べる？」

○ 同・三枝の家・（夜）

三枝、電話している。

三枝「リムさん、すみません、何度も連絡も

らつていたのに、日本に急用ができて帰つてきました。ようやく落ち着いたので戻つてきました」

三枝「三枝、聞いていいる。

三枝「はい、はい、わかりました。偽造IDの件ですね」

○チャイナタウン・日本語教室

ビルの一室。机と椅子とホワイトボードだけのシンプルな部屋。

三枝、アンジエリン、後ろで見ている。

先生はフィリピン人女性。採血の時の会話を日本語で教えていく。

生徒は若い女性8人。机の上には教材が開かれている。熱心に聞いている。

先生「こんにちは、今日は採血ですね。少しチクつとしますが、すぐに終わります」

アンジエリン、三枝の耳元で小声で話す。

アンジエリン「日本に看護師として働きたい

女性ばかり

三枝「みんな真面目に勉強してるな」

アンジエリン「当たり前でしょ。試験は難しいし、生活がかかつてるからね。この先生は悪くはない。ただ生徒たちは日本人の先生に教わりたいという希望が強い」

三枝、しばらく授業を見ている。

三枝、アンジエリンに耳打ちする。

三枝「やつてみる。評判が悪かつたらすぐクビにしてしてもらつてかまわない」

アンジエリン「決まりね。教材を取りに行こ

う。事前に勉強してね」

○ヴァレンズエラ・リムの家・居間

リム、パパジー、中国人男性、話して
いる。
リム、中国人男性を指さして、封筒から書類と写真を取り出している。

リム「遠いところをすまなかつた。これがこの男の写真とデータ、前と同じようにして

くれたらしい」

パパジー「わかりました。お預かりします」

リム「三枝は元気なのか?」

パパジー「右ひじを痛めてゴルフができないようです。それ以外は大丈夫です」

リム「飯でも食べに行こうと伝えてくれ」

パパジー「はい」

リム「わざわざ来てもらつたのは相談があるからなんだ」

リム「お前は帰つていいぞ、I Dは任せたおけ」

中国人男性、につこり笑い、パパジー

に握手して出ていく。
リム、再びパパジーに向かって、

リム「代理母つて知つてるか?」

リム「うちの次男夫婦は奥さん問題があつて、子供ができない。それで代理母になつてくれる人を探したいのだが」

パパジー「お金を払うつもりですか？」

リム「そのつもりだ」

パパジー、目をつぶり、顎を引いて左手で顔を覆っている。少したって、左手を下ろし、目を開けて、リムを見て、

パパジー「代理母を探すことは可能ですが、申し訳けないのですが、関わりたくあります」

リム「どうして？」

パパジー「報酬を払って代理母に出産させる

リム「それはわかっている」

リム「それはわかつてよね」

パパジー「そうですよね。リムさんが知らないはずはない。わかつて頼みたい・・・」

リム「その通り」

パパジー「敢えてやつたとして、・・・出産ま

でに1年かかるのは長すぎます。その間に

様々なトラブルが起ころのが目に見えてい

ます。私が間に立つてそのトラブルに対処

するのは正直辛い。リムさんが直接頼むな

ら別ですが・・。いやあ、やはりお金を払う代理母はやめたほうがいいと思います」

リム「そうか、パパジーでもダメか」

パパジー「お金のやり取りがない、善意の代理母はどうですか？ 親族で誰かいないのですか？」

リム「長男の嫁がいいと思ってるんだが・・」

パパジー「お嫁さんが了解してくれるなら・・」

リム、天を仰いでいる。

リム「ゆつくり考えるわ、偽造IDはよろしくな」

パパジー「3日後にはお届けします」

○ トンド・三枝の家

三枝、教材を読んでいる。表紙に（介護の日本語）と書かれている。横には2冊教材が置かれている
パパジー、やつてくる。
パパジー「おつ、勉強しててるな！ 邪魔してすまない」

三枝、教材を閉じて、顔を上げる。

「こうな儲けになります」
三枝「大金持ちだからな、いくらでも儲けた
らしい」

パパジー「代理母を探してくれないかと言わ
れました。断りましたけど」

三枝「たしか息子さん夫婦が子供がないいつ
て言っていた。代理母を探すなんて切実な
状況だな。俺も子供ができなかつたのでそ
の気持ちはよくわかる」

パパジー「飯を食べに行こうって言つてしま
たよ。行つてきたら？」

三枝「金がない」

パパジー「奢つてもらえるでしょう」

三枝「いや、ルールがあつて、今まですべて
割り勘。それが対等の関係を保つためだつ

た」「いやあ偽造ＩＤで儲けた金を使つ

て」

○ トンド・墓地・内

ネルソン、警官3人、歩いてくる。

三枝、パンを買っている。

ネルソン、三枝を見て、

ネルソン「アイスクリーム屋はやめたのか？」

三枝「やめた。チャイナタウンで日本語の先

生をやる」

ネルソン「無難だな。まあアイスクリーム売

りよしましだけど、おもしろくねー」

三枝「ネルソンがほーっていう仕事ってなん

だよ？」

ネルソン「知るか！自分で考えろや」

○ 同・ティトボーキの家・前

ティトボーキ、若者とチエスを指して

いる。

三枝、覗き込んでいる。

ティトボーキ、三枝に気が付いて、

ティトボーキ「どうした、日本人」

三枝「代理母つてどう思う？」

ティトボーア「なんだ、いきなり」

三枝「代理母になりたい女性つているだろ
う?」

ティトボーア「いくらでもいるけど、俺はやら
ない」

三枝「ほう?」

ティトボーア「金を払って出産させること自
体が許せない。それより麻薬の密売をやら
ないか? パパジーに聞いたぞ、金持ちの
知り合いが多いんだつてな。上流階級にな
ら高く売れるぞ」

三枝、笑つている。

三枝「代理母は許せないなんてまともなこと

を言うなと思ったが、麻薬は許せるのか。」

俺みたいなやわな人間には向いていない」

ティトボーア「腎臓はどうだ、儲かるぞ!」

三枝「おいおい、臓器売買は代理母よりひど
い」

リム・(夜)

リム、リンロン、長男、長男の妻マリ
リン(女33)、長男の子供3人、長女、
次男ドンドン(男31)、ドンドンの妻
ヴィルマ(女27)、食事をしている。

メイド2名、飲み物を持つて立つてい
る。

リム、改まった表情でマリリンに話
かける。

リム「マリリン! 真剣に聞いてほしいのだ
が? 知つてのとおり、ドンドン夫婦は子
供ができるない、彼らのために代理母をやつ
てくれないか?」

リンロン、青ざめる。

長男、怒りに震えている。
マリリン、ナップキンを机の上に叩きつけ、立ち上がる。

マリリン「私をメス豚と思っているのです
か? 出産することがどれほど大変か、お
父さんは何もわかつていな。もう食事は

けつこうです。帰ります」

マリリン、震えながら出していく。

リム、大きく目を開いている。

ドンドン、頭を搔きむしって、

ドンドン「俺は何も知らない。お父さんが勝

手に言い出した」

ヴィルマ、涙を浮かべて、

ヴィルマ「子供は欲しいけど、お姉さんに代

理母を頼むなんて・・・」

リム、頭を抱え込んで、突つ伏してい
る。

○チャイナタウン・日本語教室

生徒8名、椅子に座つて、三枝を見て
いる。

三枝、教材を横に置き、生徒を見回し
て、英語で話す。

三枝「今日から講師を務める三枝です。日本人です。まずはどれくらい日本語を話せる
か、実力を知りたい。日本語で自己紹介で

きるか？』

エドナ（24）、手を上げて、
エドナ「私はエドナです。24歳、ビヌンド
に住んでいます。独身です。日本で看護師
になりたいです」

三枝、感心している。

三枝「おう、勉強しているな、よし！ 次！」

○同・入り口

授業を終えて三枝、出てくる。

エドナ、入口で立つて待っている。

エドナ「先生、時間ありますか？ コーヒー

でもどう？」

三枝、足を止めて、

三枝「なぜ？」

エドナ「もつと日本語で話したい。日本人に

会うのは初めてだから」

三枝「個人授業ってこと？」

エドナ「お金はないのでそれは・・・。彼女

はいるんですか？」

いなければ彼女になつ

てもいいけど

三枝「断る！彼女になつてもいいって、そ

の言い方が気に入らない」

エドナ「冷たいですね」

三枝「会つたばかりじやないか！」

エドナ「先生はどこに住んでいますか？」

三枝「トンド墓地」

エドナ、眉をしかめて、

エドナ「墓地に住んでいるなんて最低」

○ヴァレンズエラ・リムの家・リビング

リンロン、「いきなりあんなこと言つたら、誰

リム、首をかしげている。

リム「失敗した」

リンロン「だつて怒るでしょう」

リム「私が謝つておくけど、当分、誰も

遊びに来ないだろうね」

リンロン「俺も謝りに行くか」

るまでおとなしくしていなさい」
リム「代理母は諦めた。他に方法はないか?」

リンロン「副市長なんだからなんとかしさ

いよ」

リム「ううう」

リンロン「ドンドンが愛人を囲い、子供を産

ませて引き取るなんてどう?」

リム「? ? ?」

リンロン「子供を誘拐してきたら」

リム「刑務所行きだな」

リンロン「じやあ養子をもらつたら」

リム「養子しかないか」

リンロン「正式な養子縁組は時間がかかるみ

たい、大学の友人は5年待つてようやく認

められた」

リム「考えてみるわ」

○ トンド・墓地・三枝の家

三枝、パソコンを操作している。
アラ、三枝の横でスライムをこねている。
る。

アイナ、紙を振りまわして入ってくる。

アイナ「ボス、見てー！」

アイナ、答案用紙を見せる。

アイナ「100点取ったー。EXCELLEN

Tだよ」

三枝、答案用紙に見入る。

三枝「おおおーやつたなー！」アイナ、お

めでとう」

三枝、アイナを抱え上げ、頭上高く持ち上げる。

アイナ、両手を高く上げ、回している。
アラ、一緒に喜んでいる。

○ ロックウェル・イタリアレストラン
高層ビルに囲まれていて、周囲は木に
覆われて目立たない。高級店。

三枝、リム、料理を食べながら、話して
いる。

リム「肘はどう?」

三枝「当分、ゴルフはできそうにありません」

リム「三枝とは実力が拮抗して、いいライバルだつただけに残念」

三枝「治ればまた勝負しましよう」

リム「パパジーから何か聞いてるか?」

三枝「息子さんが子供を欲しがつていて、代理母を頼まれたことですか?」

リム「代理母は諦めた。不用意に長男の嫁に代理母になつてくれとお願いして、家族全員に激怒された」

三枝「リムさんらしくもない」

リム「それで相談なんだが、養子を貰いたいと考えている」

三枝「養子ですか? フィリピンなら簡単でしよう」

リム「それが簡単ではない、養子縁組法って知ってるか?」

三枝「すみません、勉強不足でまったく知識
がありません」

リム「養子縁組には家庭裁判所の審判が必要
で、仮に認められたとしても手続きに5年
ほどかかるかもしれない。さらに審判だから
ら、必ずしも認められるとは限らない」

三枝「日本の方が簡単だったような」
リム「そうなのか。それでだな、煩雑な手続
きなんか省いて養子を貰いたい」

三枝「はあ？」

リム「謝礼を払つて子供をくれということだ」

三枝、俯いて右の拳で左の手の平を叩
き、頬も2度叩いている。

リム「どうかしたか？」

三枝、真剣な顔で、

三枝「それは人身売買でしよう？」

リム「そうだな」

三枝「リムさんは副市長で会社も経営してい
る。発覚したら社会的信用を失いかねない」

リム「それは気にするな」

三枝「わかりますけど、そんなに簡単には？」
リム「できれば生まれてすぐとか、1歳2歳の子供がほしい」

三枝「考える時間をください」
リム「売り手と直接やり取りするのは避けたい。信頼できる仲介者といえば・・・、パパジーが最適だと思う。謝礼ははずむ」

○ トンド・墓地・三枝の家・（深夜）

三枝、考え込みながらパソコンを操作している。

○ 同・パパジーの家（朝）

三枝、パパジーを叩き起こしている。

三枝「俺の家に来てくれ、相談したい」
いく。
パパジー、さつと起き上がり、ついて

○ 同・三枝の家・（朝）

三枝、パパジー、椅子に座り、膝を突

き合わせて話している。

三枝、目が輝いている。

三枝「まずは礼を言わなくちゃな。金を出して
くれたおかげで有意義な話が聞けた」
パパジー「昨日、リムさんに会つたんだ」
三枝「ようやくやりたいことが見つかった」
パパジー、身構えて、前のめりになつ
ている。

三枝「養子斡旋をしたい。貧乏人の子供を金
持ちの家に売る。一緒にやらないか?」

パパジー「真面目な顔して单刀直入に言うも
んだ」
三枝「これは犯罪だ! 罪状は人身売買」
パパジー「刑務所に行くことになるといふこ
とか」

三枝「覚悟を決めた。死のうと思つたんだか
ら刑務所に行くくらいなんてことはない」
パパジー「なぜやりたいと思つた?」
三枝「お互にウインウインだからだ。金持
ちも貧乏人もどちらも喜ぶ。それだけだ」

パ　パ　ジ　ー　、大　き　く　た　め　息　を　つ　く　。

三枝「いろいろ調べてみると、法律は子供のことを見第一に考えている。それは俺も同じだ。この人たちなら子供を預けられる。きちんと育ててくれると判断したらやる」

パ　パ　ジ　ー　「ふ　む　ふ　む　」

三枝「たまたま俺は上流階級の人々と関りがある。それなのに最下層の墓地に住んでいる。ということは上流階級と下流階級の橋渡しができる」

パ　パ　ジ　ー　「そ　れ　は　そ　う　だ　」

三枝「といつても下流階級の知り合いは少ない。パパジーと組めばやれそうに思う」

パ　パ　ジ　ー　「俺　に　刑　務　所　に　行　け　と　い　つ　て　る　ん　だ　」

な　」

三枝「そうだ。でも行かせない」

三枝、「どうやつて？」

三枝「さあな？」

パパジー、「わかつてないんだ」

パパジー、「わかつてないんだ」

三枝「ゆつくり考えるさ」

三枝「まだわからない」

三枝「まだわからない」

パパジー「どれくらい儲かる?」

パパジー「俺が聞いた話ではたしか3万円く

らいだつたかな」

三枝「実際にあつたんだな! そんな安い金

額で売る気はない。それでは上流階級だけ
が喜び、下流階級は喜べない。ワインウイ
ンの関係にはならず、俺たちにも利益がな

い」

パパジー「そうだな」

三枝「どうだ! やつてみるか」

パパジー「ポン引きも飽きてきたし、ボスが

やる気になつたんだ。やるよ」

三枝「あと何人か仲間がほしい、誰がいい?」

パパジー「パパジー、頬をつまんでいる。

パパジー「ティトボーカナ」

三枝「ほう、ヤクザな兄さんだな。」

NPOの

アンジエリンは役に立つかもな？ もう一

人、ネルソンはどうだ』

パパジー、あからさまに嫌な顔。

いすれば必要になるかも知れないけど』

○ トンド・路上

ベル（女25）、歩道の上で段ボールを敷き、大きいお腹を上にして寝転がつ

て いる。

ラップ（男30）心配そうに見ている。

前には缶が無造作に置かれている。そ

の横に紙が貼られていて「子供が生ま

れます。助けて」と書いてある。

ラップ「お腹が大きくなつてきたな」

ベル「子供を産みたくない。避妊すると言つ

ていたのに、守らなかつたお前のせいだ。

病院にも行けないし、辛い」

ラップ「ここで物乞いしてもいくらにもな

らない。なんとかしなきや、外で稼いでく

る
』

○ 同・バス乗り場

ラップ、小さな紙に「子供が生まれます、お金がありません、助けてください」と何枚も書いている。横には封筒の束が置かれている。

バスがやってくる。

ラップ、バスに乗りこみ、紙と封筒を乗客に次々と渡していく。最後尾まで配り終え、少し待つてから紙と封筒を

回収していく。

封筒に10円、20円、中には10円を入れる人もいるが、ほとんどの人

は空の封筒を返している。ラップ、封筒を集め終わったら、ありがとうと言つてバスから降りていく。

ベル、寝転がつてゐる。缶には少しだ

○ 同・路上

け小銭が入っている。

ラップ、帰つてくる。手にはライス、
シユーマイ、水、枕とクツショソを持
つている。

ラップ「10回以上バスに乗りこんだら70
円くらい集まつた」

ベル、「枕とクツショソはありがとう。お腹ペ
イを皿に入れ、醤油とカラマンシーを
絞つて食べ始める。

ベル「枕とクツショソはありがとう。お腹ペ

ラップ「頑張つても病院に行くお金は集まり
そうにない」
ベル「わかつてる。生まれそうになつたらあ
そこ草むらの中で産むわ」

ベル、草むらを指さしている。
ラップ、顔を草むらに向けて、

ラップ「草むらって、野糞するみたいに言
うなよ」

○ トンド・三枝の家

三枝、パパジー、話している。

パパジー「ティートボーアと話した。あいつは悪いことも平気ですけど、仲間が多く、口が達者。そして喧嘩が滅法強い。刑務所に入ったこともある。役に立ちそうなのだが、ボスのことを信用していないのが問題」

三枝「そうか」

パパジー「それでもあいつを引き入れる」

三枝「まかせた」

パパジー「アンジエリンも躊躇している。N

88

P Oを解雇されるだろうし、刑務所はもつと嫌だと

三枝「そうだろうな」

パパジー「ところが、いきなり情報をくれた。

トンドの路上に夫婦のホームレスがいて、お腹が相当大きいらしい。話して来たらと言われた

三枝、ぐサイン。

三枝「アンジエリンは脈ありだな。手始めに

そのホームレス夫婦に会つてこい！ できればティトボーアと二人で。但しだ！ 子供を買うとはまだ言うな』

パパジー「なぜ？」

三枝「こちらはまだ何も決めていないからだ。

ホームレス夫婦の年齢とか、どんな暮らしだとか、どこで産むのか、健康状態はどうか、子供を産んだ後どうする気なのか、それから夫婦の写真がほしい。まずは情報を集めてくれ』

パパジー「わかった。明日、ティトボーアと行く』

○ トンド・路上

翌日。

ベル、段ボールの上で枕に頭を乗せ、クツショーンを腰にあて、横になつている。

ラップ、そばにいる。

パパジー、ティトボーア、歩いてきて、

いきなり話しかける。

ティトボレイ「NPOなんだが、話を聞かせ

てもらえないか?」

ラップ「なんだよ?」

ティトボレイ「若いのになぜホームレスなん

だ?」

ラップ「ミンダナオから来たんだけど、仕事

が向いてなくて」

ティトボレイ「何歳?」

ティトボレイ、ベルを見て、

ベル「25歳」

ティトボレイ「出産が近いんじゃないか?」

ベル、「そうだよ、見ての通り」

ティトボレイ「出産が近いんじゃないか?」

ベル「そうだよ、見ての通り」

ティトボレイ「病院には?」

ベル「そんなお金ない」

ティトボレイ「病院には?」

か?」

ホーリー「生まられそうになつたら行くの

か?」

ベル「パパジー、隙をみて二人の写真をスマ

ホーリー「何枚か撮つている。」

贝尔「で何枚か撮つている。」

ティトボレイ「生まれそうになつたら行くの

ベル「行かない、ここで産む」

—

ティートボーアイ「なにかあつたらどうする？」

ベル「そんなのわからいでしょ」

—

ベル「初めだよ。産みたくないよ、流産し

てくれないかと神様にお願いしたけど叶え

—

ベル「くれなかつた」

ティートボーアイ「産んだらどうする？」

—

ベル「捨てるわけにもいかないし、教会で

もそつと置いておこうかな。教会ならなん

とかしてくれるでしょう」

ティートボーアイ「赤ちゃん欲しくないのにな

ぜ？」

ベル、ラップを指さし、

ベル「こいつが嘘つきだから」

ティートボーアイ「やつと笑つて、

ティートボーアイ「うなのか、お前らは1日中

こにいるのか？」

ラップ「いるけど、雨が降つたらここにはい

ない。空き家の前にいる。そこなら雨に当

たらない」

ラップ、空き家を指さしている。

ティトボーア「話を聞かせてくれてありがとう。
う。これで栄養のあるものでも食べて」
ティトボーア、500円を缶の中にい

ラップ、「いいのか、ありがとう」
ラップ、驚いている。

ベル、不思議そうにティトボーアを見
ている。

○ 同・路上の近く

ティトボーア、パパジー、歩きながら

話している。

ティトボーア「日本人は本気なのか？」貧乏

だし、頼りなさそうだし、パパジーのボス

だろうが、どうも信用できない」

パパジー「やるだけやつてみれば？」

いけば儲けものだろう？」

ティトボーア「それはなんだが……。」

自殺したがつてるんだろ？」

パパジー「多分、もう死なないとと思う。顔つきが変わってきた」

ティトボーリ「日本人は信用しきれなけれど、パパジーとは長い付き合いだからな。まあお前を信じて手伝うわ」

パパジー「おう、それはそうとあのホームレスと話してどう思つた？」

ティトボーリ「あれなら100%喜んで子供を売るな」

パパジー「だな」

ティトボーリ「病院に行かせないと、いつ産気づくかわからない、入院費用を日本人は用意できるのか」

パパジー「そうだな。それは相談する。お前、この仕事向いてるんじやないか、完璧だった。いきなりNPOって言つたのにはびっくりしたけどな」

ティトボーリ「あんなやつらと話したくないが、詳しく聞きださないと」

パパジー「ははは」

パパジー、ティトボーアイの肩に手を乗せている。

ティトボーアイ「あの500円、日本人は払ってくれるかな。可哀そで思わずお金を出してしまった」

パパジー「俺が払ってやる」

○ヴァレンズエラ・リムの家・リビング

三枝、リム、リンロン、ドンドン、ヴィルマ、ドウファーレタピオカミルク

ティを前に、話している。

三枝「私が養子斡旋をやります」

リム「ほう、三枝がやるのか！」

腹を括つた

んだな」

三枝「私が仲介役をします。売り手と買い手

は直接顔を会わせることはありません」

リンロン「そうしてもらえるとうまくいきそ

う」

三枝「売り手はリムさんが買ったことを知る

ことはないので、発覚する心配はありません。ただし、リムさん側の誰かが漏らす可能性が気がかりです」

リンロン「あなた！ 長男には話します？」

リム「話さないわけにはいかないだろう。使用者が不審に思わないような説明が必要だな」

ドンドン「それは俺たちが考えます」

リム、一呼吸置いて、

リム「三枝よ、実はまつたく心配はしてない。俺は副市長だ。たとえ発覚しても、警察なんてどうとでもなる」

三枝、納得している。

三枝「あーあー、確かに！」

リム「子供は見つかりそうか？」

三枝「必ず見つけます。それで謝礼の金額は500万が妥当と考えているのですが、どうですか？」

ドンドン、顔をしかめている。

ドンドン「500万！」高いじゃないですか？」

リム、うなずいている。

リム「俺は法外な金額ではないと思う。子供をもらうんだぞ、俺が払つてやる」

ドンドン「そこまで言うなら……」

三枝「もちろんですか？」
ヴィルマ「赤ちゃんの写真とかデータは見せてもらえますか？」

○ トンド・墓地・三枝の家・前

三枝、aina、アラ、キヤツチボールをしている。

パパジー、ティトボーカ、やつてくる。

三枝、キヤツチボールをやめて部屋に入る。

パパジー、「あいつら汚いから体裁よくみせるを見せている。

パパジー「あいつら汚いから体裁よくみせるために写真を加工したら？」

三枝「やめておこう。ありのままがいい」
ティトボレイ「日本人！　本当にまとめられるんだろうな」

パパジー「おいおい、ボスに向かってそれはないだろ、口の利き方に気をつけろ！」
ティトボレイ「まだ信用できない」

三枝「今は信用しなくていいが、頼みがある。複数の赤ちゃんを用意して買い手に選ばせたい。他のスマムの知り合いはないか？」
何人か仲間に引き入れて、探してくれ」

パパジー「そうだな」
ティトボレイ「やるけどな」

○ヴァレンズエラ・リムの家・リビング
リム、リンロン、ドンドン、ヴィルマ、
集まっている。

リム、パソコンを見ている。
リム「写真とデータが来たぞ、ミンダナオ出
身のホームレス夫婦、ええつーまだ生ま

れてない。お腹が大きい、出産がもうすぐだ」

リム、パソコンの画面を全員に見せている。

リンロン「うわつ、薄汚れた夫婦じゃない、男は頼りなさそうだし、女は若いのになぜホームレスなの？ 最悪！ どうせ売春とかして、性病にかかるわよ」

リム「待て待て、そんなの検査すればわかるだろう。もうちょっとまともなことを言ってくれ！ それにお前が育てるわけじやない。ドンドンたちの意見が聞きたい」

リンロン「私は絶対嫌だからね」

リム「もういい、喋るな、お前たちどう思う？」

ドンドン「現実はなんか生々しい。果たして子供を愛せるのかどうか、自分でもわからぬ」

ヴィルマ「お母さんは反対なんですね。ホー

ムレスなんて聞かなれば良かつた。生まられたばかりの赤ちゃんを育てられるのは最

高だとと思うし、子供は育て方次第でどうに
でもなるものでしよう?」

リム「お前たちが決めたらい。うちが引き
取らなかつたら教会に預けてしまうらしい」
ヴィルマ「お父さん、主人と真剣に考えます。
返事はもう少し待つてください」

○ トンド・墓地・内

パパジー、三枝、ティトボーア、歩い

ている。

三枝「ホームレスの赤ちゃん、買い手が迷つ

ている」

ティトボーア「それをなんとかするのが日本

人の仕事だろう」

パパジー「迷わない方がおかしい」

三枝「パパジー、使うなと止められていたス

マホにある10万円を使いたい。いいか?」

パパジー「いいよ。無駄遣いしなくて良かつ

たな」

○ケソン・パヤタス・ゴミ集積場のスラム・

デレクの家

ゴミの巨大な山が見えている。猛烈な臭い。家はバラツクで山から離れた場所にある。狭いスペースに小さいテレビ、古い冷蔵庫などがあり。ぼろぼろのソファにティトボーアイ、デレク／2
4）。座っている。

デレク「子供なんてここにはたくさんいるよ。

隣の子なんかどう？　いつも母親がおまえ

なんか産むんじやなかつた。帰つてくるなんつて怒鳴つていてる」

ティトボーアイ「それは子供に言つてただけだ

ろ、本気じやない」

デレク「そうなのか、いやーあれは本気だな」

ティトボーアイ「デレク、以前、警察に捕まつ

ただろ。あの時なぜゲロしなかつた？　喋

つてたら刑務所に行くことはなかつたのに」

デレク「俺はバカだけど、口は堅い。喋らな

いと決めたら殴られようが拷問されようが絶対に話さない」

ティトボーア「刑務所にまた入ることになつたらどうする?」

デレク「面倒見てくれるんだろう。喜んで行くよ。金があれば刑務所も天国さ」

ティトボーア「ほんと、バカだよな」

デレク、両手を強く叩いている。

デレク「おっ! 思い出した。子供を売りたいって言つてた女がカビテにいた。あとで連絡するよ」

○ サンタメサ・線路脇のスラム

線路上を少年2人がトロッコを操り、客を運んでいる。電車が走つてくるので、客を降ろし、トロッコを抱え上げて線路脇に運ぶ。電車が通り過ぎると、再びトロッコを線路に乗せ、客と共に走り出す。

パパジー、ロメロ（男30）、線路脇

のベンチで話している。

パ　パ　ジ　ー　「ロ　メ　ロ　！」　こ　ん　な　に　う　る　さ　く　て　危
険な場所によくもまあ住み続けられるもの
だ　な　」

ロ　メ　ロ　「墓地に住んでるやつに言われたくない
い　ね　」

パ　パ　ジ　ー　「墓地は静かだぞ　」

ロ　メ　ロ　「気持ち悪い。死者への冒涜だ。たた
ら　れ　る　」

パ　パ　ジ　ー　「あいかわらず何人も彼女がいるの
だ　ろ　う　な　」

ロ　メ　ロ　「あたりまえだろ　」

パ　パ　ジ　ー　「ところでな、女のけつばかり追い
か　け　て　な　い　で　仕　事　手　伝　わ　な　い　か　？」

○　ト　ン　ド　・　墓　地　・　N　P　O　・　前

パ　パ　ジ　ー　、　N　P　O　事　務　所　前　を　通　り　過　ぎ
よ　う　と　し　て　い　る　。　ア　ン　ジ　エ　リ　ン　、　パ　パ　ジ　ー　に　気　が　つ　き　、
事　務　所　か　ら　出　て　、　メ　モ　と　写　真　を　渡　す　。

パパジー、歩きながら、写真を見て、

メモを読んでいる。

メモには（3歳の女子、母親はシングルマザーで名前はマイキー、カナダで働きたいのだが、子供の面倒を見て働く人がいないので行くことができない。大切に育ててくれるなら譲ってもいい。条件がひとつある。買い手に直接会わせてほしい。いい人かどうか確かめたい）

パパジーニ「買い手に会うのは無理だな。まあボスには伝えるけど」

○チャイナタウン・日本語教室

三枝、教材を閉じている。生徒は8人。

三枝「はい、今日はここまで」
生徒7人帰っていく。エドナ、待つて
いる。

三枝「なんか用か？」

エドナ、頭を下げている。

エドナ「先日は失礼しました」

三枝「あー」

エドナ「日本人は謝るときには頭を下げる」と聞いたので

三枝「フィリピン人は謝らないからなあ」

エドナ「先生が墓地に住んでるって聞いて、驚きと嫌悪感でついつい。そのお詫びとして、ご馳走しますのでマクドに行きませんか？」

三枝「個人授業する気になつたのか？」

エドナ「ただのお詫びです。タガログ語で話してかまいません」
三枝「何か食べたいと思つてたので、つきあうわ」

○チャイナタウン・マクドナルド・内

三枝、エドナ、食べている。

エドナ「墓地に住んでいるつて言わない方がいいですよ」

三枝 「人間性を疑われるつてことだよな」
エドナ 「悩んでることがあるので、話を聞いてくれます？」

三枝 「はいはい」
エドナ 「私の姉はドバイで働いて5年になります。フィリピンで家を買うために、毎月両親に送金していました」

○(回想)ビヌンド・エドナの家

姉 「残高ゼロってどういうことなの！」

両親 「カジノで・・・」

エドナ 、頭を抱えている。

姉 、号泣しながら、

姉 「5年間、一生懸命働いたのが、すべて無駄になつた。もう金輪際、送金しない・・・」
(回想終わり)

○チャイナタウン・マクドナルド・内

エドナ「ところが両親はそのお金を見てカジノで使い果たしていたのです。姉は昨年、一時帰国した際にその事実を知り、激怒。

それ以来、両親への送金を一切やめました。姉と両親は絶縁状態です。ただ私にだけは送金してくれたので、看護師学校を無事に卒業することができました」

三枝「いいお姉さんじやないか、あなたの両親は最低だけど」

エドナ「姉には本当に感謝しています。私は

今、BGCの病院で働いていて、給料の半分以上を両親に渡しています。しかし両親は懲りた様子もなく、カジノ通いを続けています。口を開くと給料のいい日本で働きなさい。送金してくれたら、今度こそ家を買うために貯金すると」

三枝「またカジノに行つて使い果たすだろうな」

エドナ「そうですよね。日本に行けば私も両親と縁を切ることになりそうで、何のため

に日本に行くのかわからなくなっています」

三枝「日本に行つても送金しないほうがない」

三枝、そう言つて、おやつといふ表情。

三枝「話がそれるが、BGCの病院で何科にいるの?」

エドナ「産婦人科です」

三枝、食べるのをやめて、身を乗り出す。

三枝「BGCなら患者はお金持ちばかりだろ」

エドナ「お金持ちしか来ないですよ。設備は最高だから、医療費も恐ろしく高い。なぜ

そんなことを聞くんです?」

三枝、一瞬躊躇したが、話し出す。

x

x

x

エドナ「はあ、それで子供を欲しがっている

患者の情報を教えてほしいってことです

か?」

三枝「そういうことだ。もちろんお礼はする。

君から情報を得たといふのは誰にも話さない」

エドナ、考え込んでいる。

エドナ「それくらい簡単にできるけど・・・」

○ トンド・パパジーの家

三枝、皿を渡し、トレイを指さしてい
る。

メイリーン、ナイロン袋を被せた皿に
惣菜を入れていて。

アイナ、アラ、奥から飛び出してくる。
アラ、三枝に抱っこしてくれとせがむ。

三枝、アラを抱えている。

アイナ「お帰り。イカゲームしよう」

三枝「なに?」

アイナ「知らないの? ここまこしーにあさ
んただよ」

メイリーン「ドラマで有名になつたでしょ、

韓国語だよ」

アイナ、身振り手振りで教えていく。

三枝「あーー日本にもある。だるまさんが転
んだだ。よーし、ご飯食べたらやろう」

メリーン、笑っている。

三枝、お金を払う。

三枝「日本語学校で今日、給料が出た。今ま

でありがとう。今日から払う」

メリーン「いるないよ」

三枝「払わなかつたらまずい時にまずいつて

言えないじやないか」

メリーレン「まずい時あつた?」

三枝「ううん、いつもおいしい」

メリーレン「なーんだ、よかつた。

らつとくかな。クビになつたら、またタダ

でいいからね」

メリーレン「なーんだ、よかつた。じやあも

○ヴァレンズエラ・リムの家・リビング

リム、パソコンを見ている。

リム、パソコンを見ている。

集まつている。

リム、パソコン・ドンドン、ヴィルマ

リム「三枝からだ。まずは3歳の女子、シン
グルマザー、母親がカナダで働きたいのだ
が、子供の面倒を見てくれる人がいないの

で行くことができない、大切に育ってくれるなら譲つてもいいとな。うーーん、ただ問題がある。買い手に直接会わせてほしい。

いい人かどうか自分の目で確かめたい」

リム、写真をみんなに見せている。

ヴィルマ「かわいい女の子ね。でも直接会うのはどうかなあ」

リム「後で揉めるのは願い下げだ」

リンロン「3歳くらいからが育てて楽しいわよ。私はホームレスよりこちらのほうがいい

い」

リム「もうひとり、4歳の男の子、カビテの海沿いのスラムに住んでいるんだが、問題を抱えている。体が弱くて成長が遅れてい

る。病院に行くお金がない」

ドンドン「かわいそうだと思うが・・・」

リンロン「お金があれば子供を本当は譲りたくないのでは? そうね、この子はやめま

しよう」

ヴィルマ、頭を搔きむしっている。

○ トンド・墓地・三枝の家

パパジー、三枝、ティトボーアイ、話している。

ティトボーアイ「おい、日本人、うまくいったら俺たちはいくらもらえるんだ。どうしても聞きたい」

三枝「一度目はそんなに払えない。なぜかといふと俺たちが自由に使える金がまったくない。まず運転資金を作りたい。わかるか？」

ティトボーアイ「それはわかる」

パパジー「それでもいくらかはもらえるのだろう？」

三枝「100万くらいだろうな」

ティトボーアイ「それを山分けするのか、少な

いな」

三枝「一人の取り分だ」

ティトボーアイ、目を大きく見開く。

ティトボーアイ「本当か！」
いったい売り手が

払う金額はいくらなんだ」

三枝「500万」

パパジー、「ワオー、そりやすげー、もし刑務所に入つても金があるならメイリーンも喜ぶ」

三枝「メイリーンはパパジーより金が好きか？」

パパジー「聞いたことはないけど、多分ね」

○ トンド・墓地・ティトボーアの家・前

パパジー「ネルソン、歩いてくる。」

パパジー「気づく。パパジー、ティトボーアの家・前

パパジー「ボスがネルソンを仲間にどうだと言つてたんだが、俺は願い下げだ」

ティトボーア「俺も大嫌いだ」

ティトボーア、ネルソンを見て唾を吐く。

ネルソン「おい！ ティトボーア、パパジーと何をこそそ話してゐるんだよ、お前らな

んかしようとしてるんじゃないか、あの日

本人ともつるんでるみたいだし」

ティトボーア「つるんでもりや悪いのかよ」

ネルソン「儲け話だつたら俺にもかませろや」

ティトボーア「警官と組んでいいことなんか
あるかよ。権力振り回して賄賂を巻き上げ
ているだけじやないか、さっさと消えてく
れ、ギヤングでも捕まえて來い」

ネルソン「そうか、まあなんかあつたら頼つ
てこい」

○チャイナタウン・中華料理店・個室

リム、三枝、回転テークルを回しながら
中華料理を食べている。

リム「先に伝言がある。ホテル料理長の湯野
さんになぜ連絡しない！ 冷たい冷たいつ
て怒つてたぞ、電話してやれ」

三枝、しまつたという表情。

三枝「あー、後で必ず電話します」

リム「今日は俺に奢らしてくれ。虫のいいお

願いにきた

三枝「話を聞きましょう」

リム「ホームレス夫婦なんだが、出産費用を出させてもらえないか?」

三枝、口をすばめている。

三枝「ありがたい提案です」

リム「無事に生まれて、赤ちゃんの健康状態を見て、それから譲り受けれるかどうか決めるといいうのはダメか?」

三枝、宙を見上げて、

三枝「いいですよ」

リム「後の2件は残念ながら却下された」

三枝「条件はそれだけですか?」

リム「もうひとつある。入院するのはマカティ

イのタンさんの病院にお願いしたい」

三枝「タンさん!、フィリピンでNO1の病

院じゃないですか」

リム「あそこなら信用できる」

○トンド・墓地・三枝の家

三枝、パパジー、ティトボーアイ、デレ
ク、男の子、ロメロ、話している。

ティトボーアイ、三枝を紹介している。

ティトボーアイ「この人がボスだ。日本人だぞ、
こいつはパヤタスに住んでるデレク。だめ
だつたみたいだけど、カビテの4歳の男の
子はデレクが見つけてきた」

デレク、微笑んでいる。

三枝、驚いている。

三枝「パヤタスかあ。ゴミが大崩落して何百
人も亡くなつたスラムじゃないか。まだあ
るんだな」

デレク「あるよ」

三枝「カビテの子は斡旋できそうにない。健

康に問題があるのは厳しい」

デレク「わかる」

ティトボーアイ「こいつ馬鹿だけど、刑務所に

行くことなど、少しも気にしていない

三枝、首をかしげている。

三枝「ほー」

デレク、男の子の手を取り、隣の子供連れ

デレク「もう一人どうかな？」

ティトボーア「ダメだつて言つたのに聞きや
しない。お前、それは誘拐だぞ、親の承諾
なくて勝手に売り飛ばせるかよ」

パパジー「げらげら笑つてている。
三枝、呆れている。

パパジー「一生、刑務所にいることになるぞ」

デレク「一生は嫌だな、じやあ返すわ」

ティトボーア「ちやんと連れて帰れよ」

パパジー、ロメロを指さして、

パパジー「彼はロメロ、サンタメサの線路沿
いのスラムに住んでいる。あちこちのスラ
ムに知り合いがいて、特に女性に人気があ
るから仲間に引き入れた」

三枝「よろしくな」

ロメロ「さつき、パパジーと話していたらマ
イキーの写真を持っていてびっくりした。
子供を売つて、カナダに行きたいんだつて。

い　いお母さんだよ」

三枝「ほう」

ロメロ「すごい金額で売ろうとしてるみたい
だけどうまくやれるの?」

三枝「まかせろと言いたいが・・・」
ティトボレイ「俺もまだ半信半疑だ」

○マカティ・レガスピビレッジ・湯野のマン

ショーン・キツチン

3ベッドルーム。大型テレビなど高級
家具、電気製品がある。キツチンは広

く様々な調理器具がある。

湯野(67)、料理を作つてゐる。

三枝、ドアを開けて入つてくる。

湯野、料理を作るのをやめて、出迎え
てゐる。

三枝「お邪魔します、長い間、電話しなかつ
たこと謝ります」

湯野「なんかあつたのか?」

三枝「あまり話したくないのですが、金の問

題です。以前のように遊ぶことはできなくなりました」

湯野「仕事はあるのか?」

三枝「日本語学校で教えていきます」

湯野「まあ生きていけたらいいけど。日本人の友達は三枝しかいないからな」

三枝「俺もそうですよ。湯野さんしかいない」

久しぶりに日本語を話してゐるんです」

湯野「テレビでも見ててくれ、もうすぐ出来上がる」

湯野、キッチンに戻る。

三枝、リビングでテレビを見ながら、

三枝「料理長自ら作ってくれるなんてありがたいことです」

メイド、卵を持つて帰つてくる。

湯野「卵を切らしててな、これでできる」

三枝、テレビを見ている。

湯野「さあこつちに来てくれ、食べよう」

x

x

x

三枝 「日本料理かあ、久しぶりです」

湯野、三枝、食べ始める。
メイド、飲み物を用意している。

湯野 「彼女は元気か？」

三枝「金が無くなつた途端、逃げられました」

湯野 「なんだ、ひとりぼっちじやないか。まあ俺もそうだけど、わざわざフイリピンにきて一人暮らしさみしいな」

三枝 「パパジー存じですよね、彼の隣に住んでるのですが、子供がなついてくれて、彼女と二人で住んでた時より楽しいんです」

よ」

湯野 「おう！ パパジーは元気なんだ。たし

かトンドだつたよな」

三枝 「そうですよ、俺もスラムの一員です」

湯野 「スラムに住めるととはい根性しているな。まあ楽しかつたらいい」

湯野、立ち上がり、引き出しからお菓

子を4つ取り出す。

湯野 「パパジーの子供にあげてくれ」

三枝、お菓子を手に取り、
と大喜びです。湯野さんこそどうして彼女
を作らないんですか？以前はいましたよ
ね」

湯野「俺はもう彼女はいない。でもな、子

供はほしい」

三枝「まだ子供を作れるでしょう」

湯野「おいおい、67歳だぜ。そんな元気はない」

三枝「メイドには子供はないのですか？」

湯野「あれも独身。人生でやり残したことは、
子供を育てたことがないということだ。メ
イドもいるし、ベビーシッターもすぐに雇
える。誰か子供を預からせてくれないかな」

三枝、頬を膨らませて、目を大きく開
いて、頷いて、

三枝「足長おじさんかな。少し違うか、里親
ですね。心当たりがあります。期待しない
で待っていてください」

湯野 「本当か？」

○ トンド・墓地内

三枝、キカイ、アイナとアラを連れて歩いている。アイナ、アラ、ねるねるを楽しそうに練っている。通路にテントが張られ、10人が飲み食いしている。それも121

三枝 「ここで毎日パーティーしている。それも朝から深夜まで」

キカイ 「お葬式だよ。お通夜か、1週間は続

くね」

三枝 「ええつ、1週間も！」

テントの下で飲み食いしてたネルソン、出てくる。

ネルソン 「おい、日本人、こっちに来て飲め！」

キカイ 「ネルソンはただで飲み食いできるな

ら、必ず現れる」

三枝、顔をしかめて手を振っている。

三枝「いやいや、俺は亡くなつた人を知らない。い。いくらなんでも失礼だろう」

ネルソン「賑やかだつたのが好きなやつだつた。故人を偲んだらいい、さあ飲もう」

三枝「いや、故人を知らないのにどうやって思い出を語る？」

ネルソン「マージヤンできるか？」奥でやつ

てるぞ」

三枝「日本とルールが違う！」

ネルソン「嫌がつてないで来いって、飲むぞ」

」

ネルソン、無理矢理三枝を引っ張つていいく。

三枝、キカイに向かつて、両手を広げて手前に引いている。キカイ、笑いながら手を振つている。

パパジー、ティトボーアイ、やつてくる。

ラップ、ベルをいたわっている。

ベル、段ボールの上で横になっている。

ラップ、立ち上がる。

ラップ「この前はありがとう。おかげでおいしいもの食べてベルが少し元気になつた」
ティトボーアイ「あれから考えたんだがな。ここで産むのはどうかと思う。いつも横になつて辛うだしな」

ラップ「おれだつて病院で産ませてやりたいよ」

ティトボーアイ「それでな、入院費用出すから、病院に行こう」

ベル、起き上がる。

O「つてそこまでしてくれるの？」
ベル「どうして？ 意味がわからな。N P

ティトボーアイ「実はな、まだ決めてないけど、本当に子供を教会に預けてしまうなら、俺が育てもいいかなって」
ベル「ふーん、貧乏そうに見えるけど、出産

費用出せるんだ」

ティトボレイ「貧乏そうで悪かつたな」

ベル「ふーん、よくわからなけれど、お金出してくれるなら入院してもいい」

ラップ「俺も行つてもいいのか？」 食事は俺の分もあるのか？」

ティトボレイ「付き添いだな、ああいぜ」

ラップ、飛び跳ねている。

ティトボレイ「お前ら、二人とも汚なすぎる。病院も不潔なホールムレスなんて嫌がる。3

0 0 0 円やるから古着、サンダル、下着を3何枚か買え！、それでシャワーして、爪切つて、散髪してこい。明日迎えに来るから」

ラップ、札を握り締めて喜んでいる。

○ トンド・墓地・三枝の家

アイナ、立つて、右手を力強く振つて

フイリピン国歌を歌つてゐる。

ERLAS NG PUSO · · · ILI W
AIANA 「BA YANG MAGI P

三枝、アイナの社会の教科書を見ている。

ホセ・リサールが載っている。

三枝「あー俺もホセ・リサールは知っている。」

リサール公園に銅像が建っているぞ」

アイナ「フィリピンの英雄だつて、ハンサム

でかっこいい」

アラ、三枝の膝の上に座り、スマホを

スクロールしている。

パパジー、「おう、聞きたいことがある。カナダに

行きたがっているシングルマザー、名前

は? 誰からの情報?」

パパジー「マイキー、NPOのアンジエリン

からで、ロメロも知っている」

三枝「会つた?」

パパジー「いや、会つてない。買い手に直接

会いたいって書いてあつたから、これは無

理だと思った」

三枝「金にはならないと思うけど、料理長の

湯野さん、知ってるだろ。彼が子供を預か
つて育てたいと言つてきた

パパジー「湯野さんが！まさか、爺さんだ
し、仕事してるし、たしか一人暮らしだったよね。育てられるのかな」

三枝「住み込みのメイドはいるし、ベビーシ
ツタードも当てがあるらしい」
パパジー「それならなんとかなるな。よし、
ホームレス夫婦を入院させた後に会いに行
つてくる」

○マカティ・タンの病院・受付

豪華な病院。

ティトボーアイ、パパジー、周囲を気に
してひそひそ話している。

ティトボーアイ「すげーな」

パパジー「貧乏人が来るような病院じゃない」

ティトボーアイ、恐る恐る受付に行く。

パパジー、ついていく。

ラップ、ベル、体裁は整えている。荷

物はナイロン袋に入れた衣類だけ。キヨロキヨロしながら、椅子に座つている。

ラップ「ここつて大金持ち専用の病院だよな、つまみだされそう」

ベル「ティトボーアって何者?」

ラップ「よくわからないうけど、この病院には慣れていないような」

スタッフ1「部屋に御案内します。荷物はそ
れだけですか? 部屋はVIPルームで広
いですよ」

スタッフ2名、歩き出す。

ラップ、ベル、恐る恐る歩きだす。
ティトボーア、パパジー、続いている。

○ 同・ベルの個室

VIPルーム。広い、ベッドは2台、
ソファ、ダイニングテーブル、大型テ

レビ、コーヒー、カーネル、パパジー、ティトボレイ、ラップ、ベ

ル、スタッフ2名、部屋に入る。ラップ、ベル、立ちすくんでいる。

スタッフ1「私たちがお世話をします。なんなりとお申し付けください。後ほど担当医が参ります。それまでにこの用紙に住所などをすべて記入してください」

スタッフ2、用紙とボールペンをテーブルに置いている。

スタッフ1「お名前を教えてください?」

ベル「アアア、アナベルです。ベルと呼んでください」

ラップ「ラファエルです。夫です。ラップでいいです」

スタッフ1「ラップさんもここに宿泊されま

ラップ「ですか?」

スタッフ2「いいです」

スタッフ1「わかりました。食事は2名分用

スタッフ2「ベルに冊子を渡している。

意します。冊子にルールが書いてあります。
よくお読みください。お聞きになりたいこ
とがありますか？」

ラップ「今はいいです」

スタッフ1「それでは無事に赤ちゃんが生ま
れるまでいい滞在でありますように」

スタッフ2名、出ていく。

○同・通路

スタッフ2名、歩きながら、
スタッフ2「院長の特患って聞いていたから
誰が来るのかと緊張していたけれど、貧乏
くさいやつばかりで拍子抜けした」
スタッフ1「確かにな、でも見かけで判断し
たらダメだ。院長との関係は聞いてないが、
特患なんだぞ。丁重に応対しろ！」

○同・ベルの個室

ラップ、冷蔵庫の中を見て、テレビを
つけている。

ベル、へなへなとベッドに倒れこむ。

ティトボレイ、「どうした、気分が悪いのか？」

ベル「緊張したー」

ラップ、ベッドのスプリングを確かめている。

ラップ、ベルに向かって、

ラップ「すぐには産むなよ！　ずっと食事にありつけるし、ベッドも最高」

ベル「無茶言わない！」

ティトボレイ「お前ら、くれぐれもホームレスだなんて言うなよな。背筋を伸ばし、堂々としろ、わかったか！」

ラップ「言わない」

ティトボレイ「用紙は俺が書いてやる。医者の言うことをよく聞くんだぞ、また来るからな」

○ トンド・墓地・パパジーの家

猛烈な雨が降っている。

アイナ、アラ、キヤツキヤツ叫びながら

ら、雨の中を駆け回っている。

パパジー「アンジエリンとロメロとマイキーに会う約束をしてるんだけど、この雨じやどうしようもない」

家の前が濁流になつていてる。

三枝「こりや、だめだ」

パパジー、スマホを見ている。

パパジー「テキストが来た。マイキーも立ち往生してて家に戻れないらしい。おつもう一つテキストが、アイナ、明日は学校が大

雨のため休みだつて」

アイナ、喜んでいる。

○ マカティ・タンの病院・ベルの個室

医師、4口エコーでベルの胎児を見て

いる。

ラップ、横から覗き込んでいる。

スタッフ1、立つている。

医師「順調ですね。動きも活発で元気です」

ベル、「いつ頃生まれそうですか？」

医師「10日後くらいかな」

ベル「痛いですか？」

医師「計画無痛分娩しようか？」

ベル「痛くないってこと？」

医師「痛くありません」

ベル「やりたけど、相談しなきゃ」

医師「わかりました。今日と明日はベルさんの健康診断です。スタッフが案内します」

ベル、「やりたけど、相談しなきゃ」

つてくる。

ベル「2日間もやるの？」

スタッフ「50項目以上あります。まずは身

長、体重からですね」

ベル、「ふーっとため息。」

○ヴァレンズエラ。リムの家・リビング

リム、リンロン、ヴィルマ、中国茶を
飲み、ゴマ団子を食べている。

リム「ホームレス夫婦が入院したって」

リンロン「ヴィルマとそーっと見に行つてき
ます。あの写真だけじゃよくわからないし、

タンさんに会つて検査結果も聞きたいし」

ヴィルマ、頷いている。

リム「反対するのをやめたのか？」

リンロン「気にいらないけど、赤ちゃんを見
てから」

リム「行つてもいいけど、絶対に買い手だと
ばれないようになろよ」

ヴィルマ「掃除のおばさんに変装していけば
わからないでしよう」

リム「今日は行かないほうが多い。大雨にな
るらしい」

○マカティ・タンの病院・ベルの個室
ラップ、ベル、ボーツとテレビを見て
いる。

配膳係が食事を運んでくる。

ラップ「待つてました」

ベル、呆れている。

配膳係、テーブルに食事を並べ、立ち去る。

ベル「あんたつて本当に怠けものね。どこにも行かず、一日中テレビを見て、よく飽きないね」

ラップ「天国だぞー」

ベル「ティトボーリ来ないかな？」相談した
いことがある」

ラップ「雨が降り続いているから来れないんだ」

ベル「痛くない出産があるんだって？」

ラップ「ふーん」

ベル「適当な返事ね。私のことなんか心配しないんだ。あー気分悪い。お前とは2度とセ

だから。あー気分悪い。お前とは2度とセ

ツクスしない」

ラップ「こんな豪華な病院で産めて、痛くな
いなんてラッキーじゃないか」

ベル「お前がラッキーなだけ。欲しくもない子供産むのは私なんだからね」

○パンダカン・マイキーのアパート・前

メロ、アンジエリン、マイキーへ 28
プラスティックの椅子にパパジー、ロ

女)、メロディ(3女)、座っている。

マイキー「こんなところでごめんなさいね。」

部屋にはたくさん人がいるし、私は居候だ

から肩身が狭くて」

パパジー「いいですよ」

ロメロ「マイキーさん、久しぶり。一段と綺麗になつたね。アンジエリンさんは笑顔が

とつてもかわいいな」

パパジー「おいおい、ナンパしにきたんじや

ない」

マイキー、アンジエリン、お互いを見
て微笑んでいる。

アンジエリン「この人がパパジー、メロディのことでの話があるつて」

パ　パ　ジ　一　「かわい　い女　の子　で　す　ね。　マイ　キ　一
パ　パ　ジ　一　、メロ　デ　イ　を　見　て、

さんには是非会つていただきたい人がいます
五つ星のレストランの料理長で名前は湯野
さん。おじいさんですが、里親になりました
そうです。明日、ニューポートシティのホ

「テルのレストランでランチをいかがですか？」メロディも一緒にね

て
い
る
。

マイキーはい

パンジーもちらん
アンジエリン、両手でガツツボーズ。

アンジエリン「わ！」感激

おとなしくしてろよ」
「うん？」

○ 同 · 路 上

パパジー、ロメロ、帰つっていく。

マイキー、アンジエリン、見送つている。

マイキー「あの人、悪い人には見えないけれど、墓地に住んでいるのでしょうか。大丈夫かな？」

アンジエリン「心配しないで、明日は日本人のボスも来るはず。あのホテルは五つ星だよ。そこでご馳走してもらえるだけで幸せ」

○ タンの病院・ベルの個室・内

リンロン、ヴィルマ、清掃人のユニフォームを着て、掃除をしながらラップとベルをちらちら見ていく。
ラップ、テレビを見ている。
ベル、いろいろしている。
ベル、ラップに向かって、

ベル「ドラマはやめて！ 音楽番組ないの？」

ラップ、チャンネルを替えていく。

ヴィルマ「もうすぐですね、順調ですか？」

ベル「よくわからない。あなたたち、いつも

のじやないよね」

ヴィルマ「急用ができたみたいで、かわりに掃除させてもらっています。男の子ですか？」

ベル、「だるそうに、

ベル「知らないい」

ティトボーア、入ってくる。

ベル、にっこり笑う。

ベル「待つてたよ」

ティトボーア「ごめん、雨がひどくて来れなかつた」

ベル「相談したいことがあるの。痛くない出産があるんだって？」

ティトボーア「何？それ」

ベル「知らないの？」

リンロン、ためらいがちに口を挟む。

リンロン「計画無痛分娩のことね。楽ですよ」

ベル「そうそう、それそれ、してもいい？」

ティトボーア「少し待つて！ 聞いてみるわ」

○ ニューポートシティ・五つ星のホテル・日

本料理店・前

三枝、パパジー、アンジエリン、ロメロ、マイキー、メロディ、店を見ている。

湯野、出てくる。

湯野「湯野です。お越しいただきありがとうございます。席は用意していますので、お好きなものをどうぞ。今日は私の働く様子を見ていただき、後日、自宅でゆっくりお話ししましょう」

ドナ「初めまして、マイキーを抱き上げて、メロディ、3歳です。お招きありがとうございます」

湯野「可愛い女の子ですね。パパジー！」久

しぶり

パパジー、「湯野さんも元気そう」

パパジー、「湯野、目を細めて、

湯野、三枝に向かつて、

湯野「三枝！ 本当に連れてくるとはな。ありがとう。マイキーさんは日本料理好きかな？」

三枝「食べられそうなものを選ぶ」

湯野「おう！ それじやあ厨房に戻る」

○同・中

落ち着いた格調高い店。

店内は客が半分ほど。

三枝、パパジー、アンジエリン、ロメロ、マイキー、メロディ、席に座つていいる。

ウエイター、三枝の横に立ち、注文を待つてゐる。
三枝、メニューを見ながら注文してい
る。

アンジエリン、頬を膨らませてゐる。

アンジエリン「どうして全部決めちゃうのよ」

三枝「君たちにまかせたら、食べきれないほ

ど注文して、余った料理を持ち帰ろうとするのが目に見えている。それに日本料理はわからぬいよな？」

アンジエリン「どうしていけないの？好きなものを見文していつて言つてたじやな

い。日本料理は初めてだけど、写真を見ればなんとなくわかる」

ロメロ「彼女に食べさせてやりたいから、テ

パジー「大量に持つて帰るなんてことした

イクアウトしたいなあ」

アンジエリン「少しくらいいいじゃない。こ

ら、湯野さんが恥ずかしいだろ」

アンジエリン「少しきらいいいじやない。こ

んな高級店、2度と来れないんだから」

三枝「わかつたわかつた。少しだけ追加して

いい」

ロメロ「うほつ」
アンジエリン「やつたー」

アンジエリン、メニューを見ながら、

ウエイターと話している。

三枝、マイキーに向かつて、

三枝「マイキーさん、湯野さんはどうですか？」

マイキー「紳士ですよね。立派な仕事をされている。ただ、日本人って少女にみだらな行為をしたりするじゃないですか？ その点は大丈夫ですか？」

パパジー「パパジー、マイキーに向かって、人差し指を口に当て、小声で、
「ここでそんなこと聞かないでくれ！」

三枝「他のお客様に聞こえる。後日聞いてあげるから」

料理が次々に運ばれてくる。
全員、食べ始める。
アンジエリン、マイキー、口メロ、感
激している。
食べ終わって、
ウエイター、余った料理を4つの紙袋
に入れて持つてくる。

x

x

x

x

x

x

x

x

x

x

x

アンジエリン、ロメロ、どうやつて分
けるか相談している。

○ヴァレンズエラ・リムの家・リビング
リム、リンロン、ヴィルマ、話してい
る。

ヴィルマ「見てきましたけど本当に子供はい
らないようでしたね」

リンロン「夫婦はあの写真よりはまだった
わ」

リム「いつごろ生まれそう？」

ヴィルマ「お腹はパンパンでいつ生まれても
おかしくない」

リム「三枝が計画無痛分娩してもいいかと聞
いてきた。問題ないだろ？」

リンロン「私たちがいるときに話していた。
問題ないわ」

ヴィルマ「あの夫は怠け者ですね。女性も何
を考えてるのかよくわからぬ。どんな子
供が生まてくるのか想像できなかつた」

リム、リンロンに向かつて、
リム「ドンドン夫婦が決めたらいい。俺は口
をはさまない、お前もな」
リンロン「はい」

主人と相談して決めます」

○ トンド・墓地・広場（夜）

カラオケを大音量で歌っている。テー
ブルには酒、ジュース、食べ物が置か
れている。30人ほどが椅子に座って
紙コップ、紙皿を持ちながら飲み食い
している。

三枝、キカイ、後ろの方で見ている。

キカイ「私も歌いたいな」

三枝「おっ！　うまいのか？」

輪の中に座っていたティトボーリイ、三

枝を見つけて大声で、
枝を見つけて大声で、
ティトボーリイ「おーい！　日本人！　こっち
に来いよ。一曲歌え、一緒に食べよう」

その声に観客が一斉に振り向く。

観客1「日本人がいるのか？」

観客2「あいつ、ここに住んでるぜ」

観客3「歌え！」

三枝、手を大きく左右に振つていて。
ティトボーリイ、さらに大声で、両手を

下から上に振り上げながら煽っている。

ティトボレイ「みんな聞け！貧乏な日本人が墓地に住んでる！こんな掃き溜めにようこそだろ！歌を聞きたくないか？」

あちこちから歌え歌えの大合唱。

三枝、困り果ててキカイを見ている。

キカイ「歌っちゃえば？有名になれるし、住みやすくなるわよ。チャンスじゃない」

三枝、キカイに背中を押され、ティト

ボレイに引っ張られて、観念している。

三枝、最前列に行き、歌のリストを見ている。曲を伝えて、マイクを握り締めて観客を見渡す。

観客1「日本人は金持ちなのになぜ墓地に住んでる？」

三枝「三枝です。日本人がなぜ墓地に住んでるか」というと！お金がない！」

三枝、苦笑いしながら、

三枝「三枝です。日本人がなぜ墓地に住んでるか」というと！お金がない！」

観客2「よ！貧乏人！」

観客、笑つていてる。

三枝、静まるのを待つて、
三枝「墓地に住むのはさすがに抵抗があつた
けど、楽しいこともあるし、みんな陽気だ
し、そんなに悪くない」
観客2「そうだろそうだろ」
三枝「ただハエや蚊、ゴキブリ、ネズミが多
すぎます。病気にならないためにもっと清
潔にしてほしい」
観客3「わかつたわかつた」
三枝「では、日本の歌ですが、知っている人
が多いようなので、この歌を贈ります。K
A I R O R O の未来へ（P A T U N G O
K I N A B U K A S A N）」
三枝、タガログ語と日本語を混ぜて歌
三枝「ほら、足元を見てごらん、これがあなた
たの生きる道、ほら、前を見てごらん、こ
れがあなたの未来・・・・・・・・・・・・
何人かが一緒に歌いだす。
何人かが立ち上がりだす。
三枝「ほら、足元を見てごらん、これがあな
たの生きる道、ほら、前を見てごらん、こ
れがあなたの未来・・・・・・・・・・・・
何人かが立ち上がつて踊つている。

歌い終わると、やんやの拍手、ヒューリーの指笛、日本人、いいぞ、の掛け声、

観客1 「アンコール、アンコール」
観客たち 「アンコール、アンコール」

ティートボーカーに肩を叩かれ、三枝、手

を振りながら、キカイの横へ。

キカイ「遊びまくつていただけのことはある。

みんな大喜びだつたじやない。私も歌いた
かつたけど、あの後じや無理だわ。わはは
はは」

○ 同・三枝の家

アラ、アイナ、三枝のベッドで気持ち

よさそうに寝ている。

三枝、パパジー、話している。

パパジー「娘たちが勝手にベッドを占領して

申し訳ない」

三枝「かまわない。寝顔を見ているだけで俺
は癒されている」

パパジー「うちは人が多いからゆっくり昼寝

ができるない」

三枝「ベッドがもうひとつあつてもいいな」
パパジー「ボス！」昨日、カラオケやんやの

喝采だつたんだつて」

三枝「ティトボーカーに煽られた」

○マカティ・レガスピビレッジ・湯野のマン

ション・リビング

三枝、湯野、マイキー、メロディ、ア

ンジエリン、パパジー、ロメロ、マイ

マイキー「先日はごちそうまでした。見た
のも味も最高の料理でしたね。とてもおい

しかつたです」

湯野「喜んでもらえてよかったです」

湯野、かがんでメロディのそばへ、

湯野「こんなにちは」

メロディ、びっくりして、大泣きして

いる。

湯野、慌てて立ち上がる。

湯野「怖がらせてごめんごめん。頭も真っ白だし、じいさんだもんな」

マイキー「すみません」

湯野「ベビーシッターなら泣かないのかな」

ベビーシッター、メロディを優しく抱き上げる。

メロディ、泣き止んでいる。

メイド、飲み物とケーク、クッキー、フルーツを並べている。

湯野「さすが、ベビーシッターはすごいな」

三枝「湯野さん、聞きにくいことなんですが、マイキーさんが日本人は少女を性的虐待、性的暴力をすると心配しています」

湯野、左手でこめかみを押さえている。

湯野「俺は違うと言つても信じてもらえないだろうな。メイドに直接聞いてみたら？もう10年一緒に住んでるから」
マイキー「すみません。失礼なことをお聞きして、でも心配なものですから」

マイキー、立ち上がり、メイドと話している。

三枝「少女を弄ぶ日本人もいるからなあ」

湯野「疑いが晴れればいいけど。マイキーさんは親戚の家に居候しているんだろ」

パパジー「肩身はせまいらしいです」

湯野「そうか、それなら提案なんだが、ここに親子一緒に住んでみたらどう？ 部屋が一つ空いているからね。マイキーさんには手を出さないので安心して」

三枝「聞いてみます」

マイキー、席に戻つてくる。

アンジエリン、メロディ、ジュースを飲みながら、ケーキをじつと見ている。

マイキー「メイドさんが湯野さんはそんな人じやないと断言してくれました。以前は彼女がいたそうですね」

湯野「疑いが晴れてよかつた」

三枝「マイキーさん、よければ親子共々、ここに住んでみたらどうですか？」

湯野さん

に里子として預けるかどうか今すぐ決めなくとも、一緒に住んでいればいろいろとわかかるでしよう。嫌なら出ていけばいいだけのことだし」

マイキー「本当？ 本当ですか？」

三枝「あーそれとマイキーさんには手は出さ

ないそうです」

マイキー、口元を押さえて、少し微笑んで、

マイキー「あらまあ」

アンジエリン「賛成。きっとおいしいものをいっぱい食べさせてもらえるだろうな。もしマイキーがここに住むなら遊びにこようつと」

三枝「アンジエリンは食べ物に執着してゐるな

マイキー「本当にいいのですか？ ありがとうございます。すぐにでも住みたいです」

湯野「よかったです。話は決まりだな。さあケーキでも食べて、メロディ、ケーキは好き？」

メロディ、うなずいて少しづつ湯野に

近寄つてくる。

ベビーシッター、ケーキを切り分けて
いる。

湯野「このケーキはうちのレストランで焼いたものなんだけど、甘さが控えめなんで大丈夫かな。子供に人気のある甘いケーキのほうが良かつたかも」

メロディ「おいしい？」

湯野「おいしく、食べていい」

メロディ「うん」

153

湯野、大喜びしている。
アンジエリン、おいしそうに食べている。

全員、食べている。

る。

湯野「三枝、俺の部屋に来てくれるか？」

三枝「三枝、怪訝な顔で、
湯野「はい」

湯野、三枝、部屋に入つていく。
湯野、ドアを閉めて、

湯野「三枝、本当にありがとう、夢が叶うかも知れない。それでな、お礼といつてはなんだが、お前、金でトラブルったんだろ。この金を受け取つてもらえないか? 少しは役に立つだろ。」

三枝、驚いている。

三枝「お礼なんていいですよ、レストランで食べさせてもらつただけで十分です」

湯野「まあそういうな。だまつて受け取つてくれ。そしてこれからもよろしく頼む。ゴルフも行こうぜ。おまえしか日本人の友達はないんだからな」

三枝、しばらく考えて、

三枝「ゴルフは右ひじが痛くて、まだ先になりました。たと始めようとしているのですが、資金が不足していたのでこのお金は本当にあります」

りがたい。投資していただいたと思うこと

○ トンド・墓地・三枝の家

アラ、アイナの髪を引っ張っている。
アイナ、お菓子をぐつと握り締めてア
ラに渡そうとしない。

三枝、パパジー、ティトボーア、アン
ジエリン、集まっている。

三枝「アンジエリンが紹介してくれたマイキ
ーさんの件がうまくいった。配分するぞー、
俺、パパジー、アンジエリン、ティトボー
イが10万。デレク、ロメロ5万。残りの
50万は運転資金としてプレーしておく。
納得してくれるか?」

ティトボーア「納得するとかの問題じゃない。
俺はこの件では何もしていない。本当にも
らつていいのか?」

パパジー「デレクもなにもしていないぜ」

アンジエリン「私の毎月の給料は5万なんで
すよ。紹介しただけで2ヶ月分もらえるな
んて」

三枝「受け取ってくれ」

ティトボーアイ「喜んで」

三枝「ホームレスの出産がもうすぐだ。あれもなんとかなると思つていて」

ティトボーアイ「ボスって呼んでもいいですか? 参りました。これからは態度を改め

ボスの指示には素直に従います」

パパジー「もう日本人つて呼ぶなよな」

ティトボーアイ「おう、決して呼ばない。呼ん

だ奴はぶん殴つてやる」

アンジエリン「私も、N P Oをクビになつた

つてこれで食べていける」

三枝「おいおい! やめるなよ。情報が入ら

なくなつてしまふ」

アンジエリン「やめないですよ。吹っ切れました。これからがんがん協力します」

○ 同・墓地・内

三枝、歩いている。少しふらふらして
おばさんが声をかける。
いる。

おばさん「元気かい、日本人。また歌つてー
なー

三枝「機会があればね」
おばさん「FOR YO Uっていう日本の歌
が大好き、今度、お願ひね」

三枝「? ? ?」

○同・パパジーの家・前

三枝、手でおでこを触つている。

キカイ、三枝を見ている。
メイリーン、大鍋から料理をトレイに

入れている。

キカイ「どうしたの?」

三枝「なんか熱っぽい。頭が痛いし、ふらふ
らする」
キカイ、三枝の首に手を当てている。

キカイ「熱、あるね。けつこう高い。休んだ
方がいい」
メイリーン「食欲はあるの?」

三枝「食べたくない」
メイリーン「チキン粥作ってあげる。あとで持っていくから寝てて」

○同・三枝の家(夜)

三枝、寝ている。

キカイ、チキン粥とバナナを持って、
アイナ、水、氷、タオルを持って、
アラ、熱さまシートを持っている。

キカイ「大丈夫?」

三枝「疲れただけだろう。寝れば治ると思う」
アイナ、三枝の首に手を当てて驚いて
いる。

アイナ「熱いよ! 早く元気になつて遊ぼう
よ! かくれんぼしたい」

キカイ「無理言わない」

キカイ、体温計を三枝の腋に挟んでい
る。

体温計を取り出して見ている。

キカイ「39度ある。これはやばい、病院へ

いつたほうがいい

三枝 「解熱剤を買ってきてくれないか？」

キカイ一病院に行くのは嫌なの？

三枝一病院に行くと金がかかる

キカイ、熱さまシートを張り、

半力イ一
じやあハ
バイオシエ
シツケ買
うてぐる

明曰になつてまた熱が高かつたら病院に行くからね」

○ 同・三枝の家（早朝）

パジー、キカイ、やつてくる。

三才圖會

ある。バイオジエシツクの箱が開けら

れ
て
い
る
。

ババジー何も食べていな

キ力イ、体温計を三枝の腋に挟んでい
る。

キカイ「熱、測るね。苦しそうだわ」

キカイ、体温計を見て、目を大きく開

けている。

キカイ「ダメだ、40度ある。病院へ行くわよ」

三枝「安い病院にしてくれ」

○同・病院・エマージエンシールーム

パパジー、三枝を抱えて、ベッドに寝かせている。

看護婦、手伝っている。

医者、奥から出てくる。

医者「どうしました?」

パパジー「熱が40度ある」

医者、診察している。

医者「血液検査をしますよ。後ほどウイルス検査もします」

看護婦、注射している。

医者「おそらくデング熱ですね。夕方には検

査結果がわかりますが、まずは入院してください

ださい。デング熱は特効薬がないので点滴で熱を下げます。絶対安静ですよ」

キカイ「あちやー、蚊が多いから」

医者「話せますか？今までにデング熱にかかりたことはありますか？」

三枝「ありません」

医者「それはよかったです。2度目で高熱だと重症化する可能性が高い。入院の手続きをします。ここで休んでいてください」

三枝「大部屋でいいぞ。入院費は先払いだよ

パパジー「そうだ。お金の心配はしなくていいな」

○ 同・大部屋
患者が10人以上いる。
三枝、点滴をぶら下げながら目を閉じている。
キカイ、パパジー、見守っている。

ティートボーアイ、アンジエリン、部屋に

入つてくる。

ティートボーアイ「デング熱かよー、大丈夫なの
か？」

パパジー「まだわからない、熱が下がつてく
れなことには」

ティートボーアイ「ボス、死ぬなよ。今死なれた
らみんな困る」

アンジエリン「ばか！ なんてこと言うのよ」

三枝、目を開けて、小さい声で、
三枝「ティートボーアイ、見舞いなんてしてない
でタンさんの病院に行つてくれ。それでホ
ームレスにまだ産むな、俺が治るまで待つ
てくれと」

ティートボーアイ「やばい！ いつ生まれるのだ

つたかな！ 赤ちゃんが出られないよう

タンポンを詰めてくる」

パパジー「やさしいなあ、赤ちゃんを傷つけ

ないよう気配りしてる」

アンジエリン「馬鹿同士の会話ね」

キカイ、笑つて いる。
テイトボーリ、出でいく。

○ 同・（朝）

翌日。

三枝、点滴が落ちるのをぼーっと見て
いる。

看護婦、体温計を口の中に入れて いる。

医者、検査結果と体温計を見てい る。

医者「やはりデング熱でしたね。まだ熱が下
がらないな」

三枝、寝返りをうつて、

三枝「食べたものをすべて嘔吐してしま う」

医者「発疹もでてますね。安静にしてくださ
い。食べなくてもいいように点滴で栄養補
給もします」

○ 同・（朝）

2日後

メイリーン、アイナ、アラ、ベッドの

横にいる。

三枝、上半身を起こしている。

メイリーン「ようやく熱が下がったね。もう

大丈夫」

三枝「アイナとアラの顔を見たら元気になつた」

アイナ「じやあかくれんぼしよう」

アラ、他の患者のベッドの下に隠れて
いる。

メイリーン「ダメだよ、ここは病院だからお
となしくしてなさい。はしゃぐと看護婦さ
んに注射されるわよ」

アイナ「注射はいや！」

アラ、メイリーンに抱きつきながら泣
いている。

アラ「注射は怖い」

メイリーン「静かにしてれば大丈夫」

三枝「もう退院できるかな」

メイリーン「聞いてくるわ。あーそうそう、

ティトボーアから伝言頼まれた。ホームレスはまだ出産していないから心配しないでつて

三枝「よかつた」

メイリーン、出ていく。

アイナ、アラ、三枝の点滴をじっと見ている。

アイナ「お水がぶら下がってる」

三枝「お水じやなくて薬だよ、少しずつ体の中に入れていく」

アイナ、点滴の先が注射張りだと気が付いて、

アイナ「痛そう」

三枝「刺すときにチクつとするだけであとは

痛くないよ」

アイナ「ふーん」

メイリーン、帰ってくる。

メイリーン「明日の朝に平熱なら退院していく

三枝「よかつた」

アイナ、アラ、喜んでる。

○ トンド・墓地・三枝の家

翌日。

三枝、パパジー、ロメロ、話している。

ロメロ「ボス、退院おめでとうございます。」

見舞いに行かなくてごめんなさい。パパジ

ーが教えてくれなくて。それから5万円も

らいました。ありがとうございます」

三枝「それで話って？」

ロメロ「近所に住んでる人が、赤ちゃんを預
かつているのです。母親のお父さんが殺し

かねないんで」

三枝「物騒な話だな」

x

(フラツシュバック)

夜、制服を着たジョバイ(女14)が

歩いている。

3人の男、正面から歩いてくる。

すれ違いざまに男1が口を押さえ、男2

がジョバイを抱え上げ、あつという間

に暗がりに引きずり込んでいる。男 3
は周囲を見張っている。

x x x

ロメロ「その母親というのが14歳、中学生、3人の男にかわるがわるレイプされ、生まってきたのがその赤ちゃんというわけなんです」

三枝「それはきつい。お父さんは赤ちゃんを見ているだけで腹が立つんだろうな」

パパジー「もしアイナとアラがそんなことに167
なつたら俺だつてなにをするかわからない」

三枝「レイプ犯は捕まつたのか？」

ロメロ「いえ、夜だったらしく顔がまったく

わからなかつたらしい」

パパジー「パパジー、怒つていてる。

パパジー「お前、よくもまあ淡々と話せるな」

三枝「パパジー！ それは八つ当たりだ！」

パパジー「なんか無性に腹が立つて」

三枝「アンジエリンに相談してみる。彼女な

ら経験があると思う」

○ マカティ・タンの病院・ベルの部屋

テイトボーリイ、駆け込んでくる

ティトボーライ「ラツプ！」
生まれたのか？」

たまま

六一六一立世會才力之才

ティトボーア「待つしかないか」

ノ
ニ
ト
ト
ル
。

ティトボーカ「ボス！生まれたらすぐ連

絡します

ティトボレイ、部屋に戻つてくる。

ティトボレイ、ソファに寝そべつてい

X

X

看護婦、ドアを開ける。

テイトボレイ、ラップ、振り向く。

看護婦「生まれました。おめでとうございま

す。ラップさん、女の子です。母子ともに健康です。LDRに行きますか?」

テイトボレイ、ラップ「はい!」

テイトボレイ、ラップ、走っていく。

○同・LDR

テイトボレイ、ラップ、入ってくる。

ベル、寝ている。

看護婦、赤ちゃんを抱いている。

ラップ「大丈夫か?」

ベル「うん、痛くなかった。でも腰のあたり

の感覚がない」

看護婦「腰に麻酔を注射したので、時間が経

てば治ります」

テイトボレイ、赤ちゃんを見ている。

スマホを取り出し、外に出る。

看護婦「赤ちゃんは新生児室に移動します。

よろしいですか？」

ベル「はい、どうぞ」

○トンド・墓地・三枝の家

三枝、スマホに話している。

三枝「リムさん！　女の子が先ほど、生まれました。赤ちゃんの検査結果は明後日にはわかります。結果はタンさんから直接お聞きください。そして女の子を引き取るか、諦めるか決めていただけますか？」連絡待ちしています」

○オルティガス・コンドミニアム・ドンナとラニーの部屋・リビング

部屋は2ベッドルーム。

ドンナ（41）、ラニー（38）、ビリー（33）、キコ（36）、ダイニングテーブルに置かれたポップコーンを食べながら、言い争っている。

ドンナ、顔を真っ赤にして怒っている。

ドンナ「どうしてお前らみたいなへなへなと
したおかま野郎の子供を私たちが産まなき
やならない！今まで仲良くやつてきたの
に突然、くだらない提案しやがつて」
ビリー「話は最後まで聞いてくれ！産んで
くれたら1000万づつ払う。二人が同時
に産んで一人ずつ分けたらいいだろう」
ドンナ「ばかやろう、たつた1000万ぽつ
ちでやつてられるか。1億もらつても絶対
やらない。夜鷹にでも頼みやがれ。それに、
もし2人産んで、それから分けるなんて簡
單に言うけど、私とラニーでどちらを育て
るか揉めるだろが。喧嘩させたいのか？」
ラニー「私が何度も人工授精や体外受精に挑
戦しているのは知つていてしよう？も
つと早く産めばよかつたんだけど。あまり
時間が残されていないの？マッチョで頭
がいい人の精子をもらい続けるわ。あんた
らの精子なんていらない」

1000

万だぜ。マツチヨ野郎の精子ならお前らが

金を払うんだよ」

ドンナ「いい加減にしろ！ お前らは金を払うだけ。こちらは10ヶ月もの間、仕事もできず、酒も飲めず、つわりに耐えて、遊ぶこともままならない。不公平だろうが！ あー頭がおかしくなる。キコなんて親の会社の取締役になつてるけど、肩書だけで何もしない。それで何千万も報酬を受け取つている。典型的なバカ息子じやないか」 ビリー「ボロクソに言いやがつて、ここまでわからずやだとはな。もういいや、レズビアン夫婦には頼まない。他を考えようぜ？」

キコ「あーそうしよう、帰ろう！」

ドンナ「あーさっさと帰れ！ おかげ野郎」

○ マカティ・タンの病院・新生児室・前

ドンドン、ヴィルマ、タン、赤ちゃんをガラス越しに見ながら話している。タン「健康診断はすべて良好だつた。明日に

は退院できる

ドンドン「引き取ることに決めました。ありがとうございました」

タン、ドンドンの肩に手を置きながら、
タン「困ったことがあればいつでも相談に乗
るからな」

○同・院長室

重厚な部屋。

タン、リム、三枝、ソファに座り、話
している。

リム「世話になつたな」

タン「無事に生まれて良かつた」

リム「三枝が斡旋してくれた」

タン「そうだつたのか」

タン、出生証明書をリムに渡している。

タン「父親はドンドン、母親はヴィルマ、医
者のサインは俺がした。間違いか確認
してくれ」

リム、じつと見ている。

リム「ありがとう。問題ない、すぐに市役所

に持つて行く」

三枝「もし何かあつてもタンさんには一切迷惑はかけませんので」

タン「法律的には問題があつても、みんなが

喜んでいるなら俺は賛成だ」

リム「ほう、お前がそういうとは思わなかつた」

タン「建て前ではなく本音を語ると、子供が幸せに育つてくれるなら、法律を無視した

養子縁組もいいじやないか！ 法律を無視

174

するといえば、死を待つだけで苦しんでいる患者が望むなら安樂死を手助けしたいが、立場上それはできない。三枝のように失うものがないからできることもありますあり、少し羨ましいけどな」

○トンド・墓地・三枝の家

アイナ、アラ、バトバトピツクと言
ながら、じやんけんをしている。

パパジー、三枝、ティトボーアイ、話している。

三枝「ホームレスの赤ちゃんを引き取ると連絡があつた。明日は忙しい」

パパジー、ティトボーアイ、両手でガツ

ツボーズをしている。

ティトボーアイ「さすが！ボス！」

パパジー「最後まで気を抜かずにやらなきやな」

三枝「ティトボーアイ、ずっと病院に詰めて大変だったな。あと少しだ、まかせたぞ」

ティトボーアイ「おーっす」

○マカティ・タンの病院・ベルの部屋

翌日。

ティトボーアイ、パパジー、ベル、ラップ、スタッフに挨拶している。

ティトボーアイ、赤ちゃんを抱いている。

ラップ、名残惜しそうに部屋を見てい

る。

全員、部屋を出ていく。

○ トンド・路上

ティトボーリ、赤ちゃんを抱いている。
パパジー、カバンを持ち、立っている。

ラップ、ベル、段ボールの上に座つて
いる。

パパジー・カバンから封筒を出している。

ティトボーリ「いいんだな！ それじゃあ謝

礼を10万渡すぜ。それと夕方まではここ
を動かないでくれ！ もう一度戻つてくる

176

から

ベル「こんなにもらつていいの？」

ティトボーリ「あー大事に育てるからな。そ

れじやあ、夕方にな！」

○ チャイナタウン・中華料理の店・内

古くてごちやごちやした店。
三枝、食事している。

ティトボーリ、赤ちゃんを抱きながら、

パパジー、カバンを抱えながら店内に入つてくる。

三枝 「お疲れ、なんでも注文したらいい」

ティトボーアイ、パパジー、メニューを見てオーダーしている。

三枝、赤ちゃんをティトボーアイから受け取る。

三枝 「ホームレス夫婦はどうしてる?」

ティトボーアイ「あっけらかんとしたもんでも、10万で満足している。300万なんて払

う必要ないと思うけど」

かる

パパジー 「きつちり払つてくる」

三枝、「生まれたての赤ちゃんは首が座つてい

ないから怖い」

パパジー、見かねて、抱き方を教えてまになつている。何度かやつてみて、ようやくさ

パパジー、カバンから哺乳瓶に入つた

ミルクを赤ちゃんに飲ませている。

料理が運ばれてくる。

ティトボーアイ、パパジー、食べている。

ティトボーアイ「パンパースはさつき代えてお

いた」

パパジー「泣かないでくれよな」

三枝、スマホをチエックしている。

三枝「タクシーカーが来た。それじゃあティトボーアイ、俺たちは行つてくる。ゆつくり食べ

ていい。夕方もう一度会おう」

パパジー、一気に食べている。

三枝、カバンを持ち、会計を済ませて

いる。

パパジー、口いっぱい頬張りながら、赤ちゃんを抱いて出ていく。

○ヴァレンズエラ・リムの家・前
三枝、赤ちゃんとカバンを抱えタクシ
ーから降りている。

パパジー、タクシードラムを待たせたまま、
民兵2名と話している。

○ 同・リビング

三枝、赤ちゃんを慎重に抱き、カバン
を持って、部屋に入ってくる。
ヴィルマ、笑いながら赤ちゃんを受け
取る。ドンドン、リム、リンロン、ヴ
ィルマを取り囮んでいる。

ドンドン「俺にも抱かせてくれ？」

ヴィルマ、赤ちゃんをドンドンに渡す。¹⁷⁹

リム「ありがとう、大切に育てるからな」

リム、足元に置いてあるカバンを三枝

に渡す。

リム「500万ある」

三枝、カバンを開け、確認している。

三枝「確かに、受け取りました。また遊びに
窺います。赤ちゃんが元気に育つていてる様
子を見たいので」

リム「いつでも来てくれ。それとセバスチヤンから伝言がある。娘さんがマニラカテドラルで来月に結婚式をあげる。三枝にもぜひ来てほしいと」

三枝「わかりました。必ず伺います」

○ トンド・路上（夕方）

ティトボーリ、パパジーやつてくる。

ベル、ラップ、段ボールの上で寝ている。横にはジョリビーの紙袋がある。

ティトボーリ、紙袋を覗いて、

ティトボーリ「おお、旨そう。待たせたな」

パパジー、ベルにカバンを渡す。

ベル、起き上がり、カバンの中を見て、

驚いている。

ベル「あのあの！ お金じゃない？ いつた

い、いくら入ってるの？」

ティトボーリ「290万だな。さつき渡した

10万を足せば全部で300万」

ラップ、起き上がって走り回っている。

ベル、大事そうにカバンを抱えている。

ベル「こんなところにいたら盗まれる。家を探さなくちゃ」

ティトボーア「一言いいか、子供を売るのは犯罪だ。売ったベルも買った俺も刑務所に行くことになる。誰にも話すなよ。俺たちだけの秘密だ！」いいな！」

ラップ「誰にも話さない。刑務所には行きたくない」

ティトボーア「何？」

ベル「また産んだら次も買ってくれるの？」

ティトボーア「ははは、また産むのか？」多分大丈夫だ」

ベル「ラップ、セックスしよう！」また産むわ」

ラップ「2度としないって言ってたのに！」

ベル「わはは、毎日、やりまくるよ！」

○ トンド・墓地・三枝の家

三枝、パパジー、ティトボレイ、アンジエリン、話している。

三枝「分け前だ。それぞれ20万ずつ。あとロメロとデレクに10万ずつ渡してやれ、残った100万はプールしておく。いいか？」

パパジー、ティトボレイ、アンジエリン、スマホから音楽を流して踊りだす。

アイナ、アラ、入ってきて踊っている。アンジエリン「NPOの給料の6か月分をこの2週間で貰ってしまった」

ティトボレイ「ホームレスがまた産むから、買ってくれって」

三枝「やつぱりな。300万もらうとそう思うだろ。まずはうまくいったな。これからもよろしく頼む」

ティトボレイ、パパジー、アンジエリン「はい！」
ボス！」

○ チャイナタウン・日本語教室

三枝、授業を終えて帰ろうとしている。
エドナ、待っている。

三枝「マクドか？ 今日は俺が払う」

○ 同・マクドナルド・内

三枝、エドナ、食べている。
エドナ「ゲイカップルが子供を欲しがつて
る。なんとかなる？」

三枝「養子？」

エドナ「代理母が望みみたいよ。1000万

払つてもいいって聞いた」

三枝「代理母はやらない。リスクが多くすぎる
からな。1000万は魅力的だけど」

エドナ「一度会つてみない？ 人工授精を何
度も試みているレズビアンから聞いた話な
の」

三枝「レズビアンも子供を欲しがっているの
か？ 会う価値はあるな。いつでもいいか
ら会えるようセッティングしてくれ」

エドナ「わかつた。次、いつ病院に来るかわからぬけど、来たら話してみる」

○ トンド・パンケーキハウス

三枝、キカイ、食事している。

キカイ「仕事がうまくいってるみたいね」

三枝「ようやくね。やつとこのような店に来

れるようになつた」

アイナ、アラ、チヨコが乗つたパンケ

ー キ、バナナスピリットとミルクシエ

イクを夢中になつて食べている。

三枝「アイナとアラに自転車をプレゼントし

たいのだがいいかな?」

三枝「アイナ、アラ、食べるのをやめ、お互

いをつつきあつている。

キカイ「いいけど、もつと自分のためにお金

を使つたら?」

三枝「使う気にならないんだ」

キカイ「ふーん、遊ぶのはやめたの?」

三枝「4年間遊びまくつて、遊び疲れた。い

つかゴルフはしたいけど、他の遊びは興味がなくなった」

三枝、窓から外を見ている。

三枝「マニラの電線はぐちやぐちやだなあ、危なくない?」

キカイ「スパゲティワイヤリングって呼ばれてて名物なんだけど、垂れ下がっているから下手すると感電する。停電も多いし、見た目も悪いし、最悪!」

三枝「電力会社が直さないの?」

キカイ「大統領も怒ってるよ、でもいつになることやら」

○トンド・墓地・N P Oオフィス

三枝、アンジエリン、話している。

三枝「未成年が産んだ子供を引き取つたこと

はある?」

アンジエリン「何度もある」

三枝「やつぱりな」

アンジエリン「といつてもたいていは家族が

育てるけどね、政府や支援団体が現金給付する制度もあるから」

三枝「未成年がレイプされて出産したんだ。

その父親が赤ちゃんを殺しかねない」

アンジエリン「最悪だよ！それは！預か

つてもいいけど、ボスなら私たちにまかせて」

三枝「そうか、考えてみるわ」

○ トンド・墓地・パパジーの家

パパジー、ロメロ、イアン（男30）、¹⁸⁶

話している。

ロメロ「俺が余計なことをしゃべってしまい、

こいつがややこしいこと言つてきた」

パパジー「誰？」

イアン「ロメロの友達だ。ロメロはなぜ金が

もらえるんだ？」

パパジー「はー、こいつなに言つてるんだ」

イアン「俺にもくれつて話なんだよ」

パパジー「ロメロ！」お前、何喋ってるんだ

よ」

ロメロ「すみません、お金がもらえたので自慢したくて、イアンは昔からのダチなんだけど」

パパジー「イアンとやら！、どこがダチなんだよ！」

お前に渡す金なんか1円もない。

イアン「そんなこと言つていののか、警察に話すぞ」

パパジー「何を言つてるのかわけがわからなうが！」
「帰れ帰れ！」

イアン「覚悟しとけよ」

○ 同 翌日。
リングを着けている。ネックレス、ブレスレット、イヤ
　　いる。綺麗なドレスを着て、花冠を被
　　アイナ、神妙な顔つきで椅子に座つて

メイリーン、アイナに化粧している。
キカイ、アイナにマニキュアを塗つて
いる。

アラ、口紅で遊んでいる。

三枝、やつてきて、目を見張つている。

三枝「どうした、何事？」

メイリーン「アイナ、ピースサインをしている。
ナはサガラでパレードに参加するの」

三枝「サンタクルーズアンつて何？」

キカイ「聖なる十字架の発見を祝うの」

三枝「ふーん、宗教行事なんだな。化粧が濃くないか？ 何もしない方がかわいいのに！」

メイリーン、アイナの化粧を終えて、

自分も化粧している。

パパジー、やつてきて、

パパジー、「おい、お前も化粧？」

マイリーン「私だつたまには化粧したいわよ。働いてばかりだからね」

アイナ、笑いながら、三枝に手招きし

て いる。

三枝、近寄る。

アイナ、三枝の頬にキスをする。赤い

口紅がべつとり。

アイナ、メイリーン、キカイ、パパジ

ー、笑い転げている。

○ トンド・墓地・三枝の家

三枝、パパジー、話している。

パパジー「ロメロのダチのイアンが警察に垂

れ込むとか、金をくれとか言ってきた。追

い返したけどまた来るだろうな。この件は

俺に任せてくれ

三枝「一人で抱えきれなくなつたら言つてくる
れ、知らないふりはできないからな」

パパジー「ありがとう」

三枝「ところでな、未成年がレイプされて出

産した子供なんだが、未成年の母親の名前

は?」

パパジー、スマホを見ている。

三枝「ジョバイと父親にそれとなく、養子に出してもいいか打診してくれないか？」

パパジー「一度、話してくれる。うん・・・」
ロメロが持ってきた話なので、イアンのこともあるし、ややこしくなるかもしれないな」

○ 同・大通り

女性たちがきらびやかなロングドレスを着て、行進している。
花束や十字架、聖母像を持つている。
アイナ、きりつとした表情で歩いている。
三枝、歩道から見ている。
三枝、スマホで撮影している。
アイナ、手を振っている。

第5話

○ トンド・パパジーの家

パパジー、ロメロ、イアン、警官2名、
話している。

警官1 「お前か、子供を売ったというのは本
当か？」

パパジー、「何の話かさっぱりわからないけど」

警官1 「マイキーという女性の子供を売った
んだろうが」

パパジー、下を向き、にやりと笑つて

191

パパジー、「何を勘違いしたのかようやくわか
りました。マイキーねー。料理長に紹介し
ただけですよ。今は子供とマイキーと料理
長とベビーシッターと一緒に住んでますよ」

警官1 「イアン、話が違うじゃないか」

イアン 「子供を売つて謝礼をもらつたって聞
いたんですよ。ロメロから」

ロメロ、顔をしかめて小声で呟く。

ロメロ「話を面白くしようとしただけ」

パパジー「女性を紹介したお礼をもらつただけですよ。俺の職業はポン引きなんですね」

イアン「マイキーに会いに行きましょうよ。こいつらいい加減なことを言つてる。俺、

マイキーも子供も知つてるので」

警官1「そうだな。但し、マイキーと子供が一緒にいたらお前、ただじやすまないからな」

イアン「こいつら電話するかもしれない」

警官1「パパジーを指さして、

警官1「そりやそうだ。お前！スマホに触

るなよ」

パパジー「いいですよ。行きましょう。疑い

はすぐ晴れますよ」

○ マカティ・レガスピビレッジ・湯野のマン
ショーン・リビング
パパジー、ロメロ、イアン、警官2名、

ドアのそばに立っている。

マイキー、メロディ、メイド、ベビー
シッター、ひそひそと話している。

パパジー「マイキーさん、突然訪ねてきて、
ごめんなさい。イアンと警官が、マイキー
さんが子供を売ったと疑っています。事実
はそうではないことを証明するために連れ
てきました」

マイキー「売ったって? ばかなことを!
同居しているだけですよ」

警官1「おい! イアン、どういうことだ、親

イアン「たしかにこの子はマイキーの子供で
す。ちくしょう! ロメロがそんなふうに

言つたんですよ」

ロメロ「だから! オーバーに言つただけだ

つて」

マイキー「マイキー、呆れています。

マイキー「イアンつて嘘つきでいい加減。
んな奴の言うことを信じるなんてどうかし
し

てますよ」

パパジー、マイキーに向かつて右手を軽く上げている。

警官1「今の話、間違いはないか? 同居しているだけなんだな」

ベビーシッター「はい、一緒に暮らしています。私が子供の面倒をみています」

警官1、イアンの顔を思い切り殴る。イアン、頬を押さえながらへたり込んでいる。

警官1、「いい加減なこといいやがって、この馬鹿野郎。己の目で見て確認してから垂れ込んで来い! あーあ、時間の無駄だつたな。俺たちは帰る」

警官2、帰り際にイアンを思い切り蹴つていてる。

警官2名、出していく。

パパジー「マイキーさん、本当にすみません。

俺たちも帰ります。仲良く暮らしているん

ですね」

マイキー「湯野さんはお店では厳しいのに、メロディにメロメロで、可愛がってくれています」

パパジー「それはよかつた。おい！ ロメロ、帰るぞ」

ロメロ、ほつとした表情。
イアン、手で顔と腰を押さえながら、
よろよろと出していく。

○ L R T・内

パパジー、ロメロ、座席に座り、話
している。

イアン、離れたところに座り、じっと
パパジーを見ている。

パパジー「ダチってのは同じレベルでいると
ずっと仲良くできるが、どつちかが抜け出
すともう片方が妬む。今回はまさにそれだ」

ロメロ「迷惑かけてすみませんでした」
パパジー「イアンには気をつけろ！」 ロメ

口！　またバカなことをしたら、お前とは
縁を切るぞ」

ロメロ「もう誰にも何も話しません。凝りま

した。イアンとも距離を置きます」

パパジー「それでな、話は変わるが、未成年
が出産した件なんだが、ジョバイとその親
父さんに会えないだろうか？」

ロメロ「まかせて」

○ トンド・墓地・内

三枝、歩いている。

セバスチャンからスマホに着信。

三枝、話している。

三枝「ご無沙汰しています、リムさんから聞
きました。お嬢さんが結婚するそうですね。
おめでとうございます。えつ？　今からで
すか？　1時間後には行けます。では後ほ
ど」

○ トンド・三枝の家

ネルソン、中を覗いているが誰もいないので、パパジーの家へ。

○ 同・パパジーの家・前

アイナ、新しい自転車に乗っている。アラ、補助輪のついた自転車に乗つているが、ふらふらしている。ネルソン、惣菜を見ている。メイリーン、客から金を受け取つている。

。

ネルソン「俺にも同じものをくれ、ライスも」

メイリーン「はいよ！」

ネルソン「新しい自転車が2台。おまえの家、どんどん物が増えてるよな。100円で売つてそんなに儲かるわけないだろう？ 日本人やティトボーアとなんかやつてるのか？」

メイリーン「私に聞くな。パパジーに聞け！」

ネルソン「日本人もパパジーもいない。不思議なのは日本人の部屋を覗いたら貧乏なま

まだし、パパジーだけが儲けてる。そ�そ

うティトボーリも羽振りがいい」

メイリーン「お金でも拾ったんじやない」

ネルソン「おかしいおかしい、みんな秘密に

しやがつて」

○ マカティ・ダスマリナスビレッジ・セバス

チヤンの家・リビング

豪邸。ガレージには14台の車。

セバスチヤン（男55）、三枝、マスカ

ツトを食べ、アイスティを飲みながら話している。

セバスチヤン、立っているメイドたち

に出ていくよう促す。

メイドたち、出ていく。

セバスチヤン「ゴルフは相変わらず毎日ですか？」

三枝「そうだよ。早朝に行き、昼に

セバスチヤン「そうだよ。何軒か中古車販売

は帰つて事務所に出勤。何軒か中古車販売

店を回つて帰る」

三枝「あいかわらず慌ただしい生活を送つて

い
ま
す
ね

セバスチャン「ははは、ゴルフを一人で回る
と18ホールを1時間からない。スピードゴルフが俺には合つてる」

三枝「あれは少しずるいでですよ。だつてパットを5m以内は入ったことにして打たないんだから」

三枝、小指を立てている。

三枝「女遊びのほうも？」

セバスチャン「もちろん。またパパジーに紹介してもらわなくては」

三枝「パパジーはポン引きをやめて、私の仕事に携わっています」

セバスチャン「ありやー、それは残念。ところ

りでな、今日来てもらったのは・・・リムさんから聞いたぞ。三枝は日本語の先生をやりながら、違法な養子の斡旋をしているのだな」

三枝「おっしゃる通り」

セバスチャン「わははは、堂々としてるな。」

それを聞いて頼みたいと考えた。我が家のは家庭教師に養子をプレゼントしたい

三枝「何歳ですか？」女性？独身？国籍は？」

セバスチャン「確かに40歳くらい、女性、独身でフイリピン人だ」

三枝「信用できる人ですか？」なぜ養子がほしいのですか？」

セバスチャン「信用できる。元教師で俺が引き抜いた。10年以上うちの子供や孫たちを見てもらっている。養子がほしいといふに理由なんてないだろう？」

三枝「確かに！」

セバスチャン「彼女の名前はクリス。小さいときには養子として養父母に引き取られた。今の仕事ができるのも養父母のおかげで、その恩返しがしたいらしい」

三枝「そういうことならお役に立てるかもしれません」

セバスチャン「ここにはベビーシッター、メ

イド、運転手もいるし、仕事中には子供の

世話も心配ない」

三枝「問題はないと思いますが、万が一、虐待や育児放棄があればすぐに子供を引き取ります。子供が不幸になることは絶対に許せません。一度、クリスさんに会いたいのですが」

セバスチャン「よし！また連絡する」

○トンド・墓地・三枝の家

ティトボーア「ティトボーア、三枝、デレク、話して

いる。

ティトボーア「デレクがようやく話を持つてきた」

三枝「ほう」

デレク「何もしていなかつたのにお金だけも

らうのはさすがに気が引けた」

ティトボーア「へー、お前でもそう思うのか」

デレク「子供は2歳の男の子で、お母さんは

マリア」

x

x

x

(フラツシユバツク)

マリア（女25）、彼氏と散歩している。

彼氏「お腹がだいぶ目立つようになってきたな。そろそろ結婚しようか」

マリア「はい、私でいいの？」

彼氏「お前もお腹の赤ちゃんも幸せにするよ」

マリア、顔が少し、曇っている。

マリアN「理想の彼氏だし、子供がいるなんて口が裂けても言えない」。

x

x

x

デレク「マリアは今の彼と結婚したいが、子供がいることを隠している。今更話せば破談になるから彼の子を妊娠したのを機に、この子を誰かに譲りたいと考えている。愛情をもつて育ててくれるなら、お金は必要ないということです」

ティトボーリイ「子供を産んだら妊娠線が残るだろう」

デレク「残らない体质だつたらしい。それで

余計に言い出せなかつた」

三枝「ただで引き取るのはワインワインじゃない。うちとしてはお金を払いたい」

ティトボーリ「どうして? ただで引き取つて売れば丸儲けじやないか」

三枝「そうかもしけないが、ただほど怖いものはない。これは俺の直観だけど」

ティトボーリ「ふーん、日本人らしい考え方だな。俺なら大喜びで甘えるけどな」

ティトボーリ「わかった」

三枝「売り先の見込みはあるから、写真と詳

しい情報がほしい、金額は未定だけど、買

うということでお話を進めてもらえないか」

ティトボーリ「わかった。デレク! 僕も一

緒に行くぜ」

○ デイビソリア・ショッピングモール

三枝、キカイ、アイナ、アラ、モール

内を歩いている。

三枝、コーヒーショップの前で立ち止まる。

三枝「今日はキカイの誕生日だ。いつも世話になつてゐるから、これで服とか買つたらいい。アイナ、アラにも何か選んでやつてくれ。俺は買い物が苦手なんで、コーヒーショップで待つていいか?」

三枝、キカイにお金を渡す。

キカイ、につこり笑つて三枝に抱き204

キカイ「うーん、いい誕生日。買い物に時間かかるけどいい? いは迷うし、このモールはついている。

フイリピンで一番安いと評判だし、なにせ

三枝「何時間でもいいよ。スマホで遊んで広いから」

キカイ「やつた!」

アイナ、アラ、キカイの手を引っ張り

走つていいく。

三枝、コーヒーを飲みながらスマホでゲームをしている。

スマホにエドナからの着信。

三枝「どうした？明日か？レズビアンカップルとゲイカップルと一緒に会えるんだな。よーし」

○トンド・墓地・パパジーの家（夜）

ケーリキ、ピザ、コーラ、スペゲティ、ブランデー、フルーツが置かれている。²⁰⁵

壁にはKIKAY HAPPY BI

RTHDAY！の文字。

キカイ、アイナ、アラ、新しい服を着て、ポーズを取り、スマホで撮影して

三枝、パパジー、ティトボイ、デレク、ロメロ、奥で話している。
ロメロ、写真を見せていている。

ロメロ「レイプされた未成年の母親の名前は

ジヨバイ。男の子で生後6か月、体重は8kg、身長は70cm。活発でよく動き、寝返りもできる。子供を譲る気はないかと聞いたら、お父さんは大喜び。金額は5万とか10万の話ではないとだけ伝えたよ」
パパジー「父親はひどいアル中。子供を殺しかねないし、子供を売ったことをペラペラしゃべりそうのが気になる」
三枝「こちらの身元はできるだけ隠して慎重に。といつてもロメロは顔がばれてるんだな」
パパジー「うまくやらないと」
デレク「デレク、スマホの写真を見せている。デレク、こちらは2歳の男の子で、母親はマリア。これが写真です。お金はいらないと言つてたけど、支払うというと、まんざらでもなさそう」
ティトボレイ「早く話を決めてほしいと言われた。結婚相手に子供がいることが、ばれやしないかと冷や冷やしている。子供はお

腹をしょっちゅうこわすけれど、健康には

問題なし」

三枝「よし、まかせてくれ」

○ 同・モール・コーヒーショップ

翌日。

パパジー、ティトボーアイ、アンジエリ
ン、デレク、ロメロ、コーヒー、フル
ーツソーダ、抹茶アイスティを飲みな
がら話している。

ティトボーアイ「俺たちの代わりはいくらでも
ボスを絶対に守らなければならぬ。だから
ボスを行かせたりしたら、このチーム

は即解散だろう」

金が入つてこなくなる」

デレク「馬鹿な俺でもわかる。ボスがないと

俺が盾になる」
に行かせないし、危ない目にあわせない。
。ボスを刑務所

ティトボーアイ「いい心構えだ」

アンジエリン「守るってどうするの？」墓地

に住む必要あるの？お金も少しできたらつ
ら、もつと安全な場所に引っ越しでもらつ
て、それからボディーガードを雇うとかだ
わね」

デレク「俺がボディガードやつてやる」

ティトボーアイ「お前じや頼りにならない」

パパジー「ボスはここが気に入ってるんだ。
楽しいらしい、うちの娘たちと話してると
癒されるとね。墓地から出て、一人暮らし
は嫌がると思う」

ロメロ「俺が女性を紹介しようか？」

ティトボーアイ「そういう話じゃない」

パパジー「一度ボスと話してみる」

○ オルティガス・コンドミニアム・ドンナと
ラニーの部屋・リビング

ドンナ、ラニー、ビリー、キコ、座つ
て、ピーナッツを食べている。

三枝、やつてくる。

三枝「初めまして、三枝です。子供のことでお伺いしました」

ラニーラニーです。彼女はドンナ。私のパートナーです。前にいるのがビリーとキコのゲイカップルです」

ビリー、ドンナに向かって、
ビリー「大喧嘩したのに、話を聞きに来いつてのはどういう風の吹き回しだ」

ドンナ「あんな無茶なことをもう言わないと約束するなら今まで通り仲良くしたい」

ビリー「約束するわ。もう言わない」

三枝「なぜ喧嘩したのですか？」

ラニー「私たち二人に精子を提供して、出産させて子供を二人作り、分けようなんて言

うから喧嘩になつたんです。その代償が1000万」

キコ「わかったわかった。もうそれ以上喋るな。ずっとムカムカしてたんだから」

三枝「女性の気持ちを考えないで」

ドンナ「そ うそ う、わかつて るなー」

三枝「今 日、お伺い し たの は代理母で はなく、
養子なら斡旋で きま すと い うこ とを 伝えに
来ま し た」

ラニー「養子で すか?」

三枝「そ うで す」
ドンナ「斡旋で きる子供の写真と かあ ります
か?」

三枝、スマホのデータを見せてい る。

ビリー、ドンナ、ラニー、キコ、スマ
ホを次々に見てい る。

三枝「2歳の男の子、この子は早く決めてほ
しいとせかされて いる。もう一人は6ヶ月
の男の子、未成年がレイプされて出産して
しまつた子供で す」

ビリー「レイプされて未成年が出産? ひど
い話だな!」

キコ「引き取る方も覚悟が いるな。こんなのが
決められな い」

三枝「わかります。いつか養子を欲しくなつ

た時に私のことを思い出してくれればそれでかまいません」

ラニー「料金は?」

三枝「500万。売り手に会うことはあります

せん」

ラニー「実績は?」

三枝「副市長に女の子を。五つ星のホテルの料理長にも女の子とかですね」

ラニー「お金持ちに売ってるんですね。信頼できそう。私は何度も人工授精、体外受精をしてるけどダメで、もう疲れちゃった。お金もたくさん使ったし」

ビリー「俺たちは自分の子供がほしい。だから養子は最後の手段だな」

三枝「フィリピンではゲイカップルやレズビアンカップルが正式に養子を引き受けることは法的に可能ですか?」

ドンナ「多分ダメ」
ビリー「俺もそう聞いた。だから誰かに俺の子供を産んでほしいのだ」

三枝 「将来、子供が学校に通つた時にお前の
お母さんレズビアンだぞ！ どうやつて子
供を産んだ！ といじめられたりしないの
ですか？」

ラニー 「いじめられるかもしれないけど、正

直に話すしかないよね」

三枝 「お金は大丈夫そうですね」

キコ 「俺は大企業の取締役だし、ドンナはア
メリカの企業との橋渡しをするB P O マネ
ージャー。比利もラニーもそれなりに稼
いでいる」

ドンナ 「あんたはいい身分だわ」

三枝 「カッフルになつて何年ですか？」

ドンナ 「15年かな」

三枝 「それは素晴らしい」

ビリー 「うちは良さそうですね」

三枝 「仲は良さ喧嘩するけどね」

ラニー 「たまに喧嘩するけどね」

ビリー 「うち喧嘩したことがない」

ドンナ 「それもどうかと思うわ？」

どちらか

が我慢してるんじゃない」

キコ「俺が我慢している」

ビリー「嘘つけ！」

キコ「へへえ」

三枝「子供が将来ゲイになつてもいい？」

ドンナ「嫌だね。男なら男らしい子に育てた
い。なよなよしたのは気持ち悪い！」

○ トンド・プール

三枝、キカイ、パパジー、メイリーン、

プールサイドで監視している。

アイナ、アラ、子供用プールで浮き輪

を使い、楽しそうに泳いでいる。

三枝「5月は暑い」

メイリーン「泳ぐのは今が一番」

パパジー「ボス！ みんなが心配している

だけど、ずっと墓地に住むつもり？ 病気

が怖いし、危ないやつもいるから安全なと
ころに引っ越しては？」

三枝「墓地がいい。アイナとアラを見ている
だけで楽しいし、力が湧いてくる」
パパジー「そう言うと思つたけど、真面目に
考えてみて！」ボスに何かあつたら本当に
困る。ボディーガードを雇うのはどうか
な？」

三枝「必要ないだろ、誰も俺が金を持って
るとは思わない」

パパジー「そうだな、金はあるのにまつたく
使おうとしない。墓地に来てから自分の部
屋に買ったものといえば、マットレスが一
つ増えたぐらい」

三枝「それもアイナとアラが昼寝するためだ
からな」

パパジー「確かにそうだけど……」

三枝「大きいプールで泳いでくる。パパジー
も行こう」

三枝、パパジー、プールで泳ぎだす。

○オルティガス・キコの家・リビング

豪邸だが、乱雑でサンミゲルの空き

瓶やスナック菓子が散らばっている。

キコ、ビリー、ソファにもたれている。

キコの父親やつてくる。

父親「おいおい、昼間からだらだらしやがつ

て、少しば部屋を片付けろ」

キコ、だるそうに立ち上がり、片付けてい

る。

父親「子供を欲しいんだって？」

キコ「あー聞いたのか？」

父親「やめとけやめとけ！」母親がいないと

いうのは子供にとつて不完全だし、子供がいじめられて社会的に孤立するのが目に見えている。教会もゲイカッブルによる養育は自然ではないと見なしている。それでも育てる覚悟があるのか？」

ビリー「覚悟しています。ベビーシッター

も雇います」

キコ「ゲイでもきつちり子供を育てられると

証明したい」

父親「育児放棄とか、いい加減なことをして
いたら取締役を解任する！この家からも
出て行つてもらうからな」

○マカティ・ダスマリナスビレッジ・セバス
チヤンの家・リビング
メイド、紅茶を注ぎ、クッキーを銀の
皿に盛つている。

セバスチヤン、クリス（女40）、三枝、
話している。

クリス「初めまして。こちらで家庭教師をして
いるクリスです。突然社長が養子をくだ
さるとおっしゃつたときは驚きました」

三枝、頷いている。

クリス「本当にありがたいです。精一杯育て
ます」

セバスチヤン「三枝よ、斡旋してくれたら、
クリス先生はずつと家庭教師を続けてくれ
る。俺にとつてもありがたいので、すぐに
まとめてくれ」

三枝「いつもはクリスさんがどういう人か詳しくお聞きするのですが、セバスチャンの紹介ですし、真面目そうな方ですね」

○トンド・墓地・NPO事務所・前（朝）

アンジエリン、バッグから鍵を取り出している。ドアの横にエコバックが置かれているのに気付く。かがんでバックの中を覗いてみると、赤ちゃんがタオルケットにくるまれていて、すやすやと寝ている。メモが添えられている。²¹⁷

慌ててバックを抱えて中に入り、メモを読んでいる。メモには（TO N P O、I A P P R E C I A T E Y O U R H E L P）とだけ書かれている。タオルケットから赤ちゃんを取り出し、性別や健康状態を確認して、バッグの隅々まで調べている。赤ちゃんを抱きながら、しばらく考えている。意を決して、赤ちゃんをエコバッグに

入れて飛び出していく。

○ トンド・墓地・パパジーの家・前

アイナ、アラ、フラフープをお腹に沿わせて回している。ふーふーと息を吐きながら、腰を一生懸命動かしている。

アンジエリン、エコバックを抱えて家の 中を覗いている。

パパジー「どうしたの？」

アンジエリン、手招きをしている。

パパジー、外に出る。

アンジエリン「ボスがいないのでこちらに来

た。事務所に赤ちゃんが置かれていた。生後1か月くらいじゃないかな？

男の子だ

パパジー「えつ」
パパジー、「えつ」
パパジー、バックの中を覗いている。

パパジー「どうする？」

アンジエリン「誰も見ていなかつたからここに連れてきた。ばれたらクビだわ」

パパジー「顔を両手で覆っている。アンジエリンは大胆だなあ」

アンジエリン「うちの施設に持っていくよりこつちの方がいいもんね」

パパジー「苦笑いしながら、パパジー「わかった。ひとまず預かる」

○サンタメサ・線路脇のスラム・ロメロの家・219

内

バラック、8畳ほどの広さ。ラタンのソファ、椅子がある。洗濯機、小さい冷蔵庫がある。

パパジー、赤ちゃんを抱いている。

ロメロ、ロメロの彼女カミールへ女、22歳覗き込んでいる。

パパジー「この赤ちゃんを1か月預かつてく

れ！」

5万円置いておく」

ロメロ「どうしたの？」

パパジー「アンジエリンの事務所に放置されていた」

カミール「よっぽどの事情があつたんだね。わい、かわいい男の子じやない」

ロメロ「預かるけど・・・」

パパジー、カミールを見て、

ロメロ「うん。同棲している。名前はカミー

ル」

パパジー「夜、寝られなくなるぞ。2時間お

きにミルクをやらないと泣きだす」

カミール「首は座つてる?」

パパジー「もうちよつとだな。目もまだぼん

やりとしか見えていないはず」

ロメロ「病気になつたら?」

パパジー「すぐに病院に行け、金は用意する」

イアン、そつとやつてきてじつと見て
いる。

パパジー、イアンに向かって、中指を立てる。

パパジー「おい！ イアン！ 目障りだ」

イアン「また金が貰えるのか！ その赤ちゃんは売るんだろう」

ロメロ「育てるんだよ」

パパジー「帰れ！ ぶん殴るぞ」

イアン、慌てて逃げ出す。

ロメロ「あいつ、いつもうろついてるから」

パパジー「余計なことはしゃべるなよ。カミールさんもな」

カミール「はーい、ミルクにパンパース、衣類、おもちゃを買わなければ？」

パパジー「5万あれば足りるだろう。大変だ

ろうが1か月頼む。謝礼は渡すからな」

カミール「やつたー、がんばる」

○トンド・墓地・三枝の家・前

家の前でアイナ、アラ、友達、サンダルを投げて道の上に置かれている缶缶

に当てている。

パパジー、三枝、話している。

パパジー「ボスがいなかつたので、アンジエリンの事務所に放置されていた赤ちゃんをロメロのところへ1ヶ月間という条件で預けてきた。1ヶ月たつて母親が名乗り出てこなければ、それからどうするか考えたらいいかと思つて」

三枝「いい考え方だ。ただロメロは世話できるのかな?」

三枝「カミールはやる気があると思う」「るからなんとかなると思う」
パパジー「やる気満々」

○ マカティ・ダスマリナスビレッジ・セバス

チヤンの家・リビング

三枝、スマホの写真とデータを見せて

いる。

クリス、セバスチヤン、真剣に見ていて

る。

三枝「一人目は生後6か月の男の子、この子はNPOに放置されていた。親が名乗り出てくる可能性があるので1か月は様子を見たい。二人目は2歳の男の子。母親が再婚したいので邪魔になつている。早く決めてほしいと急かされている。三人目は生後6か月の男の子で未成年の母親がレイプされて生まれた。3人とも健康状態は良好です」

セバスチャン「どうだい？」
セバスチャン、「3人共ほしい」
セバスチャン「一人にしてくれ」

クリス「未成年が出産した赤ちゃんを育てたい。最悪でしょう。生まれたときから不幸を背負っている」
セバスチャン「予想外だな」
クリス「この子を幸せにする」

三枝「健康には問題ないと聞いていますが、

念のためタンさんの病院で検査しましょうか？

セバスチャン「どうするかな」

クリス「引き取ったあとで私が連れていきます」

セバスチャン「クリスがそういうなら」

三枝「決まったということでいいのでしょうか、引き渡しについてはまた連絡します」

セバスチャン「決定だ、おう！頼む」

クリス、三枝とセバスチャンに背を向けて勝ち誇ったような不敵な笑みを浮かべている。

○ トンド・パパジーの家

アイナ、アラ、4人の友達。家の前で地面に長方形のコートを書き、パーティンテロ（カバティに似ている）という遊びをしている。メイリーン、キカイ、客の相手をしている。客が帰ったのを見て、パパジー

が話しかける。

パパジー「相談があるのだが、引っ越しですか？」

メイリーン、両手を前で組んで大きく目を開いている。

パパジー「えつえつえつ」

メイリーン「ボスを守りたい。ここに住み続けるのはやはり危ない。ところがボスは引っ越しを嫌がっている。俺たちも一緒に、喜んで引っ越しを嫌がると思う」

メイリーン「ボスのために引っ越ししかあ。世話をなつてているもんね。たしかに、なにか

あつたら困るよね」

パパジー「もちろん、引っ越し先でこの商売を続けていいし、もつとまともな店にした

ら？ お金は出せる」

パパジー「もちろんよね」

キカイ「いいんじゃない！ テイクアウトの店ならどこへ行つてもできるよ」

メイリーン「味には自信があるからね。慣れ

親しんだ墓地ともお別れかあ」

○サンタメサ・ロメロの家・中

ロメロ、パパジー、ティトボーアイ、話

している。

カミール、赤ちゃんを抱いている。

パパジー「気持ちよさそうに寝ているな。問

題はない?」

ロメロ「ミルクを吐くからびっくりするけど
ね。でも1ヶ月は長いなあ。俺は根をあげ

そうだけど、彼女ががんばっている」

ティトボーアイ「カミールはベビーシッターに

なれるな」

パパジー「それでな、レイプされた未成年。

ジヨバイだつたかな、赤ちゃんの行先が決

まつた」

ロメロ「ボスはすごいな。どんどん決めてく

る」

ティトボーアイ「ロメロ! 今からジヨバイと

父親に会いに行く。案内しろ」

ロメロ「行つてくる。赤ちゃんを頼む」

○ 同・ジョバイの家・中

狭い部屋。

パパジー、ロメロ、ティトボレイ、ジヨバイ、ジョバイの父親、床に座つて、話している。

ティトボレイ「NPOからきた。以前話した

が、子供を引き取りたい」

父親、ジンをラッパ飲みしている。

パパジー「醉つてるな、大丈夫か？」

父親、咳き込んでいる。

話だから出直すか？」

父親「ういー、ゲホゲホ」

ティトボレイ、ジョバイに向かつて、

ティトボレイ「お父さんはいつもこの状態

か？」

ジヨバイ「うん。私が嫌な目にあつてから、

ひどくなつた」

ティトボレイ「君が母親だから、君と直接話

してもいいのだが」

パパジー、眉をしかめている。

パパジー「未成年だろ、14歳だったよな。

どうしたものか?」

ティトボレイ「うーん、困ったな?」

ジヨバイ「私が聞きます。お父さんはいつも
酔っぱらっているから」

ティトボレイ、パパジーに向かつて、

ティトボレイ「進めてもいいか?」

パパパジー「なにかあれば俺が責任取るわ。や

ろう」

ティトボレイ「以前確認したと思うが、子供
に向かつて、

を譲ってくれるか?」

ジヨバイ「はい」

ティトボレイ「子供はいまだどこに?」

ジヨバイ「俺が知つていてる」

ロメロ、手を挙げている。

ロメロ「俺が知つていませんし、未

練もありません。お父さんとも子供の話はしないようにしています」

ティトボーア「では50万払う。それでいいか？」

父親「本当か？」父親、真顔になつて、にじり寄つくる。

父親「本當か？」50万くれるんだな。ほほほ、殺さなくてよかつた。売つたあー！」

父親、大笑いしている。

ジヨバイ「お父さんもそう言つてるんで、はい！」

パパジー、カバンから50万出してジヨバイに渡そうとする。父親、あつというまに金を奪い取り、部屋の隅で数えている。

ティトボーア、父親を憐れむようにながら、ジヨバイの耳元で囁いている。

ジヨバイ、目をパチクリしている。

ティトボーア、立ち上がる。

ティトボーア「じゃー俺たちは赤ちゃんのと

ころに行こう

ロメロ歩き出す。ティトボーア、パパ

ジー、ジヨバイ、ついていく。

父親、にたにたしながら、何度も何度も金を数えている。

○ マラテ・キリノ・スター・バックス

三枝、コーヒーを飲んでいる。

ティトボーア、パパジー、赤ちゃんを抱いて入ってくる。

ロメロ、大きなカバンを持っている。

三枝、手を振っている。

3人、席に座る。

ティトボーア「父親にはすでに50万支払っ

た。醉つ払いだから心配だけど。まあジヨバイも了解済み。といつても未成年だからなあ」

三枝「心配はいらないと思う。トラブルがないように大金を払っている。じゃあ俺

パパジー「トラブルたら俺が責任取る」

はマカティへ行く

ティトボーリー、ロメロに向かって、
スを守れ」

ティトボーリー「ロメロ！ ついていけ！」ボ

○マカティ・ダスマリナスピレッジ・ゲート
ロメロ、ゲートの横で、椅子に座り、
ガードマンと話している。

○同・セバスチャンの家・リビング

三枝、赤ちゃんを抱き、大きなカバンを持っています。
クリス、笑いをかみ殺している。
セバスチャン、三枝から赤ちゃんを受け取る。

セバスチャン「元気そうだなこの赤ちゃん。
三枝よ！ お前！ やるな、せつかちな俺
が驚くくらい、あつという間に持つきや
がつた」

三枝「だらだらしていたら、怒鳴るでしょう」

セバスチャン、クリスに赤ちゃんを渡す。

セバスチャン

「おい、クリス、プレゼントだ。

大事にしろよ。タンさんの病院、予約して

おくか?」

クリス、赤ちゃんを抱きながらじっと

見ている。

クリス「ありがとうございます、大切に育てます。健康診断は急がなくても良さそうですね」

セバスチャン「そうか」

セバスチャン、カバンを三枝に渡して

いる。

セバスチャン「500万ある。ご苦労さん」

三枝、カバンを開けて確認している。

クリス、後ろに下がり、三枝とセバス

チヤンが見ていないのを確認して、赤

ちゃんを覗き込み、恐ろしい顔をして

いる。

、

○ サンタメサ・メトロバンク・内

ジヨバイ、銀行員の前で緊張して座つ
て い る。

テイトボーリ、パパジー、ロメロ、ジ
ヨバイの後ろに立つて い る。

銀 行 員 「新規 です ね。普通預金のお取引には
最 低 1万3000円以上 必要 です。お持
ち で す か? それと一 口 も 見せ て く だ さ い」

ジヨバイ、学生証を提示 し て い る。

テイトボーリ、カバンから金を取りだ
し、銀行員の前に置く。

銀 行 員 「え つ」

テイトボーリ 「250万あります」

銀 行 員 「全部、普通預金にするのですか?

普 通 預 金 口 座 を 作 つ て 、定 期 預 金 も さ れ た
ら い か が で し ょ う か。普 通 預 金 の 利 息 は 年
1 % 未 滿 で す が 、定 期 に す れ ば 年 率 4 % あ
り ま す よ」

パ パ ジ ー 「全 額 定 期 は で き ま す か?」
銀 行 員 「普 通 預 金 が な け れ ば 定 期 預 金 口 座 を

作れないのです。普通口座に20万ほど入金して残りは定期というのはどうですか?」

ジヨバイ「それでいいですが、通帳やATMカードは必要ありません。デジタル口座でお願いします」

銀行員「わかりました。スマホを貸してください」

ジヨバイ、スマホを渡す。

銀行員「15分ほどお待ちいただけますか?」

銀行員、スマホを操作し、IDをコピーし、パスワードを設定し、現金を数えている。

ティトボレイ、ジヨバイに話している。

ティトボレイ「お父さんにはこのお金のことは内緒にしておくのがいいと思う」

ジヨバイ「ジヨバイ、にこりと笑つて、

ジヨバイ「だからデジタル口座にしたの。通帳やATMカードを持っていたらすぐにつかってしまう」

ロメロ「おつ! 頭いい」

ティトボーア「知られると全部酒代に消えて

しまうだろうな」

ジヨバイ、頷いている。

ティトボーア「君次第だが、このお金があればシニアハイスクール、カレッジにも行けるだろうし、行かなくても商売を始められる。辛い思いをして、お金をもらつても慰めにはならないかもしねりなけど」

ジヨバイ、みるみるうちに目に一杯、

涙を溜めている。

ジヨバイ「本当にありがとうございます。ジ

ロメロ「ザスは私を見捨てなかつた」

ジヨバイ「いいこともあるだろ」

ジヨバイ「ロメロ！」ありがとう

ジヨバイ、ロメロに抱きついている。

○ L R T・内
パバジー、ティトボーア、ロメロ、席
に座つている。
ロメロ「あんなに感謝されたー、この仕事を

やつてよかつた！」

パパジー「ボスの言うことは正しいなあ」

ティトボーイ「この仕事が法律違反というの

は納得いかないぜ」

パパジー「ところでな。相談なんだが、俺と

ボスは引っ越しするかもしれない。ボスが

一人で引っ越すのを嫌がるから、俺の家族

もつきあおうかと考えている」

ティトボーイ「俺も引っ越しかなあ。お金も

またもらえそうだし」

パパジー「ティトボーイは墓地にいてほしい」

ティトボーイ「そうだな、遠くには行かない

でくれ！ 近くに引っ越してくれよ」

パパジー「そのつもりだ。ただなあ、ボスに

は一度断られているから、なんとか説得しないと」

○ マカティ・クリスのアパート

広さは8畳ほど。質素な部屋。段ボーラーに本がたくさん入っている。大きな机の上にパソコンがある。
クリス、ベビーベッドに寝ている赤ちゃんを見て、けらけら笑っている。
笑い終えると、赤ちゃんの頬を何度もつねつていいる。赤ちゃん、目を覚まし、大声で泣いている。

クリス「泣くなよ！」泣くたびにほっぺたつねるからね。今はそれぐらいにしておくけど大きくなつたらもつとひどいことをしてやる。眞面目なふりをし続けた甲斐があつた。セバスチャンはまんまと信じてくれた。
お前をいじめると仕事の憂さを晴らせる。けつ！レイプされて生まれてきてここに来るとはお前はどれだけ不幸なんだ。私の養父母は私をずっと虐待していた。あの辛さを2倍にしてお前に味合わせてやる」

○ トンド・三枝の家・中

アイナ、アラ、三枝の背中に乗り、お馬さんごっこをしている。アイナ、三

枝のお尻を叩いている。

スマホにビリーからの着信。

三枝、アイナとアラを降ろして、話して

ている。

三枝「三枝です。あービリーサン、はい、す

みません、レイプされて生まれた赤ちゃん

は中古車ディーラーの方に先日お譲りしま

した」

三枝、しばらく聞いている。

三枝「はい、2歳の男の子は行き先がまだ決

まつていません。もう一人の放置された6

ヶ月くらいの男の子の情報を送ります」

アイナ、アラ、マットレスの上でゴロ

ゴロしている。

○ トンド・不動産屋・内
キカイ、座っている。

事務員、話している。

キカイ「メイン道路に面していて、1階でテ
イクアウトの店を営業できて、2階が住居、
そんな物件ありますか?」

事務員「賃貸ですか?」

キカイ「はい」

事務員「2階は3DKぐらいですかね」
キカイ「3部屋か4部屋あれば」

○ トンド・三枝の家・中

239

三枝、お金を配つていて
パパジー、アンジエリン、ティトボーア、ロメロ、デレク、踊つていて

三枝のスマホにドンナから着信。

三枝、スマホの画面を確認して、右手

を上げ、前後に振る。

三枝「騒がしいのはストップ」

全員踊りをやめる。

三枝、スマホに話す。

三枝「三枝です。アードンナさん、そうです

か、では明日伺います」

三枝、スマホを終えて、全員に話す。

三枝「デレクの見つけてきた男の子が決まるかもしない。明日、行つてくるわ」

パパジー、ティトボーアイ、アンジエリン、デレク、ロメロ、気が狂つたように踊つていてる。

アイナ、アラも加わつてますます派手に踊つていてる。

三枝、笑いながら、やけくそで踊りに加わつていてる。

○同・墓地・内
ティトボーアイ、三枝、歩いている。
麻薬中毒者がうつろな目で近づいてくる。手にナイロン袋をぶら下げている。
ティトボーアイ、身構えている。

麻薬中毒者、ナイロン袋を突き出す。

麻薬中毒者「おい、日本人、貧乏なんだろ、これ食うか?」

ティートボーアイ、麻薬中毒者の前に立ち

塞がつていてる。

ティートボーアイ「そばに来るな、ジャンキー野郎」

麻薬中毒者「うるせー、お前に話してるんじやない」

麻薬中毒者、さらに三枝に近づく。

ティートボーアイ、麻薬中毒者の後頭部を掴み、三枝から引き離している。右手

の拳を強く握り締め、

ティートボーアイ「殴られたいのか」

麻薬中毒者、ぶつぶつなにか言いながら離れていく。

ティートボーアイ「ボス、やつぱり引っ越した方

がいい。ここにいては何が起こるかわから

三枝「ジャンキーに貧乏人って認められていない」
るくらいだから、大丈夫だろ」「
ティートボーアイ「せめて、一人で歩くのはやめ
てほしい」

○ オルティガス・コンドミニアム・ドンナと

ラニーの部屋・リビング

三枝、ドンナ、ラニー、パイナップル

ジユースを飲みながら、豚の皮の揚げ物をつまんでいる。

ドンナ「2歳の男の子を引き受けようか迷っています。相談したくて」

ラニー「私はもう少し、体外受精を試みますが、ドンナをいつまでも待てせるわけにはいかないので」

三枝「体外受精が上手くいくといいですね」

ドンナ「男の子はなにか問題あります?」

三枝「母親の身勝手ですね。結婚したいから、前の彼との子供はいらないという」

ドンナ「そうなんだ」

三枝「お腹はよくこわすそうですが・・・」
ドンナ「たいしたことじやないですね。子供ならよくあることでしょう」

三枝「迷っているのは何が原因ですか?」

ドンナ、うつむきながら、

ドンナ「お金です。500万は高い。安くなりませんか？」

三枝「それはできません。買い手も喜ぶ、売り手も喜ぶ養子斡旋をしたいのです。それに違法ですので、私たちは刑務所に行く覚悟でやっています。どうかご理解ください」

ラニー、ドンナをたしなめている。

ラニー「赤ちゃん産んでくれたら1000万払うって言われて、安すぎると怒ってたじやない！500万で赤ちゃんをもらえるのよ。高いじゃなくて安いわよ」

ドンナ、大笑いしている。

ドンナ「そうよね、ラニーにはまいった」

三枝、鼻の下をこすっている。

三枝「安いなんて、初めて言われた」

ドンナ「それに赤ちゃんを貰うと今の二人だけの生活が大きく変わるでしょう？ 今まで仲良くやってきてラブラブなのにねー。

関係が壊れたらどうしよう？」
ラニー「子供が増えても私のドンナに対する

気持ちは変わらないわよ。ずっとラブラブ」

ドンナ、両手をあげて伸びをし、ラニーを抱きしめる。三枝を見て、

ドンナ「そうですよね。納得です」

ドンナ、ラニーの手を握り、

ドンナ「決めてもいい?」

ラニー「ふんぎりがついたの?」

ドンナ「いつまでも迷っていても意味ないでしょ。その間にも子供はどんどん大きくなつていいく。貰うなら早い方がいいでしょ。買い物と同じかな、衝動買いしちゃうのよ

ね」

ラニー「物じやないでしょ?」

ドンナ「ラニーもがんばって産んで? それ

で、赤ちゃんを二人育てよう」

ラニー「そうなるといいな」

三枝、カバンからハンディファンを出し、スイッチを入れ、顔に風をあてている。

三枝「思い切りのろけましたね。暑い暑い。

わかりました。2歳の男の子ですね。早速手配します」

○ トンド・墓地・N P O 事務所（朝）

アンジエリン、ドアに鍵を差し込んでいる。視線を感じて振り返る。

不安そうな女性、アンジエリンが振り返ったのを見て、慌てて帰ろうとする。

アンジエリン、呼び止める。

アンジエリン「何か御用があつたのでは？」

女性、おどおどしている。

女性「いえ、何も」

アンジエリン「もしかして、赤ちゃんをここに置いたお母さんでは？」

女性、後ろに下がろうとする。

アンジエリン「あなたですね。怒りませんから話だけでも？」

女性、体を小刻みに揺らしながら、か細い声で尋ねている。

女性「赤ちゃん！ 無事ですか？」

アンジエリン「もちろん！元気ですよ。安

全なところで預かっています」

女性、ほっとした表情。

女性一よかつた。これで思い残すことはありません」

女性、猛スピードで走っていく。

アンジエリン、追いかける。

アンジエリン「待つて」

女性、振り返らず、去っていく。

アンジエリン、追うのを諦めて、茫然と見送っている。

○イントラムロス・ミニラカテドラー

宮殿のような雰囲気。莊厳な結婚式。

大量の花や天井から吊るされたシャン

デリア、多数の参列者は伝統的な衣装、

豪華な衣装を纏っている。

セバスチャン、新婦をエスコートして中央を歩いている。

リム、三枝、タン、湯野、結婚式に参

列している。

三枝、リムの隣に座り、小声で話している。

三枝「赤ちゃんは元気？」

リム、にこにこしながら、小声で、
リム「元気だ。ヴィルマとドンドンは寝不足
気味だけど、協力して大事に育てている。
子供がいると日々の会話が増えて、共有す
る時間が豊かになっていく。夫婦仲が戻つ
た」

三枝「それはよかつた」

リム「どんな子に育つか楽しみでしかない」

三枝「ところであのホームレス夫婦がまた産
んだら引き取ってくれるかと打診してきた。
まだ妊娠はしていないけど、味を占めたよ
うで」

リム、思わず吹き出すが、周りの目を
気にして、さらにもう一度小声で話す。

リム「おおお、あんなに産むのを嫌がって
いたのに。ははははは、変われば変わるも

のだ。兄弟がいるほうが子供にとつてもいいというのはよくわかっている。妊娠した
ら知してくれ。ヴィルマにも聞いておく
が、多分喜ぶと思う」

三枝の後ろに座っていた湯野、三枝の

肩を叩く。

三枝、振り向く。

湯野「俺にも、もう一人くれ」

三枝「湯野さん、いくらなんでもそれは無理

だ。同居しているのだから、マイキーさん

が産むしかないでしよう」

湯野「そうだよな、マイキーに産んでくれと

頼んでみるけど···」

新郎新婦が体中に紙幣を張り付けられ

てている。新婦の体に紙幣を張り付けている。

湯野、リム、三枝、立ち上がり、新郎

三人、席に戻つて、新婦の体に紙幣を張り付けている。ア
ンジエリンさんにそれとなく頼んでみる。「いやいや、俺からは話しづらいな。ア

女同士なら嫌味がない。三枝よう、子供がいると早く仕事を終えて帰りたいと思う。今、俺はすごい幸せなんだ」

湯野、手を叩く。

湯野「そうだ。パパジーの子供たちを連れて海に行かないか？ 今は夏休みだし、暑いし」

リム、振り返る。

リム「俺も行くぞ。孫たちを連れてな。バスをチャーターするから、みんなでサービスクなんかどうだい？」

三枝「アイナもアラも喜ぶ。行こう！」

○ 同・入り口

セバスチャン、三枝、タン、キム（男
55）新婦を見ながら、立ち話してい
る。

三枝「キムさん、おひさしぶり」

キム「おい、三枝、妙な仕事を始めたんだつてな。けつこう噂になつてるぞ」

三枝 「良い噂？」

キム 「概ねな。言つとくけど俺は子供はいらない。子供がそばにいるだけで頭が痛くなる。やさしくするとすぐつけあがるし。嫁も子供は諦めて遊び歩いてるわ」

三枝 「ははは、あるある。仕事は順調？」

セバスチヤン 「フィリピンに韓国人が大挙して遊びに来るから、韓国食材のスーパーを次から次に開店させて大儲けしてやがる。ダバオ空港内にも立派な店を作ったんだよ

な」

キム 「おう、日本の食材も置いてるんだ。でもたいていして売れないから賞味期限がオーバーしてしまう。もう日本食材はやめようと思ふので、ごそつと送つてやるわ」

三枝 「嬉しいような、妙な気分」

セバスチヤン 「三枝、ちょっと気になることあるんだけれど暇なときに遊びにきてくれ。どう

セバスチヤン 「三枝、三枝の脇腹をついていい。いる。

があるんで暇なとき遊びにきてくれること

うもクリスの様子が変なんだ」

三枝、首をかしげている。

○オルティガス・コンドミニアム・ドンナと

ラニーの部屋・リビング

三枝、男の子をベビーカーに乗せて入

つてくる。

ドンナ、ラニー、目を大きく開け、両

手を広げて、駆け寄る。

三枝、ベビーから降ろして、ドン

ナに男の子を渡す。

ドンナ、抱きあげる。

ラニー、ドンナの肩を抱き、微笑みな

がら見ている。

三枝、出生証明書を渡している。

三枝「これがこの子の出生証明書です」

ラニー、受け取つて、見ている。

ビリー、キコ、入つてくるなり、ドン

ナのそばへ、

ビリー「おおお」

キコ 「ドンナ、ラニー、おめでとう」

ドンナ 「男の子に頬ずりしている。」

ラニー 「歩ける?」

ドンナ 、男の子を降ろして立たせて

いる。

男の子、キヨロキヨロしながら歩いている。

ラニー 「わー可愛い」

ドンナ 「元気に育つてよ。健康ならゲイにな

つても許してあげる」

キコ 「なんだよ、それ!」

ドンナ 「できれば頭のいいマツチヨがいいけ

ラニー 「私も精いっぱい手伝うから」

ドンナ 「ラニー、よろしくね」

○ パヤタス・デレクの家

ティトボーリ、パパジー、デレク、マ

リア(25)、話している。

机の上に 300 万置かれている。

マリア、おののいている。

マリア「もらい過ぎだわ。私のわがままなんだから」

ティトボレイ「わがままってわかってるんだ」

デレク「嬉しくないのか？ 貰つとけ、困る

ものじやないだろう」

マリア「それはそうだけど、いくらなんでも
300 万って？ 良くないことが起こりそ

う」

パパジー「じゃあ教会にでも寄付したら？」

君がどう使おうと自由だ」

マリア「そうだよね。考えてみる。ありがと

う」

マリア、札束から 30 万抜き出してデ

レクに渡している。

マリア「あんたたち、貧乏くさい。どうせ安い給料で働かされているんでしよう。これで何か買つたら？」

デレク、目を見張っている。

デレク「これってチップ？」

マリア「そうだよ。急かしたのに、完璧に仕事をしてくれたから、おかげでようやく彼と結婚できる。せめてものお礼」

デレク、パパジーとティトボーキをじつと見ている。

パパジー「使い道はあなたの自由。それならもらつとくわ」

デレク、ティトボーキ、にやけながら指を鳴らしている。

デレク「幸せにな！　お腹の子供は売るなよ

な」

マリア「嫌なこと言わないで」

○チャイナタウン・マクドナルド・内

三枝、エドナ、食べている。

三枝、封筒を渡す。

エドナ、封筒の中を覗いている。

エドナ「何ですか？　このお金？」

三枝「君が紹介してくれたレズビアン夫婦に

赤ちゃんを斡旋した。そのお札が30万

エドナ、口も目も大きく開けて、両手を握り締めている。

エドナ「ええつえつえつ、信じられない！」

0万つて！！！
ワオ～超ラッキー～

エドナ、立ち上がり、三枝に抱きつい

て
レ
る

三枝「ちよちよちよ、みんな見ていいる。恥ず

か
し
い

工 ド ナ — い
く て は 。 ま た 紹 介 す る よ ー ー ー 喜 び は 分 か ち 合 わ な

三枝、エドナを押しのけながら、
三枝「よろしく頼む」

○ ト ン ド ・ 墓 地 ・ 三 枝 の 家

三枝、お金を配つてゐる。

パジー、ティートボーアイ、デレク、ロ

メロ、アンジエリン、踊つている。

パ　パ　ジ　一　マ　リ　ア　が　チ　ツ　ブ　だ　と　言　つ　て　1　0　万

づつくれた。もらってよかつたのかな？」

三枝「そりやーついてたな」

デレク「さらにこんなに貰つていの？」

ティトボーアイ「お前がもつてきた案件だろ、それくらいもらうとやつたつて気になる」
アイナ、アラ、走りこんできて、一緒に踊つている。

○マカティ・レガスピビレッジ・湯野のマン

ショーン・リビング

湯野、メイド、ベビーシッター、料理

256

を作つている。

アンジエリン、マイキー、話している。

メロディ、小さなピアノで遊んでいる。

マイキー「アンジエリンは湯野さんが休みと聞いたら遊びに来るのね」

アンジエリン「だつて美味しいんだもん。日

本料理つてすごく綺麗。湯野さんのお店で食べたのが初めてだつたの。三枝さんはご馳走してくれないし」

キッチンから湯野が振り向いて、

湯野「アンジエリンさん、大歓迎だからいつでも私の休みの日に来てください」

アンジエリン、マイキーの肩をパチンと叩く。

アンジエリン「お世辞でも嬉しい」

アンジエリン、小声でマイキーに、
アンジエリン「湯野さんがもう一人、子供が欲しいって？ それであなたがもう一人産んでくれないかなって？」

マイキー「えー、彼氏いないのに産めるわけないじやん」

アンジエリン「湯野さんはダメなの？」

マイキー「私にまつたく触れようともしない。

魅力ないのかなー」

アンジエリン「そんなことないわよ。あなたには手を出さないって最初に変な約束したじやない。きっとそうよ。それを頑なに守つていいだけ、誘惑しちゃえば？」
マイキー体をよじつている。

マイキー「うううー」

アンジエリン「湯野さんのベッドに潜り込ん
だらいいだけじやない」

マイキー「言うのは簡単！ できなーいーーー」

アンジエリン「湯野さんは紳士だからね。あなたが迫るしかないわ。世話になつてるんでしよう。湯野さんのために子供を産んであげて」

アンジエリン 「ふふふ、ところでカナダには

行くの？

イキー 「行く気が失せてしまった。カナダつてお金のためだけだつたから。子供を売ろうかなんて思つたことをすごく後悔している。母親として最低だつた。湯野さんが生活費としてポンとお金を渡してくれるし、今の生活に大満足。もうカナダに行く意味がまつたくなくなつた。湯野さんは俺が死ぬまで、いつまでもここに住んでいていい、なんて言つてくれているの」

アンジエリン「ありやー」

○トンド・墓地・ティトボーカの家・前
ティトボーカ、若者2人、椅子に座つ
ている。

ビログ（男6）、通りかかる。

ティトボーカ、ビログを呼び止める。

ティトボーカ「おい、ビログ！ お前、少年
ギヤング団に入ろうとしているな」

ビログ「うん、だつてお菓子をくれるし、ご
はんも食べさせてもらえるもん」

ティトボーカ「母親はなんと言つてる？」

ビログ「お金を稼いで来いって」

ティトボーカ、ビログの胸を軽く叩き、

やりきれない表情。

○同・NPO事務所・内

アンジエリン、パソコンを操作してい
る。

スタッフ、男の子（4歳）を連れて来

る。

スタッフ「聞いていると 思いますが、この子、両親が二人とも強盗犯に殺害され、孤児になってしまった子供です」

アンジエリン「立ち上がって、アンジエリン「聞いています。了解しました」

○ 同・三枝の家

アイナ、アラ、小さな机の上で絵を描いている。

三枝、じっと見てている。

アンジエリン、男の子を連れてやつてくる。

三枝、顔をあげる。

三枝「どうした？」

アンジエリン「この子、両親が強盗犯に殺害され、孤児になってしまったの。施設に連れて行けという命令だつたんだけど、なんとなくこつちに来ちゃった」

三枝「胸が痛む。でもこの子が施設に行くこ

とを、みんな知ってるんだろう

アンジエリン「うん」

三枝「アンジエリン、やりすぎだぞ。大問題になるだろうが、さつさと施設に行け」
アンジエリン「さすがにダメか、残念」
三枝、アンジエリンの背中を押してい
る。

アンジエリン、体を伸ばして踏ん張り、
立ち止まる。

三枝「どうした？」

アンジエリン、親指を口に銜えている。²⁶¹
アンジエリン「これってーー、私たちがNPOを立ち上げたらしいんじやないの？」

三枝「はあー、なんだよ、突然」

アンジエリン「だつてそうでしょ。自分たちのNPOがあつて、自前の事務所や施設があれば、正規の養子斡旋も、違法な養子斡旋もできるじゃない？」
三枝「NPOを立ち上げるって？ できるの
か？ やり方を知らない」

アンジエリン「事務所に資料がある。できる

と思う」

三枝「誰かに相談した?」

アンジエリン「ううん? 今、思いついたの。絶対仕事しやすくなると思わない?」

三枝、頭を振っている。

三枝「わかるけど・・・」

アンジエリン「パパジー やティトボーリだつて、職業は何って聞かれたとき、違法な養子斡旋とは言えないじゃない。でもNPOで働いているなら大きな声で言える」

三枝、頬の肉を引っ張っている。

三枝「たしかに体裁はいいけど。問題は資金だよな。どれくらい必要なのか見当もつかない。今、پرلしてある現金は400万

ほど。足りないだろうな」

アンジエリン「資金は集めるものでしよう」

三枝「はは、簡単に言うじゃないか」

アンジエリン「なるようになるでしよう」

三枝「まあ俺も調べてみるわ。アンジエリン

はパパジーたちとも話し合ってくれ。それはそうと、さっさとこの子を連れていけ！」

アンジエリン「あちゃー」

アンジエリン、あへあへのポーズをしながら、子供の手を引き、走っていく。

○ マカティ・ダスマリナスビレッジ・セバス

チヤンの家・リビング

セバスチヤン、三枝、ココナツツジユースを飲み、キヤツサバケーキを食べながら話している。

セバスチヤン「クリスなんだが、赤ちゃんを引き取つて、わざか3日で、夜泣きがひどくて眠れないから、預かつてくれと言つてきた。それでうちにいる」

三枝「育てる気がないということ？」

セバスチヤン「夜泣きが収まつたら、引き取るらしい」

三枝「1年か2年間、預かるということです

ね」

セバスチャン「そうなるな。うちは使用人も大勢いるから何の問題もないのだが、気になることがある。赤ちゃんの頬が赤くなつて少し腫れていたのだ。もしかしたら殴つたか、引っ搔いたのではないかな？」

三枝「クリスは何と言つてますか？」
セバスチャン「顔をタオルで強く拭き過ぎたと」

三枝「うーん、微妙ですね。医者に診てもらいうしかないでしよう」

セバスチャン「タンさんの病院に連れて行つたんだが、はつきりとはわからなかつた。今は腫れも引いてなんともない」

三枝「はあ」
セバスチャン「うちで預かつてから何日かたつのに、クリスは赤ちゃんに会おうともしない」

三枝「そうなんですか、家庭教師の仕事は真面目にやつているのでしょうか」
セバスチャン「それは完璧」

三枝、首をかしげて いる。

三枝「ますますわからなくなつてきた」

セバスチャン「現状を知つてくれていたらい

い。まあ夜泣きはいざれなくなるだろうからそれまで、預かつておくつもりだ」

三枝「もしなにかあれば赤ちゃんはいつでも引き取りますが、売り手には何の落ち度もないし、すでに支払ってしまっているので返金はできないのですが」

セバスチャン「返金してくれなんて言わないから心配するな」

○ トンド・賃貸物件

キカイ、パパジー、不動産屋と物件を見ている。

アイナ、アラ、お互いの顔をいじつて

変顔を作りあい、笑い転げている。

物件は2車線の道路沿いで、1階は店

舗用、2階は4部屋、トイレ、バス。

パパジー、不動産屋と話している。

不動産屋「家賃は5万円、前払い金は3ヶ月」

パパジー「築何年? 古いなあ、改装しなく
ちや。その費用がかかる」

不動産屋「築15年です」

パパジー「パパジー、キカイを呼ぶ。

リーンは見たのかな?」

キカイ「メイリーンはここが一番気に入つて

た。私もそう! イートインもできるし、

人通りも多い」

パパジー、アイナとアラを見ながら、
パパジー「そうか、アイナ! アラ! ぶさ

いくな顔だな。ここに住みたいか?」

アイナ、アラ、笑いながら、

パパジー「ボスがここに一緒に住んでくれな
アイナ、アラ「うん」

いかな」

アイナ「私がボスと一緒に住もうってお願
する」

○ 同・墓地・三枝の家

三枝、パソコンでフィリピンのNPOについて調べている。

アイナ、やつてきて、三枝の横にちよこんと座る。

アイナ「ボス！ ここを出て一緒に住もう」

三枝「なんだい、突然」

アイナ「私と一緒に住むのは嫌？」

三枝、アイナのおでこを人差し指でつづいている。

三枝「パパジーに頼まれたな。でもアイナとアラにいつも会えるなら、いいよ」

アイナ、ピヨンピヨン飛び跳ねながら、帰っていく。

○ 同・墓地・小さなコーヒーショップ

アンジエリン、ティトボーイ、パパジー、粉末ジュースを紙コップに入れ、水と氷を入れて飲んでいる。

アンジエリン「今の仕事は順調でしょう。さ

らに良くするためにはNPOを設立しようか
という相談です」

パパジー「難しそうな話だな。ポン引きの俺
にはついていけない」

ティトボーアイ「設立の仕方とか、どうやつて
運営するのか、まったくわからないが、何
度か俺はNPOだと偽って交渉してうまく
いったから、賛成だ」

アンジエリン「ボスは資金の問題で頭を悩ま
せているようですが、概ね賛成してくれて
いると思っています。パパジーさんが賛成
してくれるなら、一気に話が進みそうです」

パパジー「俺はボスがやると言えればやるだけ
さー

○同・墓地・ティトボーアイの家・前
ティトボーアイ、ビログの母親リガヤ(女
34)、椅子に座り、話している。
若者2人、立って見ている。

ティトボーアイ「ビログが少年ギヤング団に入

ろうとしている。止めないのか、あんなに

いい子なのに」

りガヤ「いいとは思わないけど、うちは子供

が3人いて、食べるのに精いっぱい。ビロ
グがギヤング団から食べさせてもらえるな
らありがたい」

ティトボーア「ビログを学校には行かせない
つもりか?」

リガヤ「行かせてやりたいけど、出生証明書
もないし、学校は無料だけど、制服や教科
書は買えないし、交通費もない」

ティトボーア、両手で顔をこすつてい
る。

ティトボーア「ウワー、出生証明書がないの
か、どこまでいい加減なんだ。それじやあ
ビログがあまりにも可哀そう。それならい
つそ俺に預からせてくれないか、学校くら
い行かせてやるし、飯もたらふく食わせて
やる」

リガヤ「あんた! 偉くなつたつもりか!

やんちやなことばかりしてたくせに！ 預かるつて？ あんたの子供にする気かい？」

ティトボーア「それが嫌なら、金持ちに養子として出すつてのはどうだ？ たんまり貰えるぞ。但し、一生ビログとは会えなくなるけど」

リガヤ「たんまりつてどれくらい？」

ティトボーア「引き取り手が見つかるかどうかわからなから確約はできなけれど、うまくいけば300万！」

リガヤ「300万！ それはすごい。けど、

私はビログが大好きだから、そんな子を売つてお金を貰つたつて嬉しくない」

ティトボーア「学校も行かさない、ギャング団に入れば、将来刑務所を行ったり来たりするのは目に見えている。親としての責任も果たさず、いいかっこうしてくるんじやねえよ。ビログのことも考えてやれ、今ならまだ間に合う」

リガヤ「あんたの言う通りだけど、売るのは

嫌だ

ティトボレイ「それなら俺に預けろ、飯も食わせる。学校にも行かせる。勝手に売ったりしないからいつでも会える。よく考えろ」リガヤ、立ち上がり、顔をしかめながら立ち去る。

○ トンド・賃貸物件

マイリーン、三枝、パパジー、物件を見ながら話している。アイナ、アラ、階段をあがつたり下がつたりして遊んでいる。

三枝「マイリーンはここでいいの？」

マイリーン「うん、何とかなりそうだけど、

改装の費用がいくらかかるか心配」

三枝「アイナに頼まれたら嫌だなんて言えるわけない。俺はここに住んでいいよ」

アイナ、パパジーの横に来て、ハイタツチしている。

マイリーン「決まりね」

パパジー「改装が終わつたら引っ越しそう」

アイナ、アラ、喜んで抱き合つてゐる。

○ トンド・N P O 事務所（夜）

アンジエリン、ホワイトボードの横に立ち、説明している。

三枝、パパジー、ティトボーアイ、ロメロ、デレク、座りながら聞いている。カミール、赤ちゃんを抱いている。アンジエリン「夜は誰もいないので今日だけここで会議をします」

ホワイトボードに書かれている内容。

新規 N P O の活動 |

孤児や虐待を受けた子供たち、ストリートチルドレンを施設で保護し、教育やカウンセリングも行う。

組織団 | 理事長、三枝

理事、5名

支部統括、パパジー

資金調達、三枝

財務、未定

事業推進、ティトボーアイ

事務、アンジエリン

広報、ロメロ

登録——フィリピン証券取引委員会

(SEC)で法人登録

必要書類——定款、発起人情報

許可——地方自治体

資金調達——クラウドファンディング、

寄付

銀行口座の開設——

支援者——SNS、イベント、広報活動

児童養護施設、本部、支部の開設

パバジー「難しい、俺の頭では理解不能——

ロメロ「ギブアップ、広報って何をするの？」

デレク「もつとわかりやすく説明してくれ——

カミール「私はここにいてもいいのか？」

なり難解な話でわけがわからない——

いき——

三枝「バカばっかりや——

アンジエリン「書類作成や登録など難しいことは私がやります」

ティトボレイ「頼りになる」

三枝「ひとついいか！活動内容なんだがストリートチルドレンを保護する。これをトップに掲げたい、もちろん虐待された子供も孤児も引き受けれるけどな。主張がわかりやすいのは一番だと思う」

パパジー「おつ、それは気に入った」

ティトボレイ「支部もあちこちに作るんだろう？」児童養護施設を作つて子供の面倒を見る。相当、お金がかかりそう」

アンジエリン「まさにそこが問題だけど、ボスが何とかしてくれる」

三枝「簡単に言うな！」手持ちは400万あ

るが、到底足りない。まずはクラウドファンドティングをやる」

ロメロ「GAVIAがいいな。寄付を集めんな

らこのサイト」

三枝「おつ、さすが！ロメロはブログや

S N S をやつて いるのか?」

ロメロ「やつて いたけど、今はやめ て いる。」

仕事内 容を発信できなかつたから」

パパジー「そりや そ うだ。でもN P O ならバ

ンバン發信できる」

ロメロ「作つて みる。できたらみんなに見せ

るから」

三枝「それからな、N P O 理事長は辞退した

い。財務は やつてもいいのだが」

パパジー「なぜやらな い?」

三枝「日本で犯罪を犯して いるから目立った

くない」

アンジエリン、身構えて いる。

アンジエリン「人を殺したの?」

三枝「そんな根性は ない! 横領だ。パパジ

ーがすべて知つて いるから聞きたければど

うぞ」

アンジエリン「えつえつ、横領した犯人が財

務つて、笑つちやう」

ティトボレイ「昔の話だろ。ずっとボスはお

金を管理していく、無駄遣いもせず、きちんとやっている」

アンジエリン「私も信じてるよ」

三枝「もうひとつあった。俺は不法滞在なんだわ」

ティトボーリー、げらげら笑っている。

ティトボーリー「うーん。納得！ ボスは理事長にはなれない」

アンジエリン「ボス！ いい加減すぎる。ビ

ザ取つて、ちゃんとして！」

パパジー、会話を遮つて、

パパジー「そうか、じやあ誰が理事長になる？」

アンジエリン「ボス以外に考えられない。み

んな若いし、バカばっかりだし」

ティトボーリー「そうだよな、俺たちじや無理

だ。誰か探さなきや」
デレク「俺がやろうか？」

全員「うるさい！」

三枝、日本語で教えている。

生徒は8人。

三枝「今日は老人ホームでの入浴介助の手順をやります。まずは入浴前に血圧。脈拍、体温を測定します」

x x x

エドナ、三枝、並んで出ていく。

○同・マクドナルド・内

エドナ、三枝、食べながら話している。

エドナ「先日はありがとうございました。お金はすご

く助かった」

三枝「親には渡していないだろうな」

エドナ「1万だけあげた」

三枝「まあいい、それで何?」

エドナ「うちの患者なんだけど」

○(回想)BGC・病院・産婦人科

医者、説明している。
エドナ、立っている。

シオニ（女28）、椅子に座り、聞いて

ミラー（男46）シオニの肩を抱いて
いる。

医者「尿検査では陰性。超音波検査でも何も
見られません。妊娠ホルモンも検出されま

せん。残念ですが想像妊娠です」

シオニ、俯いている。

シオニ「またですか？」

シオニ、ミラーの肩に顔を埋めて、

シオニ「あなた、ごめんなさい」

ミラー、シオニの手を優しく握つてい

る

（回想終わり）

○チャイナタウン・マクドナルド・内

エドナ「妊娠したといつて、調べてみたら想

像妊娠。それも2回目なんだって」

三枝「聞いたことはある。どんな症状？」

エドナ「生理がない。吐き気、排卵障害、乳

房も張っている。やつかいのが、不安障

害」

三枝「何が原因?」

エドナ「子供が欲しい欲しいと強く思い過ぎて、ホルモンバランスがおかしくなつている」

三枝「そうなんだ」

エドナ「それで医者が詳しく検査すると不妊症だったの。それでご主人もすっかり参つていって、たまたま話す機会があつたので、養子を貰つてみては?」と勧めておいた。

感触がよかつたので、連絡があると思う」

三枝「名前を教えてくれ?」

エドナ「奥さんはシオニ、御主人はミラー、お金持ちのドイツ人だよ」

三枝「ありがとう」

○ 高速道路・バス・中

リム、リムの孫2人、リムの友人2人、
その子供5人、湯野、マイキー、メロ

デイ、ベビーシッター、三枝、キカイ、
アイナ、アラ、中型バスに乗っている。
スナック菓子を食べ、ビールやジュー
スを飲みながら騒いでいる。

○ スービック・ホワイトサンドビーチ

子供たち、浮き輪、水中眼鏡、ビーチ
ボーグで遊んでいる。
キカイ、マイキー、ベビーシッター、
子供たちを監視している。
大人たち、ビールを飲んでいる。
三枝、リム、湯野、子供たちを見なが
ら話している。

三枝「ストリートチルドレンや虐待された子
供、孤児を保護することを目的としたN
P

Oを立ち上げます」
リム「ほう、何かやるのではないかと思つて
いたが、大きく出たな。三枝のことだから
非合法の養子斡旋の隠れ蓑にしようとして
いるのではないか」

三枝、おでこを搔いている。

三枝「参ったなあ。図星です」

リム「NPOは資金集めが大変だから軌道に乗るまで苦労するぜ」

湯野「そんな資金あるのか？」

三枝「もちろん、今はあります。なんとかなりりそうな予感はあります。まずはクラ

ウドファンディングから始めます」

湯野「フィリピンでもそんなサイトがあるのか？」

リム「いくつかある。最初は集まるかもしれないが、継続しないだろうな。大口で毎年予算を組んでくれるようなスポンサーがいくつか必要」

三枝「ですよね。ある程度、組織が固まれば、スポンサー探しに本腰を入れます。ところでどなたか理事長になってくれそうな人はいないでしょか？是非紹介してほしい。それに加えて理事5人も」

リム「なぜ、三枝がやらない？」

三枝「私はそのような器ではありません。財

務経験があるので経理をやろうかと」

リム「趣旨に賛同してくれて、三枝のことを

わかつてくれて、金があるやつがいいな、

理事はどうにでもなる。問題は理事長だな、

探してみるから資料を送っておいてくれ」

湯野、エコバックからお重を取り出して机の上に並べている。

三枝、蓋を開けながら、

三枝「何を持ってきたのかと思ったら、お弁

当！ 7段重とはな」

三枝、すべてのお重の蓋を開けて、

三枝「ワオ！、これは！ すごい！ 見たこ

とない。豪華なお子様ランチ」

リム、覗き込んでいる。

大人たちがやつてくる。

リム「ここまでされると料理というよりアーリ

トじやないか！ 昨日から作っていたの

か！ 頭が下がる。食べるのがもつたいな

い」

湯野「気にせず食べてくれ。喜んでくれるな

ら作るのはまったく苦にならない」

三枝「すごいだろう。湯野さんが作ってくれ
ている。」
アイナ、アラ、走ってきて、三枝の手
を引っ張っている。弁当を見て固まつ
た

アラ、じつと弁当を見ていたが、そつ
と手を出し、手づかみで食べ始める。
アイナ、慌てて止めようとする。
アラ、次から次に手を出し、口に入れ
る。

アイナ「まだ食べてはダメでしょう。アラ！
あれもこれも食べない！」

湯野「アイナ、どんどん食べて、遠慮しない

で」

頬張っている
マイキー、メロディを抱きながらやつ
マイキー、夢中になつて、口いっぱいに

てくる。

リムの孫たち、走つてくる。

リムの孫「わわわわわ」

メロディ、食べ始める。

リムの孫たち、がつついでいる。

キカイ、紙皿、スプーンを配つてある。

大人たちも食べ始める。

ベビーシッター、飲み物を配つてある。

メロディ、湯野の腕を引っ張つてある。

メロディ「じいじ、一緒に遊んで？」

三枝「おっ、じいじって呼ばせているんだ」

湯野「羨けた。あこがれだつたんだ。三枝し

か理解できないだろうけど」

三枝「わかるわかる。じいじって響きがいい、

羨ましい」

アイナも三枝の腕を引っ張つている。

アイナ「ボス、一緒に泳ごうよ」

三枝、につこり笑つて、

三枝「ひと泳ぎしてきます。海は久しぶりな

んで」

湯野、
リム、「俺たちも泳ぐ」立ち上がる。

○ 第7話

同・墓地・ティトボーアの家・前

ティトボーア、リガヤ、リガヤの友達

2人、話している。

若者2人、立つて見ている。

リガヤ「あんた、大口叩いたよね。ビログを

俺に預けろ、飯も食わせて、学校にも行かせてやるって」

ティトボーア「あー言った。預ける気になつたのか?」

リガヤ「どうせなら私の友達の子供3人とビ

ログの合計4人、世話してくれ」

ティトボーア、両手を挙げて、口をあ

んぐりと開けて、顔を覆っている。

ティトボーア「げげー、4人も! 他の3人

の子供も同じくらいの年齢なのか?」

リガヤ「あー、同じような年齢で、少年ギヤ

ング団の周りをうろうろしている。まだ幼

いから役に立たないんだけど。できなの

か? 口だけか! 根性ないな」

ティトボイ「待ってくれ、少し考えさせてくれ。なんとかしたい」

○ トンド・賃貸物件

職人が内装工事をしている。看板が置かれていて、MAYLEEN EAT

ERYの文字が。
メイリーン、キカイ、アイナ、アラ、
作業を見ている。

キカイ「もうすぐだね」

メイリーン「近所を見に行こう。売っている
ものとか値段とか調べて、メニューを考え
なくては」

○ サンタメサ・ロメロの家

カミール、赤ちゃんを抱いている。
ティトボイ、赤ちゃんを見ている。
ロメロ、スマホをティトボイに見せ
る。

ロメロ「NPOのクラウドファンディング、

やりかけだけど見てくれる？」

テイトボーリー、スマホを押し返してい
る。

テイトボーリー「アンジエリンやボスに見せろ、
俺にはわからん。今日来たのはNPOに放
置された赤ちゃんが無事に育っているかな
と思つてな。もうすぐ1か月になるだろう」

カミール「見ての通りよ。病気しない、泣
たり、笑つたり、元氣いっぽい」

テイトボーリー「NPOに母親が会いに来た。
無事だと分かると思い残すことはないと言
つてすぐに姿をくらましたらしい。もう戻
つては来ないとと思う」

ロメロ「そうなのか、じゃあ養子に出せるな」
テイトボーリー「おう、それでもう一つ相談が
あるのだが、6歳くらいの男の子を4人預
かってくれないか？ 食事させて、学校行
かせておやつをあげくれたらい。ただ
出生証明書がない子供がいる。これは俺が

などかかる

口メ口「出生証明書の遅延登録できるの？」

けつこう手間だよ」

テ
イ
ト
ボ
ー
イ
親
を
引
き
ず
つ
て
で
も
や
ら
せ
る
。

子供の将来かかかっているからな」

氣こ満ち溢れてゐる！
でもなあ、ここは

児童養護施設になつてしまふんだけど

カミール「うひやー、4人も！ お金貰える

289

料は払う。ただな、少年ギヤング団に足を踏み入れかけなんだ。精神的支配はまだ受けていらないようなんだがな」

口メ口「ギヤングに染まる前に抜け出させな

カミリレ
「私はやつてみた。
でも一人じや

無理だから友達も誘つてい
い？

テイトボーア「口メロは頼りにならないから

もう一人いた方がいいだろうな

ロメロ「4人かあ、男の子ばかりだろ、か

ミール！ 安請け合いして大丈夫か？」

カミール「赤ちゃん、私が育てるんだよ。なんとかなるなる」

○トンド・墓地・三枝の家・前

三枝、アイナ、アラ、バレーボールをしている。

三枝のスマホに着信、三枝、ボーレルを

アイナに渡して、話している

三枝「はい、三枝です。ああビリーさん。放置されていた男の子ですね。斡旋できます

よー

○オルティガス・キコの家

三枝、ビリー、キコ、キコの父親、蒸しパンを食べ、アイスティを飲んでいる。

ビリー「レズビアンのドンナとラニーは毎日

が楽しそう。仕事も子育ても張り切つて、生き生きとしている。彼女たちを見ていると俺も子供が強烈に欲しくなった」

三枝「ドンナさんが喜んでいる姿が目に浮かびますね」

キコ「あまりにも楽しそうなんで・この頃は会うたびにむかむかしてくる。素直に喜んであげたらしいのに俺は心が狭い。そんな自分が嫌になる」

ビリー「友達のゲイカップルに話をしたら、三枝さんを紹介してくれって言う。こりや

「うかうかしてたら周りにみんな赤ちゃん持つていかれてしまう。それで焦つて今日は来てもらつた。何人かに代理母を頼んだのだが、どうも感触がよくないし、養子なら後腐れもなさそうだし、揉めることもないだろうから」

三枝「ゲイもレズビアンも子供が欲しい人はたくさんいるようですね」

ビリー「まだ紹介はしないよ。俺たちが先だ

からね」

三枝、スマホを見せている。

三枝「わかりました。さて本題に入りましょ
うか。赤ちゃんは生後2か月くらいの男の
子。誕生日も名前もわからぬ。ただ母親
には一度、うちのスタッフが会っていて、
フィリピン女性でおとなしそうだつたと。
それしかわかっていることはありません。
1か月預かっているのですが、病気もせず、
健康です」

キコの父親、おもむろに立ち上がり、
三枝を睨んでいる。

キコの父親「フィリピンでは同性婚すら認め
られていないのに、ゲイカップルが養子を
もらうのは後々面倒なことになるかもしれ
ない。その点君はどう思う?」

三枝、間髪入れずに、

三枝「無責任なようですが、まったくわかり
ませんし、考えようとも思いません。考
えたところで答えが見つかるわけもありませ

ん。私は赤ちゃんが幸せに育ってくれることだけを願っています。養父母がゲイであろうと、レズビアンであろうと、独身であろうと、それは本質的な問題ではありません。大切なのは愛情と責任をもつて、もちろん財力もあつてですが、きちんと子供を育てられるか——その一点だけです」

キコの父親「いい加減な野郎だな！」と言いたいところだが、正直でいい。適当なことを言うかと思ったのだが――

三枝「フィリピンではシビルユニオンも認められていませんよね」

キコ「フィリピンのLGBT人口の割合は1%もいて、社会に受け入れられているのに、法的な権利保障はまったく認められていない」

三枝「当然ですが、この赤ちゃんは出生証明書もありません」

ビリー「考えないとな

キコの父親「出生証明書は俺が何とかしてや

る。心配するな。お前たちはこの子の名前

を決めて、子育てに専念しろ」

キコ、肩の力が抜けている。

キコ「親父もやつと賛成してくれた」

三枝「受け渡しは明日でいいでしょうか?」

○ マニラ市役所・市民登録課

ティトボレイ、リガヤ、リガヤの友達、

椅子に座つて待つている。

ティトボレイ「先が思いやられるな。遅延登

録だから何度も市民登録課に来ないと出生

証明書は取れない。宣誓供述書も必要だし

な。ビログは病院で生まれたのか?」

リガヤ「助産師だつた」

ティトボレイ「その助産師とは連絡がとれる

か?」

リガヤ「連絡先はわかる」

ティトボレイ「そうしたら、宣誓供述書は作

成できそうだな。担当者の言うことをよく

聞けよ。決してあきらめるな。二人とも出

生証明書を取れたら1万づつ払ってやる」

リガヤ「それならやるわ」

ティトボーア、ため息をついている。

○オルティガス・キコの家・リビング

翌日。

キコの父親、ドンナ、座っている。

ラニー、赤ちゃんを抱いている。

ベビーシッター、ベビーベッドを整え

ている。

机にはベビー用品が置かれている。

ビリー、キコ、立ったり、座ったり落
ち着かない。

ドンナ「おーい、キコ、気持ちわかるけど。

座りなさいよ」

キコ「うん」

x

x

x

ビリー、両手を何度も振っている。
くる。

三枝、赤ちゃんを抱きながら、入つて

キコ、駆け寄つて、

ドンナ、笑つてゐる。

ドンナ一まさか！
名前を決めたんだ。ホセ・

リサールのホセ?

る。
テニス、
キヨの父親、
にこそこしてい

○ トンド・墓地・三枝の家（夕方）

アイナ、アラ、上手に手づかみで食事
している。人参を皿の隅によけている。²⁹⁶
三枝、お金を配つてゐる。

パンジー、ロメロ、カミール、デレク、
アンジエリン、ティトボーイ、踊つて
いる。

三枝「放置された赤ちゃんがさきほど500万で引き取られた。新設のNPOに300万を寄付。100万はペールして、残りは山分けにする。カミール！ 1カ月ご苦労、

アンジエリンもな

全員、笑いながら激しく踊っている。
アイナ、アラ、食べるのをやめて踊つ
て いる。

三枝、キカイ、踊りに加わつて いる。
三枝のスマホに着信。外に出る。

三枝「はい三枝です。あードンドンさん！ 何

か問題でも？ はいはい、そういうことで
したら明日伺います」

三枝、スマホをポケットに入れ、戻つ

てくる。

三枝「おいおい、踊りすぎだろう。もしかし

たら理事長になる人が見つかるかもしれな
い」

パパジーたち、叫びながら、踊り続け

て いる。

○ヴァレンズエラ・フィリピン料理店・内（夜）
三枝、ドンドン、食事しながら話して
い る。

三枝「赤ちゃんは元気ですか？」

ドンドン「最初はどうなるかと思つていまし
たが、ようやく自分の子供のように思えて
きました。ヴィルマも張り切つています」

三枝「よかつた」

ドンドン「父親から聞きました。ストリート
チルドレンのためのNPOを創設するんで
すね。それで理事長を探しているとか？」

三枝「はい」

ドンドン「私は来年、下院議員に立候補しま
す。父親の地盤が強力なので当選できるラ
インにいると思います」

三枝「ほう、それはそれは」

ドンドン「ただ肩書が弱い。父親のサンダル
工場の常務しかないので選挙のためで
すが、ぜひNPO理事長の肩書がほしい。
ストリートチルドレンのためのNPOなら
イメージも申し分ない」

三枝「リムさんから聞いていますか？私たち
は違法な養子斡旋も続けるつもりです。リ
ムさんに相談したときに、NPOを隠れ蓑

にするつもりなんだなとすぐに見抜かれました。露見すれば理事長責任も問われてしまします。その覚悟はありますか?」

ドンドン「聞いています。違法な養子斡旋で赤ちゃんを引き取ったのは私が最初ですよね。覚悟というより、もうすでに足を踏み入れている状況です。ただし私と理事は今後の違法な養子斡旋については一切関与しません。三枝たちが独自に秘密裡に斡旋を進めることについては差し支えありません。このような立場でいきたいと思つて299
います」

三枝「わかりました。さて問題は資金です。今、使えるお金は700万ほどで、これでは到底足りません。強力な支援者、スポンサー探しをしなくてはなりません」

ドンドン「それは任せてください。私はフィリピン商工会議所青年部のメンバーですし、中国人の富裕層グループから多くの支援を集めることができます。近年、中国人の子

供を標的にした誘拐や拉致、殺人が多発しています。その背景にはストリートチルドレンが成長して犯罪に手を染めるケースがあると考えられます。こうした状況は私たちにとって深刻な脅威となっています」

三枝「確かに中国人は狙われていますね」

ドンドン「父親も民兵を雇っているくらいですから。それから理事ですが、マカティの病院長タンさん、父親のリム、など肩書が申し分ない人を5人選びました」

三枝「リムさん、タンさんがよく引き受けてくれましたね。ありがたい。それではドンスタッフに会つていただいて、決めたいと

ドンさん、トンドに来てもらえますか？」

三枝「慌ただしく入ってくる。

三枝「すまない、今日は食べている。

三枝、慌ただしく入ってくる。

○チャイナタウン・マクドナルド

エドナ、食べている。

三枝「慌ただしく入ってくる。

三枝「すまない、今日は食べている時間がな

三枝、封筒を渡している
は謝礼。また次の機会にゆっくり話そう
エドナ、笑いながら見送っている。

○ トンド・墓地・三枝の家・前

トラックが横付けされている。

アイナ、アラ、スンカというフイリビ
ンの伝統的なゲームで遊んでいる。
三枝、帰ってくる。

アイナ「みんな待ってるよ。引っ越しだよー」

三枝「ごめん、遅くなつた」

三枝、部屋に入ろうとする。

三枝のスマホに着信。

三枝「はい、三枝です。あーミラーさんですか？」

聞いています。ドイツの方ですよね。

私は日本人です。英語でもタガログ語でも
大丈夫です。はい、ただ子供たちがすべて
引き取られてしまい、斡旋できる子供が今

はないのです。見つかり次第、こちらから連絡します」

○トンド・墓地・ティトボーアの家・前
リガヤ、コリーナ（35）、女の子、立
つていてる。

若者、ティトボーアを呼んでいる。

ティトボーア、出てくる。

ティトボーア、「出生証明書は取れたのか？」

リガヤ「まだだよ。難しいことばかり言われてくじけそう」

ティトボーア「諦めるなよ」

リガヤ「わかってる。今日はね、コリーナが300万もらえるなら売りたいって言うから連れてきた」

ティトボーア「金に目がくらんだか？」永遠

に会えなくなるぞ。俺も行先は知らないし、上流階級に貰われるとしかわからぬ」

コリーナ「4歳になる。この子どう？」

ティトボーア「どうつて言われても。女の子

だな

コリーナ「子供は6人いるから、一人くらい、いなくなつてもどうつてことはない。主人が怪我をして、収入が途絶えて、困つている。この子を売れば、他の5人の子供がご飯を食べられる」

ティトボーアイ「旦那は納得してるので？」

コリーナ「しようがないと諦めている」

ティトボーアイ「じゃあ、写真撮るぞ。この子のこと詳しく教えてくれ」

ティトボーアイ、女の子をスマホで撮影
している。

○ トンド・墓地・三枝の家

三枝、荷物を片付けていた。石棺を撫でながら、ぶつぶつ呟いていた。

三枝 N 「世話になつたな。来たときは墓地なんかに住めないと泣いたのに、どうして名残惜しい？」

三枝、荷物をすべて外に運びだし、振

り返つて いる。

三枝 N 「また遊びに来るからな」

○ トンド・パパジーと三枝の新しい家

トラックが家の前にある。

メイリーン、キカイ、手伝いの人たち、
家財道具を次々に運び込んでいる。
アイナ、アラ、三枝の両腕にぶら下が
つて いる。

三枝 「二人とも大きくなつた。重い」

パパジー、階段を降りてくる。

パパジー 「ボスの荷物少なすぎる」

三枝 「パパジーのところは荷物が増えたなあ」

パパジー 「ボスが自転車とか、買つてくれる
から」

三枝 「部屋に荷物が入りきらなかつたら、俺
の部屋を物置代わりに使つたらいい」

○ サンタメサ・ロメロの家・中
ロメロ、頭を抱えている。

ビログと3人の男の子、走り回つて
る。

カミール、おやつを持って帰つてくる。
子供たち、歓声をあげながら、おやつ
を奪い取つていく。

ロメロ「ここは狭いから頭が変になる。学校
に行けばちよつとはましになるんだろうけ
ど」

カミール「賑やかでいいじゃない。赤ちゃん

より楽」

カミールの女友達、エリ（23）やつ

てくる。

ロメロ「助かる！」
カミール「エリが来てくれたよ」

エリ、子供たちを見て、

エリ「元気いっぱいじゃない？」
ロメロ「こいつらを静かにさせるにはどうす

ロメロ「やつぱりな」
エリ「スマホ」
ればいい？」

ロメロ、スマホでパパジーと話してい

る。

ロメロ「パパジー、安いスマホを4台買って
もいいかな？ 餓鬼を静かにさせたい」

ロメロ、ビログと子供たちに手招きし
てている。

ロメロ「やつたーOKが出た。スマホを買
いに行こう。ビログ！ ついてこい」

○ パヤタス・デレクの家

デレク、助産師、ビーフンを食べ、水

306

を飲みながら話している。

助産師「うちで出産した女性が産後鬱になつ
てね。赤ちゃんが病気になつても病院に行
かず、ほつたらかし。昨日は私のところに
来て、焦点が定まらない目つきで、赤ちゃん
を殺して、私も死にたい死にたいって」

デレク「産後鬱って何？」なぜそんなことに

なる？」

助産師「母親として自信がなくなり、育児を

しなくなる。旦那が他の女性の家に行つた
きりで帰つてこない。一人で育てなければ
ならなかつたのが原因だろうね」

デレク「治るの?」

助産師「周りのサポートがあれば治るんだけ
ど、旦那があれだからね」

デレク「じやあどうする?」

助産師「あんたのところで預かってくれない
か?」

いと。親子共々死んでしまいそうなので
デレク「そういうことならまかせて。サンタ
メサで、何人か子供を預かっている。病氣
になつてもすぐ病院に連れていいく。いつ
でも会えるから、何も心配はない」

○サンタメサ・ロメロの家・内

カミール、エリ、子供たちとお遊戯を
している。

ロメロ、スマホを操作している。

デレク、赤ちゃんを抱いてやつてくる。

ロメロ、大きく口を開け、体を反らして いる。

ロメロ「まさかと思うが、その赤ちゃんも世

話しきつてか？」

デレク「ビンゴ！」

カミール「6ヶ月くらい？　男の子？」

デレク「4ヶ月と少し、男の子だよ。お母さんが産後鬱になつて、預かることになつた」

カミール「了解」

ロメロ「カミール！　即答かよ！　嫌とは言

わないんだな。NPOの施設ができたら保母さんとしてやつていけるな」

カミール「私の人生で今が一番楽しい。人からこんなに頼まれるなんてすごくなりがいがある。NPOができたら、もちろんやるつもりだよ。エリも一緒にね」
デレク「やりやり！」

○ トンド・墓地・NPO事務所（夜）
机の上には書類が何枚もある。

アンジエリン、棚にあるバインダーを開き、黙々と作業している。一区切りついて、バインダーを閉じ、頸を触っている。

アンジエリンN「だいたい書類はできただけど、理事長や理事に児童養護施設や本部が決まらなければ前に進まないじゃない」

ロメロ、中の様子を伺っている。

アンジエリン、気が付き、ロメロを招き入れる。

アンジエリン「どうしたの？こんな夜遅くに」³⁰⁹

ロメロ「クラウドファンディングのページができたので誰かに見てもらいたくて、ティトボーリにはあっさり断られたんだ」

アンジエリン、ロメロのスマホを見ている。

アンジエリン「すつきりまとまっているから、いいんじゃない。ロメロは才能あると思う」

ロメロ、にやけている。

ロメロ「アンジエリンは頭もいいし、かわい
いし、デートしようか！」褒めてくれて最
高」

アンジエリン、ロメロの肩を思い切り
叩く。

アンジエリン「もう、調子いいんだから、力
ミールに告げ口するよ」

ロメロ、よろけながら、

ロメロ「才能なんかまつたくないよ。グレグ
ルジエミニが指示通りやつてくれるから」

アンジエリン「私も書類ができるだけ
ど、なにも決まらないから提出できない」

な

ロメロ「そうだよな。早く決めてくれないか
な」

○ トンド・パパジーと三枝の家・前

メイリーン、キカイ、料理を作つてい
る。

ドに置き、振り付けを見ながら、ダン
アイナ、アラ、スマホをスマホスタン

スをしている。

店の前に椅子が並べてある。

三枝、パパジー、ティトボーアイ、アンジエリン、ロメロ、デレク、カミール、エリ、ドンドン、椅子に座り、会議をしている。

エリ、赤ちゃんを抱いている。

三枝「紹介する。ミスター・ドンドンさん、N P O の理事長に立候補してくれた。パパジーは知っているな。ヴァレンズエラの副市長リムさんの次男で、来年、下院議員選挙に立候補する。現在はサンダル工場の常務取締役」

ドンドン、手をあげて、みんなを見渡し、頷いている。

三枝「もうひとつ付け加えておく。言うかどうか迷つたのだが、ドンドンさんが話しておいたほうがなにかとやりやすいというのでな。俺たちが最初に養子斡旋した赤ちゃん、そうそうティトボーアイが頑張ったあの

ホームレスの赤ちゃんの引き取り先がドンドンさんなのだ

ドンドン「おかげさまですくすくと育っています」

ティトボーア、ドンドンを優しい目で見つめている。

ティトボーア「おおお親近感が湧いてきた。赤ちゃんに会いたいな」

ドンドン「もう少し大きくなつたら連れてきます」

三枝「こちらはうちのスタッフ。どういう人

312

材かといふと仕事は真面目にやつてくれている。みんな貧乏だつたからか、頭は悪い

パパジー、デレク、ロメロ、ブレイング。

アンジエリン、カミール、エリ、げらげら笑っている。

メイリーン、キカイ、手を止めて笑つている。

アンジエリン「本当のことじやない。ボスは

嘘を言つてない

アンジエリン、手をあげている。

アンジエリン「ドンドンさんに質問がありますか？」

ドンドン「ヴァレンズエラは父親の地盤で強固な組織票があり、選挙で一度も負けたことがない。多分いけると思う」

アンジエリン「ということは、比例ではなく選挙区から出馬するんですね」

ドンドン「そうです」

三枝「下院議員が理事長になってくれるのな

313

ら、俺たちにとつても有難い。理事はドンドンさんの父親リムさん、マカティの病院長、タンさん。そう、ホームレスが赤ちゃんを産んだ病院だ。他の3人も肩書は申し分ない。さらにドンドンさんは資金集めは任せてくれと言つてくれている」

パパジー「それは頼もしい」

ドンドン「すでに3人の中国人から資金提供したいと申し出がありました。正式に私が

理事長になればさらに増えると思います」

アンジエリン「ストリートチルドレンの保護を行っている団体がすでにありますから、どうお考えですか？」

ドンドン「あそこはストリートチルドレンがメインではない。子供の虐待がトップでストリートチルドレンは3番目だった。我々はトップがストリートチルドレンだからインパクトがある。現在、マニラには6万人、全国では数十万のストリートチルドレンがいて、10年前と比べてもその数はほとんど減少していない。これは深刻な状況で看過できない規模です。まずはマニラのストリートチルドレンを半減させることを目指に取り組んでいきたい」

三枝「俺たちは後発だから、目に見える成果をあげたい。いすれは全国に展開するが、まずはマニラからだな」

ティトボーリイ「具体的には？」

三枝「このメンバーの自慢できるところは…」

まあ頭が悪いのはさておいて」

ティートボーリー、顔をしかめて、冗談つぽく、右手中指を立てている。

ティートボーリー「しつこいぞ！ボス！わかつてるつて」

三枝、指2本を立てて、左右に振つている。

三枝「おお、自慢できる点は、全員がスラムに住んでいたといふこと。すなわちスラムのネットワークに深く食い込めていりし、貧乏人の気持ちが理解できる。³¹⁵

スラムに支部を作り、スタッフを雇い、ストリートチャルドレンの情報を集め、両親の同意を得て、児童保護施設に預ける。合法、違法を問わず養子斡旋を行う。児童養護施設には将来的には最大5000人受け入れる。食費、生活費、教育費など、すべて無料」

ドンドン「金が湯水のように出でていく」

パパジー「大きく出たなあ」

三枝「まあ目標ではある。お金がショートし

ないようにするのは苦労するだろうな」

ドンドン「俺は金集めに専念するから、現場

はすべて任せようと思う」

三枝、みんなを見渡している。

三枝「そろそろドンドンさんが理事長になつてほしいかどうか採決したい。いいか? ？

賛成の人は手を挙げて！」

全員、手を挙げている。

三枝「決まりだな。ドンドンさんよろしくお願ひします」

ドンドン「ありがとうございます。こちらこそよろしく」

全員、拍手している。

ティトボーリ「違法なこともすべて知つてい

てくれるなら、俺たちもやりやすい」

メイリーン、キカイ、ビールを運んで

いる。

アイナ、アラ、楽しそうにグラスを運んでいる。配り終えて、

全員「乾杯！」

○ トンド・大通り

少年 1，赤ちゃんを抱きながら、信号待ちをしている車の運転手側の窓を叩き、手を出している。

少年 2，買い物客が通るのを見計らつて、コンビニのドアを開け、手を差し出している。
少年 3，4，バケツに水、袋に洗剤を入れ、スカイレジーを持ち、信号待ちの車のフロントガラスを洗い、終わると手を出している。

少年 5，歩行者に近づき、右手でライスを掴む仕草をしながら口元に当てて、食べ物に困っていると訴えている。
少年 6，マクドナルドに入り、飲食中の客に近づき、手を出している。3人目で店員に見つかり、追い出されている。

少年 7，8，客待ちをしているジプニーに乗りこみ、年配の女性にナイフを

突きつけ、バツグ・時計・スマホ・指輪を奪つて、素早く逃げている。

少年9，10，汚い髪で、全身真っ黒、破れたTシャツを着て、裸足の老婆と縁石に座り、紙コップを前に置き、物乞いをしている。

少年10人、一人で歩きスマホをしている若い女性を取り囲み、スマホとバツグを奪っている。女性の悲鳴で男が駆けつけるが蜘蛛の子を散らすようには逃げている。

○ トンド・墓地・ロビンの家・中・（夕方）

大きなお墓。新しい机、椅子、ソファパソコン、おもちゃなどがある。少年ギヤング団の、ロビン（35）、N O 2 のジミー（14）を手招きしている。
買取屋がロビンの横に座っている。

ジミー、少年たち50人がたむろして
いる広場に走っていく。

ジミー「集まれ！」

少年たちロビンの家に向かい、一列に並んでいる。

先頭の少年1、小銭をポケットから出してジミーに渡している。

ジミー、小銭を数えて箱に入れ、金額をロビンに伝えている。

ロビン、パソコンに入力している。

少年2、小銭を渡している。

ジミー「稼ぎが少ない！ 明日も少なかつたら飯抜きになるぞ！」

少年2、うなだれている。

時計をジミーに渡している。

ジミー、財布の中の現金だけ数えて、

商品は買取屋に渡している。

買取屋が商品を調べて金額をロビンに伝えている。

ロビン、パソコンを打ち終えて、金を数えている。
ロビン、ジミーに金を渡して、
ロビン「ボス！これでいつものようにな」
ロビン、「ボス！」これでいつものようにな
ジミー、大きな袋を6つ持ち、8人の少年を連れて、サリサリストアへ雑貨店（）とテイクアウトの店で買い物をしている。
少年たち、広場に集まり、食事している。
お菓子、コーラ、ジュースが大量に置かれている。
遠くからネルソン、警官2名、少年たちをじっと見ている。
ネルソン「ロビンは用心深くて、滅多に家から出ない。あのジミーつて餓鬼にだけ指示を与えて、他の少年たちに伝えている。1年

前にジミーを捕まえたが、彼は当時14歳の未成年で俺がボスだと平然とほざく。自分が逮捕されることはないとわかつてやがる。ロビンも過去に逮捕したことがあるが、俺は何もしていない。ジミーが勝手にやっていると

警官1 「ロビンをもう一度しょっ引きましょう。児童福祉法や教唆罪で逮捕できるでしょう」

ネルソン 「少年たちを取り調べて、誰がボスかと聞くと、口を揃えて、ジミーがボスだと言う。何故かといふとロビンは少年たちの前ではジミーをボスと呼ぶからな。それで少年たちにその印象を強く植え付けていける」

警官1 「くそ！ 悪賢い奴め！ 物乞いや犯罪に手を染めるのは子供たちで、その指示役も未成年！ ロビンは金を吸い上げるだけか！」

ネルソン 「あいつを野放しにしている俺たち

もどうかしてる」

警官「盗聴器をつけるか、そうだ！　おとり捜査はできなですか？」

ネルソン「馬鹿野郎！　おとり捜査つて！
子供にそんなこと頼めるわけがない。まあ
盗聴器は考えてみるわ」

○タギッグ・フォートボニファシオ陸軍基地・

ミラーの自宅・ダイニングルーム
オフィサーズ・クオーターズと呼ばれる
る集合住宅。コンクリート造り・快適₃₂₂
な住環境。

三枝、ミラー、シオニ、ソーセージ・
マッシュユーポテト・サワークラウトを食
べ、ハーブティを飲んでいる。
三枝「ドイツソーセージはおいしいですね。
大好きなんです」

シオニ「私も」
三枝「ミラーさんはどうしてフィリピン陸軍
の基地内に住んでいるのですか？」

ミラー「フィリピンとドイツの軍事協力の一環として軍事専門家の私がドイツ政府から命令されて、それでここに住んでいます」
三枝「BGCやマカティも近くて、このような便利なところに基地があるなんて驚きです」

ミラー「私も最初は驚きました」

三枝「本題に入りますが、お待たせしてすみませんでした。現在、4歳の女の子は斡旋でできます。父親が怪我をして、収入がなくなり、他の5人の子供たちを育てるために手放したいということです。さらにもう一人預かっている子供がいるのですが、母親が産後鬱で精神的に不安定で斡旋できるかどうか今ははつきりしません、4か月半の男の子です。なお斡旋料は500万です」

三枝、スマホ内の写真及びデータを見せていている。
ミラー、シオニ、食い入るように眺めている。ミラー、シオニに向かつて、

ミラー「どう思う？」

シオニ「女の子がほしい。想像妊娠から不妊症がわかつて、あなたを落胆させてばかり。

写真を見ると私に似てるような気がする。この子なら愛せると感じる」

ミラー「じゃあ決めようか。半年後にドイツに戻るので、早いほうがいい。4歳なら言葉の問題もなんとかなると思う。500万は安くはないけど」

○ トンド・三枝、パパジーの家

M A Y L E E N E A T E R L Yと書かれた看板が上部に掲げられている。メイリーン。キカイ、スタッフ、惣菜を作り、味見して、意見しあつてゐる。アイナ、アラ、凍ったアイスポップを手で溶しながら飲んでいる。

○ トンド・墓地・ティトボーキの家・前
リガヤ、書類を持っている。

ティトボレイ、椅子に座っている。

リガヤ、これみよがしに書類をティトボレイの腹に押し付けている。

リガヤ「出生証明書、取ったぞ！」

ティトボレイ「お疲れさん、よく我慢したな」

リガヤ「もうこりごり、1万じや安すぎるわ」

ティトボレイ、ポケットからお金を出してしている。

ティトボレイ「何を言つてる！ お前の息子のためだろが、ほれ！ 1万払つてやる。
もう一人の友達の出生証明書は取れたのか？」

リガヤ、バッグから書類を引っ張り出している。

リガヤ「あたりまえだろ！ 取れたよ」
ティトボレイ、再びポケットから金を出す。

ティトボレイ「じゃあ、もう1万払うわ」
リガヤ「ラツキー、ビログは元気なのか？」
ティトボレイ「元気だよ。スマホを買つても

らつたらしいぜ。会いに行くか？』
リガヤ「元気ならいい」

○トンド・墓地・NPO事務所・内（夜）
アンジエリン、所長に退職届を提出し
ている。

所長「なぜ辞めるの？」

アンジエリン「所長、長い間お世話になります」

所長「不満があつたの？」

アンジエリン「いえ、不満はまったくありません

せん。新しいNPOの立ち上げから関わ
たのでやりがいを感じています。これまで
培ってきた知識や経験を存分に活かせそう
な」
所長「困ったことがあれば、いつでも相談に

所長「困ったことがあれば、いつでも相談に
のるよ」
アンジエリン「ありがとうございます」

○トンド・パパジー、三枝の家・前

1 2個のトレイが並んでいる。

ティトボーア、アンジエリン、デレク、ロメロ、三枝、パパジー、店を眺めている。

アラ、もしを小さなガラスのトレイで育てていて、それをじっと見ている。メイリーン、キカイ、客の相手をしている。

ティトボーア「もうお客様が来てる」

デレク「俺、一度も食べたことがないんだ。おいしいとは聞いてるんだけど」

三枝「ご馳走するから好きなものとつて俺の

部屋に行こう」

ティトボーア、デレク、アンジエリン、ロメロ、三枝、パパジー、それぞれトレイを指さしている。

メイリーン、キカイ、手際よく、惣菜を渡していく。

メイリーン「ごめんね、前より2割高くなつてる」

デレク、にこにこしながら、
デレク「ボスの奢りだから、もっと高くても
いいよ。味は?」

キカイ「前は食材をけちつたりしてたけど、
値上げしたおかげで、いいものを使えるの
で、さらにおいしくなつてるよ」

ロメロ「ほう、楽しみ」

三枝「俺は毎日食べてるよ。飽きないんだな
あ」

三枝、お金を払っている。
全員、お皿と氷を入れたコップを持つ
て、階段を上がっている。
キカイ、コーラのボトルを2本持つ
ついていく。

○ 同・三枝の部屋（夜）

マットレス、扇風機、パソコン、小
なテレビ、小さな机、椅子が3つ、洗
濯籠、小さな棚、ゴミ箱がある。アイ
ナとアラのおもちゃや服が置いてある。

アラ、バナナを食べている。

卷之三

アンジエリン——エアコンもないの？　お金あるのに！　少しば自分のために使つたら？

パ　パ　ジ　ー、キ　カ　イ、机　と　椅　子　を　運　ん　で
くる。

三枝、「注目！NPOの名前を決めたぞ。」
三枝、みんなが座るのを待つて、

D R E N L
—
H C H

アンシェリントン—SAVETHECHILDREN
たような名前のNPOがありますぐどー

三枝 「確かにあるな」
ティートボーアイ 「でもストリートチルドレンに

アンジエリン「商業目的じゃないから似てて
パパジー「俺も賛成、わかりやすくていー」

もいかな！ それなら私も賛成する」

三枝 「長いので頭文字をとつて S T S C」
ロメロ 「S T S Cね。わかつた」

三枝 「さあ、食べよう」

全員、食べ始める。

アイナ、制服を着て、帰ってくる。
アイナ、三枝にハイタッチしている。

三枝 「アイナ、お帰り」

○ 同・墓地・ティトボーアの家・前

ネルソン、警官2名、ティトボーア、
家の前に椅子を4つ、丸くならべて話

している。

若者2人、後ろに立っている。

ネルソン「ストリートチルドレンを保護する

N P Oを立ち上げるんだってな。お前にし

てはまともなことをやるじゃねえか」

ティトボーア「ああ、パパジーラとな。理事

長は下院議員だぜ。三枝さんも絡んでる」

ネルソン「下院議員？ 誰だ？」

ティトボーリー「間違った。下院議員に立候補するんだったわ。まだなっていない」

ネルソン「三枝さん？ いつからそんな丁寧な呼び方になつたんだ。お前らみたいなクズの集まりの理事長が下院議員？ 笑わせるんじやねー、当選するわけないだろーが」

ティトボーリー「楽勝だと言つてたぜ」

ネルソン「そいつはどこに住んでる？」

ティトボーリー「ヴァレンズエラ」

ネルソン「遠いな、まあいい。それよりな、お前！ 僕たちに協力しろ！」

ティトボーリー「はあ」

ネルソン「少年ギヤング団のボス、ロビンを捕まえたい」

ティトボーリー「最低の野郎だな」

ネルソン「ギヤング団にいる少年の一人に盗聴マイクをつけたい。ロビンがボスだという証拠がないと捕まえられない」

ティトボーリー「俺もな、あの少年ギヤング団を解体して、少年たちをまとめて施設に放

り込めないかと考えていた。今も4人預か

つてゐる」

ネルソン「俺たちは仲は悪いが、それならお
前にとつても都合のいい話だろ！」協力し

ろ」

○ヴァレンズエラ・ドンドンの家・リビング
三枝、ドンドンに資料を見せながら、
話している。

三枝、赤ちゃんに駆けよる。

三枝「ごぶさたしています。元気そうだ！」

ヴィルマ「おかげさまで、1日があつという

まに過ぎてしまします」

三枝「ヴィルマさんは目がキラキラしていま

すね」

ドンドン「子供って生活を180度変えてしま

まいります。もちろん楽しい方にですが」

ヴィルマ「ホームレス夫婦は妊娠したのです

か？」

三枝「さあ、まだ情報は入ってきてませんが、妊娠したとなればすぐにお知らせします」
ヴィルマ「楽しみにしています。ゆっくりしていってください」

三枝「ありがとうございます」

ヴィルマ、部屋から出していく。

三枝「N P Oの名前はS T S Cでいいでしょうか？」

ドンドン「それでいいと思います」

三枝「お願いに来たのは、児童養護施設に適した建物を探したいのですが、新築は現実的には難しく、既存の物件、例えば廃校舎とか閉鎖された病院とかありますか？」

ドンドン「5000人を収容できる施設？」

三枝「そこまではまだ、1000人くらいが

まずは妥当かなと」

ドンドン「マニラ市内だよなあ、学校とか、

大きな寮とかだな、よし、それはまかせて
くれ、父親が助けになつてくれると思
う。
政府に掛け合つてみる。

第8話

○ トンド・ティトボイの家・中

新しいソファ、30インチのテレビがある。石棺の上に高級マットレス、大きな冷蔵庫、椅子が5つ。

ティトボイ、パパジー、リガヤ、コリーナ、女の子、話している。

ティトボイ「いいんだな！」ここに300

パパジー「どうする？」

ティトボイ「未練があるのか？」

確認をしたい」

リガヤ「いいの？」もう2度と会えないんだ

よー

コリーナ「売りたくない。でもお金が必要、昨日から何も食べていない。あちこちからお金を借りて、もうどうにもならない」

コリーナ「顔が引きつっている。

リガヤ「はつきりしなさいよ」

パパジー、お金をかばんに入れている。

パパジー「出直すか、無理強いはしたくない」

ティトボーアイ、黙つてコリーナを見て
いる。

コリーナ、泣きながら、パパジーの力
バンを握っている。

コリーナ「もうぐだぐだ言わない」

コリーナ、女の子を差し出している。

コリーナ、女の子に向かって、
女の子、泣いている。

コリーナ「お腹が減つてるだろう。このお兄

さんについて行けばお腹いっぱい食べられ
るし、いい家に住める。お菓子もたくさん

くれる」

ティトボーアイ「いいんだな。じゃあ300万

受け取ってくれ」

母親、カバンの中を見て、大事そうに

抱えている。

ティトボーアイ「おいしいもの食べに行こう、

い
いか？」

女の子、涙を拭いて、頷いている。

○タギッグ・フォートボニファシオ陸軍基地。

ゲ
ー
ト

陸軍兵士、2名、ライフルを抱えている。

三枝、ティトボーアイ、女の子を連れて
ゲート前で立っている。

ミラーとシオニ、走ってくる。

ミラー、兵士と話している。

ミラー、「さあ行きましょう」

三枝、ティトボーアイに、

三枝「ティトボーアイ、ここでしばらく待つて
いてくれるか？」

ティトボーアイ「わかった」

三枝、女の子を連れて行こうとする。

女の子、三枝の手を振りほどき、ティ
トボーアイにしがみつく。

ティトボーアイ、かがんで、女の子の肩に手を置きながら、

ティトボーアイ「だめだめ、お腹が減っているだろう、俺といったつて何も食べられないよ」

女の子、立ちすくんでいる。

ティトボーアイ、女の子の手をつかんで三枝に渡している。

ティトボーアイ、女の子のそばに行き、やさしく話しかける。

シオニ「フライドチキンとマンゴグラハムにココナツツジユースを用意しているの。すぐ食べられる」

女の子、目を輝かせている。

シオニ、女の子の手を取り、シオニ「さあ、かけっこしよう。速く走らないと誰かにフライドチキンを食べられてしまうわよ」

女の子、駆け出す。シオニ、後を追う。三枝、ミラー、笑いながらついていく。

ティトボーリ、ほつとした表情で見て
いる。

○ 同・ミラーの自宅・前

シオニ、女の子、自宅に到着。
シオニ、ハアハア言いながら、ドアを開けている。

シオニ「さあ、どうぞ」

ミラー、三枝、ゆっくり歩いている。

○ 同・リビング

テーブルの上に料理が並べられている。
女の子、歓声をあげながら、駆け寄る。
シオニ「さあ、食べて、昨日から何も食べて
ないでしよう。話は後で」

女の子、おいしそうにフライドチキン
にかぶりついている。
三枝、ミラー、部屋に入り、微笑みな
がら見ている。

三枝「4歳ですし、兄弟に囲まれて育つてき

たから、さびしくて、泣くでしようね。最

初は苦労するかもしません」

ミラー「焦らずにじっくり慣れるのを待ちます」

ミラー、現金の入った大型封筒を手渡
している。・

三枝「ありがとうございます」

○チャイナタウン・日本語学校

三枝、授業を終えて、エドナに合図を
している。

○チャイナタウン。マクドナルド・内

三枝、エドナ、食べている。

三枝「君が紹介してくれたドイツ人夫婦に養
子を斡旋した。これがお礼だ」

三枝、封筒を渡す。

エドナ、中を覗いている。

エドナ「またまたこんなに！、もう日本に行

かなくてもいいかな」

三枝「日本に行つたほうがいいと思う。いつまでもうまくいくとは限らないからな」

エドナ「ドバイのお姉さんにすべて話したの。

もう合計すると100万近くになるから、全部お姉さんに渡すの。まだまだ足りないけどいつも家を買えるでしょう。お姉さんも頑張るって喜んでくれた」

三枝「えらいな」

エドナ「もう一人紹介したい人がいる」

○（回想）アラバン・葬儀場

3年前。

ナネット（女45）、葬儀場で大きな棺と2つの小さな棺の前で佇んでいる。

友人1・2、離れた場所で椅子に座り、ナネットを見ている。

友人1「かわいそうで慰める言葉もない。何

時間も棺の前に座つたまま」

友人2「ナネットが私も一緒に逝きたかったつて言うのよ。気持ちは痛いほどわかる」

友人1「かわいそうで慰める言葉もない。何

つて言うのよ。気持ちは痛いほどわかる」

友人1「私たちが少しでも支えにならなくち

や」

（回想終わり）

○チャイナタウン・マクドナルド・中

三枝「誰？」

エドナ「45歳の女性、3年前に二人の子供

と旦那を事故で亡くした可哀そうな奥さん」

三枝「身につまされるな」

エドナ「更年期障害でうちに通っている。生

命保険で得たお金や旦那が社長だつたため生活は裕福だけど生きてる元気はまったく

ない。死んだも同然、養子をあげたい。名

前はナネット」

三枝「わかつた、ナネットさんだな。今は幹

旋できる子供がないが、なるべく早く連

絡する」

○トンド・三枝・パパジーの家

三枝、お金を分配している。

デレク、振り付けを考えている。

デレク「引っ越したから、振り付けを変えよう。曲も変えよう」

カミール、ユーチューブのダンスをスマホで見ながら考えている。
カミール、振り付けをデレクと話し合っている。

デレク、踊りだす。

ティトボーアイ、パパジー、アンジエリ
ン、ロメロ、デレク、カミール、三枝、
最初はぎこちなかつたが、徐々にうまくなつていてる。

エリ、赤ちゃんを抱きながら、踊つている。

アイナ、アラ、飛び込んできて、しばらく見ていたが、踊りだす。

○ トンド・墓地・ティトボーアイの家・前

ティトボーアイ、アンジエリン、リガヤ
ビニール袋に入れたコートラにストロー

を差し込んで、飲んでいる。

ティトボレイ「コリーナは大丈夫か？」落ち

こんでいいか？」

リガヤ「まだ5人を育てているからねー、くよくよしている暇はないわ。それにしても300万は大きい。旦那は医者に診てもらつていて、手術でケガが治れば元の生活に戻れる」

ティトボレイ「そうか、早く治るといいな。ところで相談なんだが、少年ギヤング団の少年に盗聴器をつけられないとどうか、ネルソンから頼まれた。ロビンを捕まえたい

そうだ」

アンジエリン「へー、賄賂警官が本気出した

のかなー

リガヤ「盗聴器ってどんなの？ 実物を見たい。バッジみたいに胸に取り付けるとか？」

頼めるとと思うけど」

ティトボレイ「頼む。ロビンを捕まえたら、

少年たちを児童養護施設に全員まとめて送

り込みたい」

アンジエリン「ティトボーアイ！ 気が早すぎ
る。まだ施設が決まっていないよ」

ティトボーアイ「ボスがなんとかしてくれた
ろう」

アンジエリン「さあどうだか、ボスのお尻を
を叩かなきやね」

○ トンド・三枝、パパジーの家・三枝の部屋

三枝、パパジー、ティトボーアイ、アンジエリン、ロメロ、デレク、グリーン
マンゴとバゴーン（エビの塩辛）を食

べていてる。

アイナ、アラ、パズルをしている。

三枝「SAVE THE STSCTREET C

所で作る。墓地、サンタメサ、パヤタスをして
だ。墓地はティトボーアイ、サンタメサはロ
メロ、パヤタスはデレク、アンジエリンはロ
手伝つてやれ。急いで物件を探してくれ
れ」

アンジエリン「広さは100m²くらいでいいですか？」

三枝「それくらいで十分だろう。なるべくわかりやすい場所がいい。スラムの入り口近くでな」

デレク「本部はどこに？」

三枝「マニラの真ん中に位置するマンダル・ヨンなどがいいかなと思う。ただ児童養護施設が決まらないと」

ロメロ「マンダル・ヨンかあ。マカティに近いのにごちゃごちゃしてゐるし、いいんじやない？」

○トンド・墓地・ティトボーリイの家・中

ネルソン、警官2名、ティトボーリイ、リガヤ、ソファに座りながら、話して

いる。

警官1名、見張つてゐる。
ネルソン、リガヤに盗聴器を5個渡して
いる。

リガヤ「2c m四方くらいね。もつと小さい」

ネルソン「これが一番小さい」

ティトボレイ「これだと生地と生地の間に縫い込むしかないな」

リガヤ「ジーンズのベルトあたりに縫い込めばわからぬかも」

ネルソン「電池内蔵なので約30時間盗聴可能、電池が切れたら外して、新しいものに交換してほしい。やつてみてくれるか？」

リガヤ「取り付けたら連絡する」

ネルソン、警官1に向かって、

ネルソン「俺は面が割れているのでロビンには近づけない。電波は50mしか届かない。

何とかして接近して信号を拾え！」

○ニューポートシティ・五つ星のホテル・日本料理店

湯野、厨房で働いている。
リム、三枝、厨房を覗いて、湯野に挨

拶している。

リム、三枝、ドンドン、食事をしている。

リム「ここに来ると日本料理の神髄が味わえる」

三枝「まさにそうですね。理事を引き受けてくれてありがとうございます」

リム「名前を貸すだけだぞ」

リム、写真と図面を見せている。

リム「場所はサンタアナで、私立のシニアハイスクールだった。教室は35あつて1室に20人は楽に住める。2段ベッドを置くとか、工夫次第で30人でもいけると思う。1000人は楽に収容できる」

ドンドン「N P Oなので賃料は優遇されているが、政府も全面的に信用しているわけではない。契約は1年ごとの更新で、万が一問題が起きれば即時退去です」

三枝「よく探しましたね。さすが副市長！ここで契約してください。お願いします」

ドンドン「わかった」

三枝「これで本格的にスタートできます。この児童養護施設の近くで本部の事務所を探します」

○ トンド・パパジーと三枝の家・三枝の部屋
アイナ、アラ、部屋の壁やパソコン、ドアや扇風機などいたるところにべたべたとハロー・キティとクロミ、ラブブのシールを貼つている。

キカイ「勝手にシールを貼つて！ ボスに怒られるよ」

アイナ「怒らないもん」

キカイ「あんたたちには甘いんだから」

アラ「ボスはラブブが好きなんだよー」

キカイ「嫌がつたら全部きれいにはがすのよ」

○ サンタメサ・ロメロの家・内

アンジエリン、ロメロ、カミール、エ

り、春巻きを食べ、ライチジュースを飲んでいる。

エリ、赤ちゃんを抱いている。

4人の子供たち、スマホで遊んでいる。
アンジエリン「施設が問題なれば、子供たちは行くことになる。カミールとエリはどうする？　ここから通う？　それとも住み込み？」

カミール「住み込みがいい。スマホから抜け出せる」

エリ「私も」

アンジエリン「まかないつきかどうか、まだ決まっていない。それに給料は安いよ」

カミール「食事はただにしてほしいな」

アンジエリン「交渉はするけどね。それから

保母さんに向いてる人やボランティアがいたらどんどん紹介して、子供は

1000人

くらい集める予定だから」

エリ「わかつた、場所は決まったの？」

アンジエリン「サンタアナだよ」

カミール「100人って大変だよ。食事の世話に、トイレやシャワー、掃除も」

アンジエリン「一気に100人来るわけじゃないから。徐々に増えていく」

ロメロ「俺は施設には行けないの?」

アンジエリン「ロメロはここでしよう。カミ

ールと離れ離れになるのは嫌なの?」

ロメロ「カミールは何人かいる彼女の一人だつたんだけど、働いてる姿を見てたらどんどん惹かれていつて、今は俺の一番の彼女。離れるなんて考えただけでもさみしい」

カミール、ロメロを見つめている。

エリ、カミールにピースサイン。

アンジエリン「へーいい関係になつたんだ。ロメロ！」のろけてないでさつさと支部の

場所を探さないと

ロメロ「そうだよな」

○ トンド・パパジー、三枝の家・三枝の部屋
三枝、帰つてくる。

アイナ、アラ、部屋を覗いている。

三枝、ドアを開け、ゲラゲラ笑つて
る。

三枝「ははは、よくもまあ、こんなにたくさん貼つてくれてありがとう、殺風景だもん
な」

アイナ、アラをつついている。
キカイ、ドアを開け、様子を窺つてい
る。

アイナ「もつと貼つてもいい？」

三枝「いいよ。アイドルのシールも欲しいな」

アラ「やつたー、シールを買いに行こう」
アイナ、アラ、顔を見合わせている。

キカイ「ボス、この子たちに甘すぎると
つと怒つていいよ」

三枝「危険なことをしたりしたら怒る」
キカイ「それはわかるけど」

アイナ、キカイにあつかんべーをして

いる。

○サンタアナ・STS児童養護施設・前

アンジエリン、カミール、エリ、三枝、建物を見上げている。

エリ、赤ちゃんを抱いている。

アンジエリン「広い、こんなに大きいとは。どうやつてこの施設を運営していくの？」

三枝「考えていたら頭が痛くなつた」

カミール「なるようになるなる。なんとかなるなる」

三枝「フイリピンスタイルだな」

カミール「何人来るかわからなし、考えたつて意味がない」

エリ「やつてるうちに見えてくるわよ」

カミール「まずは人を集め掃除。それが終

わつて、寝室、キッチン、ダイニングルーム、トイレにシャワー」

アンジエリン「そうだよね、カミールって頼

りになる」

カミール「私たちの食費をただでお願いします」

す」

三枝「住み込みだもんな。了解した」

カミール、エリ、につこり笑つてゐる。

○トンド・パパジーと三枝の家・近所

アイナ、ラブブの衣装。
アラ、クロミの衣装。

女友達2人も仮装。

キカイ、離れたところから見ている。

ハロウインかぼちゃバケツを持ち、

家やお店を回り、TRICK OR

TUREATと言いながら、キヤンディ

やチヨコを入れてもらつてゐる。

○トンド・墓地（深夜）

大勢の墓参り客が訪れてゐる。
お墓が色とりどりの花や灯り、ろうそ
くで飾られている。
あちこちで音楽が流れている。

大きなお墓に10人ほどが集まり、食事をしている。

ティトボーア、リガヤ、コリーナ、輪の中にはいる。

パパジー、メイリーン、歩きながら、ティトボーアに手を振っている。

ティトボーア、立ち上がり、パパジーのそばに、

ティトボーア「おう、二人揃つてどうした?」

パパジー「何十年も住んでいたお墓のオーナーに挨拶してきた。今日はALLSAI

NTDAYで毎年、オーナーが必ず来て、

一夜を過ごすから」

ティトボーア「長い間、住んでいたからな。

こつちに来て一緒に食べよう」

メイリーン「いやー、オーナーに散々勧められ

れて、もうお腹いっぱい、これ以上何も入らない」

○ 同・ロビンの家の近く

周りの喧騒を横目で見ながら、警官1，薄汚れた服装、ひげもそらず、裸足で、無人の墓にもたれかかっている。誰も見ていないのを確認して、受信機をオンに、イヤホンで音声を聞きながら、スマホに録音している。

○ パヤタス・小さなビルの1階

2日後。

スマムの入り口付近。

部の物件を見ている。

デレク、パパジー、ティトボーアイ、支

近いし

ティトボーアイ「広さもこんなものだろう」

デレク、ためらいがちに、

ティトボーアイ「聞きたいんだが、もしかして俺がパ

パパジー「そうだよ」

ヤタスの支部長になるの？」

デレク「えええ、俺が支部長！」

本当に？

部

下を雇つてもいいの？

ティトボレイ「お前は頼りない。まあ仮の支部長だな。仕事は親を説得してストリートチルドレンを施設に連れていくこと。部下はそれができるやつじやないとな」
デレク「うんうん」
ティトボレイ「あーその返事！聞くだけで心配になる」
○サンタアナ・商業ビルの1階
ビルは古いが大通りに面している。児童養護施設が先に見えている。
三枝、ドンドン、見ている。
ドンドン「本部はここがいいな。家賃は少し高いけど、バス停も近いし、何より目立つ、大きい看板も掲げられる」
三枝「理事長室は品格のある部屋にしたい。お金をかけたいのですが、いいですか？」
ドンドン「安心感と信頼感を与えるような部屋ならそれでいい」

三枝 「落ち着いた色調で、柔らかい照明、壁には子供たちの書いた絵。家具やソファは重厚なものにします」

○サンタメサ・線路わきのスラム近辺

ロメロ、カミール、パパジー、見てい

る。 雜居ビルの1階。

パパジー「サンタメサ支部はここしかない」

ロメロ「決まってよかつた。さあやつてやろ

カミール「よつ、支部長、がんばれよ」

ロメロ、舌を出して笑つている。

○トンド・墓地付近

入り口近く、一軒家。

アンジエリン、ティトボーアイ、パパジー、「ここは墓地の外だけど、墓地に行

くにはここを必ず通るから、いいんじやな

いか。建物は汚いけど、ペンキを塗つて少

し金をかければ悪くない」

アンジエリン「いいよね」

ティトボレイ「よし、決まり」

アンジエリン「児童養護施設に本部も、3つの支部も決まったね。明日にでも申請書類をドンドン理事長と出してくる。それとロメロのクラウドファンディングが立ち上げられる」

B E G I N N I N G。始まりだ」
J U S T

○ トンド・墓地・ロビンの家の近く
警官1、薄汚れた服装、ひげもそらず。
裸足で、墓にもたれかかりながら受信機を見ている。

ロビンとジミー、警官1の目の前に立

つていてる。

ロビン「お前、ここで何をしているんだ。その手にあるものを見せろ」

警官1　慌てて受信機をポケットに仕舞おうとする。

ジミー、受信機を取り上げようとする。警官1、取られまいと抵抗するが、ロビンに右手を掴まれ、あっけなく奪われてしまう。

ジミー「これはなんだ？」

ロビン「盗聴器の電波を受信する機械だな。お前、警官か？　姑息なことしやがつて」

ジミー、受信機を踏みつぶしている。遠くから見ていたネルソン、警官2、慌てて駆けつけてくる。

ネルソン「こら、ロビン、なんてことをしやがる」

ロビン「ふん、ネルソンか！　凝りもしないでつまらないことしやがつて、堂々と逮捕してみろ」

ネルソン「覚悟しておけ！　必ずお前を捕まえるからな」

ロビン「それで盗聴器はどこに仕掛けた？」

ネルソン「盗聴器？」

何の話だ。気になるな

ら探してみろ」

○ 同・ティトボーアの家・中

ティトボーア、リガヤに謝つている。

若者、立つていてる。

ティトボーア「すまない。盗聴していることがばれた。幸いにも盗聴器は見つかってい

ない。それでだ、あの子供をここに連れてしつこい男だから盗聴器がどこにあるか必ず突き止める。見つかればなにをされるかわからぬ。ここまで連れてきてくれたら、

俺が匿う」

リガヤ「何かあつたら私もあるの子の母親に顔向けができない。あんたを信じてたのに」

ネルソン、やつてくる。

若者「ネルソンが来た」

ティトボーア、ネルソンに詰め寄つて

いる。

ティトボーリー「何やつてるんだ。ばれないよ
うに慎重にやれよ。子供に何かあつたらど
うする。責任とれるのか。結局、俺が尻ぬ
ぐいしなくちゃならなくなつた」
ネルソン「すまない。埋め合わせはするから、
あの子供は助けてやつてくれ」

ティトボーリー「言われなくともやる」

○サンタアナ・STS児童養護施設・内

アングエリン、ロメロ、カミール、エ
リ、ビログ、子供3人と赤ちゃんを連
れている。
幼稚部屋にはずらつと2段ベッドが置
かれている。子供4人はベッドに潜り
込んでいく。
隣の乳児部屋にはベビーベッドが1
台置かれている。
ダイニングルームには長机、椅子が配
置されている。
スタッフルームにカミールとエリがベ

ツドを運び込んでいる。

アンジエリン「どんどん子供が入ってくるから、急いでスタッフを詰めなくては。男性も必要ね」

エリ「何人かに声をかけたから、今日来てくれる」

アンジエリン「来てくれた人は全員採用する。ただし最初の1か月間は研修期間。適性がなければやめてもらう。それでいい?」

エリ「わかった」

カミール「おいしい食事を作れる人がほしいな」

アンジエリン「メイリーンに聞いてみるわ」

○ トンド・墓地・ロビンの家・内

ロビン、ジミー、少年たち、盗聴器がないか、片つ端から調べている。コンセントを分解し、電球を取り外し、棚を動かし、子供のおもちゃを一つずつ調べている。

ロビン「くそ！ どこに仕込みやがった。部屋の中にならないとなると、外か！ 探すのに骨が折れる」

ジミー「盗聴器を見つける機械を買わない」とロビン「そうだな。キアポに行けばあるだろう。買ってくる」

ロビン、家から出でていく。

リガヤ、母親、ロビンが出て行つたのを見て、盗聴器をつけた子供を探している。

リガヤ、近くにいた少年に聞いている。

少年、指さしている。

リガヤ、母親、そちらに向かつて歩き出す。

母親、子供のそばに行く。

母親「帰つておいで」

子供「いやだ。ここにいる」

母親、無理矢理、子供を引っ張つてい

く。
子供、暴れている。

ジミー、走つてくる。

ジミー「子供が嫌がつてゐるじゃないか」

母親「あんたが口出しだすな。餓鬼のくせに。

この子は私の子供」

ジミー「ふん、いつもは食べ物も与えず、ほ
つたらかしておいて急に母親面かよ」
リガヤ「調子にのつてるんじやないよ。何様
なんだ」

母親、リガヤ、嫌がる子供を力づくで
連れていく。

○ 同・ティトボーアイの家・前

リガヤ、母親、子供を連れて来る。
若者、大声でティトボーアイを呼ぶ。
ティトボーアイ、飛び出してくる。
ティトボーアイ「無事でよかつたな」
リガヤ「ロビンがたまたま出かけたので、う
まくいつた」

ティトボーアイ「できたばかりの児童養護施設
がサンタアナにある。そこにはビログもい

るから、そこへ行こう。もちろん、気に入らなければいつでも出て行つてかまわない。
・・・とは言つたものの、実は俺も行くのは初めてなんだ」
母親「見てから決めていい？」
ティトボレイ「おう」
リガヤ「よし、私も行く」
リガヤ、考へ込んでいるが、
リガヤ「よし、私も行く」
○マカティ・レガスピビレッジ・湯野のマンショング・リビング
三枝、湯野、アンジエリン、マイキー、メロディ、ベビーシツター、メイド、
鯛焼きを食べ、抹茶ラテを飲んでいる。
三枝「マイキーさんもメロディも元気でなにより、湯野さんとマイキーさんはうまいつてるようで。アンジエリンは湯野さんのところに行くと言うと、喜んでついてきてしまつて本当にすみません」

湯野 「アンジエリンさんが来るとメロディも

マイキーも喜ぶから大歓迎」

アンジエリン、舌を出している。

アンジエリン「ここに来ると毎回毎回、不思議な見たこともない食べ物に出会えるの」

三枝 「そうだよな。鯛焼きなんて俺も初めてフイリピンで見た。さて、今日はお願いがあつてきました。ストリートチルドレンを半減させるNPOの名前はSAVE THE STREET CHILDRENといいます」

湯野 「ほう」

三枝 「サンタアナに児童養護施設を借りるところが決まりました。そこには最大100人受け入れるつもりです。ただ、私には食事を作るための厨房の知識がまったくありません。それで湯野さんに厨房機器の手配をお願いできなかと思いまして。そこで、私は食事を作るための厨房の知識がまったくあります。それで湯野さんに厨房機器の手配をお願いできなかと思いまして。相談に来ました」

たな

三枝「湯野さんが投資してくれた100万が本当にありがたかった」
湯野「あの金が役に立つたとは。そうか、よし！引き受けた。今日は暇だからその施設とやらに行こう」

マイキー、三枝を見て、
マイキー「ボランティアは募集していますか？サンタアナなら遠くないし、少しでもお役に立てたら」

三枝「ありがとうございます。まだボランティアについて、詳細が決まっていないので、わかり次第、アンジエリンから連絡させます。その時はぜひ参加してください」
マイキー「私も湯野さんと行つていい？」
三枝「もちろん、アンジエリン！一緒に行くか？」
アンジエリン「私はメイリーンさんのところに行く約束が・・・厨房のスタッフを探さないと、その後、ドンドン理事長と書類の

提出

三枝「そうか、後でおいしいものでも食べに行こうかと思ったのだが」

アンジエリン「えつえつえ、おいしいもの？」

湯野「三枝がからかってるだけ。メロディが喜ぶから、ジヨリビーには寄るけど」

アンジエリン、ほっとしている。

○ トンド・パパジー、三枝の家・前

アンジエリン、やつてくる。アイナ、アラ、ぬいぐるみを投げ合つ

て本気で喧嘩している。

メイリーン、キカイ、アンジエリンに手を振っている。

アンジエリン、アイナとアラの間に入つていてる。

アンジエリン「アイナ、アラ、喧嘩しちゃダメでしよう」

アイナ「アラなんか大嫌い」

アラ、アンジエリンの陰からアイナを蹴っている。

アイナ、アラの髪を引っ張っている。

アンジエリン「はいはい、そこまで」

アンジエリン、アイナ、アラをしつかり両手で押さえている。

メイリーン「仲良くしてると思つたら途端に喧嘩、それでまた何故かすぐに仲良くなる。いふものことだからね」

アンジエリン「相談があるの。施設で食事を作ってくれるリーダーを探している。メイリーンさんならいい考えがあるかなと思つて」

メイリーン「私に来てほしいのでしょうか？」

アンジエリン、親指を立てている。

アンジエリン「うん、でもお店をオープンしたばかりでいくらなんでも無理かなと思つて」

メイリーン、キカイの目を覗き込んで、

メイリーン「キカイが行きたいなら、それも

いいかな！。ここにいたつてたいした給料

も払えないし、今は料理の半分はキカイが作っているから、役に立てるかもね」

キカイ「大量に作るのでしょうか？」

アンジエリン「今はスタッフ込みで20人くらいだけど、どんどん増えてくる。いずれ

1000人は行くと思う。場所はサンタアナで住み込みでもOK。給料は安いけど、

食費はただ」

キカイ「やつてみたいけど、できるかな？」

メイリーン「手伝いがいるね。うちの従業員房もすごい設備が必要でしょう」

も2人なら連れていっていいよ。こちらは

なんとかする」

キカイ「挑戦するか！」

アンジエリン「厨房の設備については今、専

門家と打ち合わせていると思う。あと内緒

だけど、キカイはボスの家族みたいなものだし、臨時ボーナスが出るかもね。これは

私からは約束はできないけど

キカイ「やるし、手伝いを2人連れてすぐ

にでも行く」

アンジエリン「決まりつと」

○サンタアナ・STS C児童養護施設・ゲート

ライフルを携帶している強面のガード
マン2人がいる。

ティトボーリ、リガヤ、母親、子供、
ゲートでガードマンに止められている

ガードマン「名前を教えて」

ティトボーリ「ティトボーリ、トンド墓地の
支部長。子供を預けに来た」

ガードマン、電話している。電話を置

ガードマン「カミールさんが迎えに来ます」
カミール、走ってくる。
ティトボーリ、大きさに手を振つてい
る。

ティトボーア「おっ！ 働いているなあ」

カミール、右手を挙げてから、ガードマンと話している。

ガードマン「ティトボーア様とお連れの方、どうぞ」

リガヤ「厳しい」

ティトボーア「これぐらいやらないとな、子供の安全のためだから」

カミール「この子供はうちで預かるの？」

ティトボーア「そのつもり、中を見てから決めること」

さん」

リガヤ「息子がお世話になつています」

カミール「ビログは元気ですよ、少しやんちやなところはあるけど。さあ行きましょう」
車がやつてきて、ドンドンが降りている。

ティトボーア「ちょっと待って、ドンドン理事長が来た」

カミール、すぐにガードマンと話して

いる。

ヴィルマ、赤ちゃんを抱きながら降りて いる。

運転手は車を駐車場に停めている。

ガードマン、敬礼している。
ティトボーア「こんにちは、ティトボーアです。トンドの墓地の支部長です。ちょうど保護するかどうかの子供を連れてきたところです」

ドンドン「ご苦労様、君には世話になつた」

ティトボーア「あれが初めての仕事でした。理事長が決心してくれたおかげで俺の人生ががらりと変わりました。もしかしてその赤ちゃんが・・・」

ヴィルマ「ヴィルマです。ええあの時の赤ちゃんです。初めましてと言いたいのですが、実は病院で一度お会いしています。どんな夫婦か見たくて、部屋を掃除していたところ、ティトボーアさんが来られて、その時、計画無痛分娩の話をしていましたね」

テイトボーア、目をつぶつて思い出そ
うとしている。

テイトボーア「計画無痛分娩の話は覚えてい
るけど・・・ヴィルマさんはことは・・う

ーん、思い出せない」

ヴィルマ、喜んでいる。

ヴィルマ「変装が完璧だった」

テイトボーア「さすが！」

テイトボーア、赤ちゃんの手を握って
いる。

テイトボーア「わー握り返してくれた。大き

くなつたなあ、感激です」

テイトボーア、目頭を押さえている。

カミール「こら！ テイトボーア、やくざな

お兄さんがうるうるしててるんじゃないよ。

似合わない」

テイトボーア「うるせー」

カミール、ゲートを見ている。

カミール「あれ、バスがやつてきた」

三枝、湯野、マイキー、メロディ、ベ

ビーチツタ一、タクシ一から降りてい
る。

三枝、みんなを見て驚いている。

ドンドン、「湯野さん、お久しぶりです。リム

の息子のドンドンです」

湯野「おー久しぶり、三枝から聞いたぞ。理
事長になるんだって、それにしてもでかい
ことをやるもんだな。これだけ大がかりと
はびっくりした。本気で取り組まないとな
ドンドン」「はい、それはもう覚悟しています。

ところで今日は？」

湯野「三枝に頼まれて厨房を見に来た」

子供たち、退屈そうにしている。

三枝「ドンドンさん、俺たちは厨房に行きま

す」

カミール「さあ行くわよ。子供がいらっしゃ
てるわ」

全員歩き出す。

○ 同
・ 幼兒部屋

リガヤ、母親、子供、ティトボーア、
カミール、ドンドン、ヴィルマ、入つ
ていく。
ビログ、子供たち、スマホで遊んでい
る。

エリ、スタッフたち、見ている。
ビログ、リガヤを見つけ、抱きついで

リガヤ「元気だつた？」

リガヤ「ここは楽しい?」

「良かつたね」
リガヤ ブログ――うん、来月から学校に行くんだよ

リガヤ、子供を指さして、

リガヤ「もしここに来たら仲良くしてくれ

ビログ「いよいよ」

他の子供たちも子供の周りを囲んでいる。そのままベッドに連れて行き、スマホで遊んでいる。

母親「楽しそうだし、墓地にいるより安全だわ。預けます」

ティトボレイ「忘れていた。盗聴器を外さなきや」

母親、子供のズボンを脱がして、スタッフにはさみを借りて、盗聴器を取り出して、ティトボレイに渡している。

カミール「それじゃあ手続きをしますので事務所に行きましょうか」

母親、子供、カミール、出ていく。

リガヤ、エリに話しかける。

リガヤ「スタッフは募集しているのです？」

エリ「はい、まだまだ足らないのです？」

リガヤ「私もここで働けないかな？」

エリ「1ヶ月は研修期間で適性がなければやめさせられます」

リガヤ「そうだよね。ビログの兄弟があと二
人いてその子たちもここでお世話になると
いうのは甘えすぎですか？」

エリ「他の子供たちも平等に扱ってくれるな
ら、いいと 思いますよ」

リガヤ「わかりました。よく考えてまた来ま
す」

ティトボーリ、ドンドンと話している。

ティトボーリ「今日は視察ですか？」

ドンドン「これからアンジエリンと申請書類
の提出に行くんだが、時間があつたので寄

つてみた。ヴィルマも見てみたいと言うし。

みんな張り切つて働いているようだな」

ティトボーリ「俺たちにできることがあれば
何でも言ってください。選挙の応援だつて

行きますよ」

ドンドン「うれしいことを言ってくれるじゃ
ないか、その時は頼む」

ロビン、盗聴器を発見する機械で部屋の隅々まで調べている。反応がないので部屋の外や、少年たちが集まっている広場も調べている。

ジミー、見ている。

ロビン「おかしいな、全く反応がない。もう

取り外したのだろうか」
ジミー「ロビンが出て行つた後に、母親が2人来て、嫌がる子供を無理やり連れていつたけど」

ロビン「くそ！、多分その子供に盗聴器をつ

けてたんだろうな」
ジミー「そうだったか、まんまとやられた」
ロビン「そいつの家はわかるだろう！」見て

来い」

ジミー、走つていく。

○ケソン・社会福祉開発省（口 S W D）・内

4階建て。古い。
ドンドン、カバンを持って、

らかさがある、壁にはSTS Cの活動がある。ソファやラウンジチエアは柔植物がある。理事長室は信頼感を示す雰囲気。観葉植物が置かれ、デスクと椅子は重厚感がある。

いる。いる。パソコンや机、棚、ソファが置かれてが取り付けられている。パソコンや机、棚、ソファが置かれてが取り付けられている。

E T C H I L D R E N (S T S C) 本部

381

アンジエリン、書類ケースを小脇に抱えてDSWDの敷地内を歩いている。
アンジエリン「緊張しています」
ドンドン「今日は提出するだけだ」
アンジエリン「何回も見直しましたから、書類は完璧だと思うのですが」
ドンドン「さあ行こう」
二人、建物内に入っていく。

写真。

財務部長室も落ち着いた雰囲気。

三枝、パパジー、理事長室を見ている。

ロメロ、ティトボーア、新しいソフア

にふんぞり返っている。

ロメロ「サンタメサ支部に支部長室作つても

いいかな」

パパジー「10年早い、却下」

ティトボーア「トンド墓地支部は？」

パパジー「意味ない」

三枝「財務部長室なんていらないと言つたの

だが、アンジエリンが資金を集めんだから、それなりの部屋が必要と譲ろうとしない。結局押し切られてしまつた

パパジー、ティトボーアとロメロを横

目で見て、にやりと笑い、
パパジー「アンジエリンはさすがだな。お前
らみたいにいかつこうしたいつてやつと
は大違イ」

三枝、ソファに座る。

三枝「B A B Y B O Xを設置したい。日本では赤ちゃんポストというのだが。保育器を備え、温度管理をして、夜間に預けられても朝まで安全に過ごせるような設備だ」

パパジー「それって、さまざまなお仕事で育てる事ができなくなつた赤ちゃんを誰にも気づかれずにそつと預ける箱ということ？」

三枝「そうだ！赤ちゃんを入れると自動でロックされ、外側からはもう開けられない」

ティトボレイ「それはいい。ボスはいいこと考えるなあ」

パパジー「俺にまかせてくれるか？」

三枝「他の支部にも置きたいから4つ頼む」

パパジー「それは大変だ。一つ一つサイズが違う」

ロメロ「ロメロ、はしゃいでいる。

なる。これならマスコミにも取り上げられそうだし、SNSでも話題になる。資金も集まってくるだろうな」

○ トンド・墓地・ロビンの家・内

ロビン、眉をしかめて椅子に座つて
る。

ジミー、戻つてくる。

ジミー「母親も子供もない」

ロビン「チツ、やられたな。母親とガキにケ

ジメをつけてやりたいが、今回は見逃して
やる。警察を敵に回すことになるからな」

ジミー「俺がやつてやろうか。未成年だから
捕まらないし」

ロビン「あの母親とガキはネルソンに頼まれ
だけだろう。だがな、俺は決して許さない。
それまでなにもするな」

○サンタアナ・児童養護施設・厨房

湯野、業者に指示を出している。

業者は6人、大量調理を行うための設備、冷蔵庫、冷凍庫、皮むき機、スライサー、洗浄機、回転窯、フライヤー、食器洗浄機などを搬入している。キカイ、スタッフ2名、三枝、アンジエリン、エリ、マイキー、感心しながら眺めている。

x x x

385

業者が搬入を終えて、湯野がキカイたちに話している。

湯野「キカイさんはパパジーの奥さんの妹さ

んなんだ。パパジーには世話をなつた」

キカイ「おやまあ、パパジーも五つ星の料理

長に感謝されるなんてすごい」

アンジエリン「湯野さんの作る料理って舌がとろけるほどおいしいの。世界一のシェフ

なんだよ」

湯野 「アンジエリン！ さすがに褒めすぎ！」

でもそこまで言われたら、いつかここでみ
なさんたちにまかないでも作つてやるか」

キカイ、アンジエリン、三枝、エリ、
手を叩いて喜んでいる。

三枝 「またまたあ、簡単に約束しちゃつてい

いのか？ 忙しいのに」

湯野 「ははは、さあて設備の説明をするから

よく聞いて」

キカイ、スタッフ、アンジエリン、エ

リ、湯野のそばに集まっている。

○ パヤタス

デレク、スタッフ、パヤタス支部・前
けて い る。 看 板 に は 2 名、 看 板 を 取 り 付

H T S T R S T C E P A Y A C H I S L A D V B R E R A N H C S E
机 、 パ ソ コ ン 、 ソ フ ア な ど 設 置 さ れ て 。 と 書 か れ て い る 。 。

パパジー 「パパジー やつてくる。

パパジー 「おつ新しいスタッフか、よろしくな」

デレク 「こちらはパパジー、役職はなんだっけ？」

パパジー 「支部を取りまとめる本部長」

スタッフ2名、パパジーに握手している。

スタッフ1 「よろしく、SIRパパジー」

デレク 「おお、パパジーにSIRがつくのか、

387

あ」

パパジー 「いやー、まさに破格の出世だな、

でも俺だけじゃない。お前だつて支部長だ

ろ? デレク、今までみたいな甘っちょろ

い動きじや通用しない。他の支部に負けて

たら容赦なく降格させるぜ」

デレク 「そうだよな。支部長になれた。他の支部には絶

対に負けない。それで何? 心配で見に来

た？』

パパジー「B A B Y B O X を入り口横に作

る。それでサイズを計りに来た。内容はこの紙に書いてあるからよく読んでくれ」

デレク、スタッフ、覗き込んでいる。

デレク、両手を大きく上げて、思い切

り振り下ろしている。

デレク「あーこれはいい」

○ケソン・社会福祉開発省の近くのレストラン

388

ン、入口

ドンドン「タんさん、お忙しいのにわざわざ

リム、タン、ドンドン、三枝、ヴィルマ、立ちながら話している。

ドンドン「タんさん、お忙しいのにわざわざ

お越しいただいて、さらに関事にまでなつていただいてありがとうございます」

タン「三枝がN P O を立ち上げて、ドンドンが理事長になると聞いたから、応援しないわけにはいかないだろう」

三枝、会釈している。

リム「タンがテレビ局の社長と懇意だと聞い

て、頼んだ」

タン「一番仲の良かった同級生なんだ。まか

せてくれ」

リム「俺も社会福祉開発省の局長は以前から
つきあいがあつて、問い合わせたら感触は

悪くなかったから、うまくいくと思う」

三枝「よろしくお願ひします」

○ 同・内

リム、タン、三枝、ドンドン、ヴィル

マ、社会福祉開発省の局長、テレビ局
の社長、食事している。

タン「わざわざすまないな。検討してくれた

か？」

テレビ局の社長「タンに頼まれたら断れない。

それにこのNPOは内容を見れば応援した
くなる。車で移動すると必ずといっていい
ほどストリートチルドレンの姿を目にする。
フィリピンはアセアンの中でもベトナムと

並んでまだ下位中所得国だ。政府は上位中所得国を目指すと言っているが、路上に子供たちが溢れている現状、できるわけがない。笑わせるなと言いたい。だからこそ我々は STSC に大いに期待する。テレビ局、系列のラジオ局、新聞社も含めて、全力で支援させてもらう

ドンドン、右手を胸に当てている。

ドンドン「ありがとうございます」

テレビ局の社長「具体的にどういう支援がいいのかは関係部局と相談してから決めるが

まずは取材をさせてくれ。ニュースで扱つて反応をみたい

ドンドン「取材はいつでもOKです」

リム「社会福祉開発省はどうなんだ?」

社会福祉開発省の局長「社会福祉開発省も了解した。申請書類も完璧だし、ストリート

チルドレンを減らし、BABY BOX のア

イデアもいいと思う。STSC を正式な NPOとして認めよう。養子の斡旋も大いに

やつてくれ。ある程度実績ができれば政府からの支援もあるだろう。そしてドンドンさんが下院議員に当選するよう願つている」

ドンドン「ありがとうございます」

リム、ドンドンと三枝に向かって
リム「実績はまず、目に見える形で示さなければならぬ。マニラに6万人もいるストリートチルドレンが1000人減ったところで、街中での変化を実感するのは難しい。

が、児童養護施設がストリートチルドレンで満杯になつていれば、支援者はその成果を直感的に理解できれば、支援の必要性を明確に感じるだろう。できるだけ早く1000人集めることだな。がんばれよ」

三枝「がんばります」

ドンドン、三枝、満面の笑み、テープルの下で強く握手している。

○ 同・入り口

リム、三枝、歩きながら話している。

リム「また何かあつたら、遠慮せずに言つてくれ。しばらくは違法な斡旋は控えめにな」

三枝「はい、そのつもりです。」
では我慢します

リム「セバスチャンが会いたいそだ。電話

してやれ エルアかもな?】

今はさすがに無理です」

○サンタメサ・S T S C サンタメサ支部・中₃

H I L D R E N (S T S C) S A N T C

S A V E T H E S T R E T C

A M E S A B R A N C H と書かれている。備品も

た看板が取り付けられている。備品も

置かれている。

ロメロ、パソコンでクラウドファンデ

イングのサイトに B A B Y B O X や

施設の動画を加えている。

スタッフ 2 名、見ている。

パジ一、業者2名、やつてくる。

口メ口「今日は何?」

パバジー「BABYBOXなんだが、業者に見てもらわないとうまくいかない。おー、新しいスタッフか。本部長のパバジーだ。

よ
そ
し
く
な

業者、
因面を見ながらサインズを測つて

スタッフたち、パジーに握手をして

パバジー「今な、理事長とボスは社会福祉開発省やテレビ局の社長と会つて、支援を頼

んでいる

口メロ「ものすごいことになつてるな、スラムに住んでる俺たちが、関わつてるなんて

「だよ」

ロメロ「クラウドファンディングで200万ほど今集まってるんだけど、それならもつ

ともっと増えそう」

パパジー「施設を見てたら金なんかいくらあつても足りそうにない。桁が二つぐらい違う。がんばってくれ、支部長」

ロメロ「その呼ばれ方いい、グッとくるなあ。けど桁二つつていうのは2億必要ってことか」

パパジー「だな、まあ金のことはさておいて、ボスから伝言がある。フェイスブック、インスタにホームページ、TICKTOOK、X、をスタートさせろ。加えてボランティア募集にスタッフ募集も入れてくれ」

ロメロ「まかせて、急いでやるけど、ボランティアについて詳しく教えて?」

パパジー「奉仕活動だから無償で交通費もない。ただ、養護施設での宿泊、食事、おやつは提供される。最低、月に1回以上3時間程度は活動してほしい」

パパジー「覗いている奴がいるな、イアンじイアン、中を伺っている。」

や
ないか」

ロメロ「あいつここで働きたがっている」

パパジー「めんどくさいやつだな。あれから何も話さず、謝りもしないで、こそそ嗅ぎまわる。あんなやつにかまつている暇はない」

ロメロ「俺もあいつに足を引っ張られるのはごめんだ。俺が支部長でいられる間は、イアンとは一切関わらない」

いく。
パパジー、イアンには目もくれず出て

○ マカティ・ダスマリナスビレッジ・セバス

チヤンの家・リビング

ナツツを食べ、マンゴシェイクを飲んでいる。

セバスチャン「リムから聞いたぞ、NPOを

三枝「無謀かもしれないが、どういうわけ立ち上げるんだつてな」

か、一気に話が進んで、もう後戻りはでき

なくなりました」

セバスチャン「その話の続きを後日するが、

今日来てもらったのはクリスのことだ」

三枝「問題ありのようですね」

(フ ラ ツ シ ュ バ ッ ク)

クリス、メイドが去つたのを見て、赤ちゃんに近づき、恐ろしい形相で引っぱたいている。赤ちゃん、火が付いた

ように泣き叫んでいる。
メイド、泣き声を聞き、慌てて部屋に入り、大声をあげ、人を呼んでいる。

セバスチャン「先日、クリスは家庭教師の仕事を終えて、預かっている赤ちゃんに会いに行つた。その時の様子をメイドが見た。
すぐさまクリスと赤ちゃんを引き離

し、もう会わせないようになつた

三枝「虐待ですね」

セバスチヤン「家庭教師の仕事は完璧だつたから、俺はまったく気が付かなかつた。彼女は養父母に育てられ、幸せだつたと言つていたが、どうやら真逆で虐待されて育つたらしい。それで仕返しをしたかったんだろうな」

三枝「そうでしたか」

セバスチヤン「それで俺が赤ちゃんを育てようかと思ったが、どうも気乗りがしない。返金しろなんて言わないから引き取つてくれないか？」

三枝「そういうことでしたら・・・わかりました」

○サンタアナ・STS C児童養護施設・乳児部屋

三枝、赤ちゃんを抱いて入つてくる。
カミール、エリ、掃除している。

カミール、三枝に気が付いて、

カミール「どうしたの？ その赤ちゃん」

カミール、赤ちゃんを三枝から受け取る。

三枝「未成年がレイプされて生まれた赤ちゃんなんだが、引き取り先で虐待されて戻ってきた」

カミール「あああ、ロメロが関わった件だけね。私はあの時、一度も見なかつたんだけど。この子、どれだけ不幸なのよ？」

三枝「新しい引き取り先を見つけるから、ここでしばらく預かっておいてくれ」

カミール「大切に大切にしてあげる」

○ショッピングモール・スーパーマーケット

キカイ、スタッフ、調理用器具や食器

類を買い集めている。

三枝、アイナ、アラ、ボウル・まないになつたカートを押している。

板・包丁・皿・スプーンなどでいっぱ

三枝、キカイと並んで、

三枝「どう？仕事は慣れた？」

キカイ「まだまだ1これからだよ。住み込み

半分、通い半分でいこうかなと考えてる。

週に1日は休みがほしいし」

三枝「そうだな」

アイナ、アラ、カートをほつたらかしにしてお菓子売り場に行き、両手いっぱいにお菓子を抱えてカートに入れている。

三枝「アイナ、アラ、後で買ってあげるから

戻ってきて。このカートの商品は仕事に使うものだから混ぜるとややこしい」

アラ、アッカンベーをしている。

キカイ「アイナ、アラ、返してきなさい！」

アイナ、行こうとする。

アラ、寝転がって、仰向けになり、四

肢をバタバタさせて泣き叫んでいる。

三枝、茫然と見ている。

三枝「まいったな。こんな時はどうする？」

キカイ「怒つてもあやしても泣き叫ぶだけ、少し離れて、落ち着くのを待ちましょう」

キカイ、三枝、スタッフ、離れたところからアラを見ている。

アイナ、お菓子を返している。

他の客が見ているが、キカイはまつたく気にしない。

三枝、感心している。

アラ、しばらくバタバタしていたが、渋々立ち上がり、キカイと三枝を見て

いる。キカイ、動かない。

アラ、ゆっくりと近づいてくる。

キカイ「落ち着いた? バタバタしてもだめなものはダメだよ。後で買つてあげるから、さあレジに行こう」

○サンタアナ・STSC・児童養護施設・中

ル、エリ、キカイ、取材を受けてい
テレビ局が取材に来ている。カミー

る。

ロメロ、スタッフ、2人の子供と母親を連れてくる。

ロメロ、驚いているが、マイクを向けられると、喜んで取材に応じている。

○サンタアナ・STS・本部・中

テレビ局が取材に来ている。

ドンドン、アンジエリン、インタビュ

ーに答えている。

ドンドン「理事長のドンドンです。ストリー

トチルドレンを半減させます。そのため

に・・・

三枝、後ろで見ている。

○トンド・STS・C トンド墓地支部・中

テレビ局が取材に来ている。ティトボ

レイ、子供二人と共に、取材を受けて

ティトボライ「BABY BOXは何らかの

いる。

Y

B

O

X

は何らかの

理由で育てられなくなつた赤ちゃんを
・・・」

○アラバン・ナネットの家・前

豪邸。大きな庭があり、プールが見え
るが、水は入っていない。

三枝、ベビーカーを押ししながら門を通
つていく。

メイドが門を開めている。

ナネット、玄関の前にいる。

○同・リビング

ナネット、三枝を招き入れる。

三枝「エドナさんから聞きました。3年前に

二人のお子さんと旦那さんを事故で亡くな

れましたそうですね。慰める言葉もありません
が、毎日どのようにお過ごしなのでしよう

か?」

ナネット「教会に毎日行きます。後は病院
へ、更年期障害で体調が悪いので」

メイド、マンゴアイスクリームとレモネードを運んでくる。

三枝「なんとなく、今回は直接、ご覧いただ

いたほうがいいのではないかと思い、赤ちゃんを連れてきました。生後6ヶ月の男の子です。彼は未成年の母親がレイプされて生まれました。さらにおじいさんに殺されそうになるという過酷な経験もしてします。その後、養子として一度は引き取られたのですが、そこで虐待を受け、再び保護されることになりました。多くの困難を乗り越えてきた子ですが、現在は健康に過ごしています。養子として迎え入れ、愛情をもつて育ててみませか？」

ナネット、「赤ちゃんと一緒に抱いている。ナネット」「もう私は子供は授かることはありません。生きる張り合いもなくしてしまって、誰もいないのにこんなに広い家で、これから的人生、どう生きていくかいくら考

メイド、マンゴアイスクリームとレモネードを運んでくる。

三枝「なんとなく、今回は直接、ご覧いただいたいたほうがいいのではないかと思い、赤ちゃんを連れてきました。生後6ヶ月の男の子です。彼は未成年の母親がレイプされて生まれました。さらにおじいさんに殺されそうになるという過酷な経験もしてします。その後、養子として一度は引き取られたのですが、そこで虐待を受け、再び保護されることになりました。多くの困難を乗り越えてきた子ですが、現在は健康に過ごしています。養子として迎え入れ、愛情をもつて育ててみませか？」

ナネット、「赤ちゃんと一緒に抱いている。ナネット」「もう私は子供は授かることはありません。生きる張り合いもなくしてしまって、誰もいないのにこんなに広い家で、これから的人生、どう生きていくかいくら考

えても答えは見つからず、一人で侘しく生きるだけならいっそ死んだほうがましとさえ思うことがあります。そんな折、病院でエドナさんと養子の話をしていて、軽い気持ちで一度会ってみたいと言つたのが、まさか本当に赤ちゃんを連れてきていただくとは思わず、驚きました。もしかすると毎日、教会に通い続けたおかげかも知れませんね」

三枝「この子を育てることで少しでも笑顔が取り戻せるようになります」

ナネット「未亡人である私には現行の制度では裁判所から養子縁組の許可を得ることは難しい状況です。今まで法律を犯したことなど一度もありませんが・・・この子を育ててみたい。いくらお支払いすれば？」

三枝「500万です」

ナネット「それくらいなら今、お支払いできます。お金は一生かかるかもしれません。お支払いできほどあります」

ナネット、金庫を開け、500万を渡す。

三枝、受け取ったが、三枝「すぐに決めていいのですか？」日を改めてもいいですよ」

ナネット「赤ちゃんを見た瞬間に決めていました。迷いは一切ありません」
三枝「わかりました。お預けします。この子を幸せにしてください」

○ トンド・パパジーと三枝の家・三枝の部屋 405

三枝、お金を分配している。
パパジー、ティトボーアイ、ロメロ、デレク、アンジエリン、カミール、エリ、キカイ、踊っている。

三枝、配り終えて、両手を前後に大きく振つている。
全員、踊りをやめている。
三枝「踊るのをやめて聞いてくれ！」

三枝「違法な養子斡旋はこれをもつて当分ス

トップする。再開するのはSTSCが軌道に乗つてからだ。それで今回だけ、いつも2倍支払う。なぜなら一度斡旋した子供を引き取つて、別の女性に斡旋したため、300万の支払先がない」

全員、歓声をあげ、再び踊りだす。

三枝、再び両手を振つている。

三枝「待て待て、話の続きをある。STSCは給料が安いし、当分、臨時収入はない。

この金は大事に使え」

アンジエリン「わかった。踊つてもいい?」

三枝「まだだ、違法な養子斡旋に関わるもののは俺を含めて、ここにいる9人とする。これ以上は増やさない。この9人は死ぬまで秘密を抱いて生きていことになる。なお、理事長や理事はこの件については一切関わらない。問題が起きれば、責任は俺たちで取る。それでいいか?」

ロメロ「サンタメサ支部長の俺が代表して言つておく。いいぜ! イエーイ。さ

あ
踊
ろ
う
」

三枝、やれやれといつた表情。

アイナ、アラ、友達2人、飛び込んで
きて一緒に踊つてゐる。とうとうメイ
リーンまで飛び込んできて、三枝と踊
つてゐる。

○ チャイナタウン・日本語教室・中

三枝、授業を終えて、日本語で話して
いる。生徒8人聞いている。

三枝「本日の授業はこれで終わります。余談

ですが、サンタアナにストリートカルドレンジの数を半減させるNPOを立ち上げ、財務部長として関わることになりました。なお、日本語教室の先生はこれまで通り続けますので、これからもよろしく。以上」

生徒たち拍手している。

三枝、照れくさそうに出ていくが、工
ドナを見て合図する。

○チャイナタウン・マクドナルド・中

三枝、エドナ、食べている。
エドナ「へー先生はやめないんだ。みんな喜
んでいたね」

三枝「拍手されて少し照れくさかった」

エドナ「墓地に住んでる先生がNPOの財務

部長！出世したのね！」

三枝「もう墓地には住んでいない」

エドナ「引っ越したの？おめでとう」

三枝、封筒を渡す。

三枝「以前、紹介してくれたナネットさんに

養子を斡旋した。これはそのお礼」

エドナ「またまた貰えるの？どうやつたら

そんなにうまくまとめられるの？本当に

ありがたいけど」

三枝「でも違法な養子斡旋は当分お休み。N

P Oに全力で取り組まないといけないから。また再開するときは連絡するけどね。

でもエドナさんは日本に行つてゐるかもな」

エドナ「そうなるかも、わかつた。今まであ

りがとう」

エドナ、ハグをして三枝の頬にキスをする。

○サンタアナ・STS C児童養護施設・ゲート

大型バス、小型トラック、乗用車がやつてくる。

ガードマン、停車させて中を確かめ、行けという合図。

そのまま駐車場に向かう。

駐車場には三枝、カミール、エリ、アンジエリン、キカイ、リガヤ、スタッフ数名、ビログ、子供たちが待つてい

る。

バスからセバスチャンとタンとキムが降りてくる。

大型バスとトラック、自動車には荷物が山積みされている。三枝、駆け寄つてくる。

三枝「突然、荷物を持っていくから待つてろ
つて、驚くじやないですか？ それも3人

お揃いで」

セバスチヤン「いやあすますまん、思い立つ
たらすぐに行動しないとな」

三枝「あいかわらず、せつかちですねー」

セバスチヤン「バスに大型トラックに乗用
車、3台を寄贈する。好きに使ってくれ、
当然だが全部中古車だぞ。ただし整備はき
つちりやつていてるから当分は故障しない。
おもちゃやゲームも入れておいたぞ」

カミール、子供たち、大歓声！

セバスチヤン、手を振つている。

キム、三枝の肩を叩き、

キム「ずっと前に約束していた賞味期限切れ

の日本食材を持ってきた。それだけでは失
礼なので、トラックには韓国インスタント
ラーメン、サムギョプサル、ブルコギ、キ
ムチ、おでん、トッポギ、韓国のり、冷凍
庫には韓国アイスクリーム。それにチヨコ

レートやチップスなどお菓子類も大量に持つてきた。ラーメンは1万食以上あるら、これで子供たちが当分、飢えることはない。冷凍庫、冷蔵庫も寄付するぞ」

子供たちはトラックを見上げて、大喜びしている。

三枝「ありがとうございます。韓国製品は人気があるので子供たちも大喜びです。降ろしてもいいですか?」

キム「もちろん」

アンジエリンたち、次々に商品を運ん

でいく。

スタッフ、台車で冷凍庫、冷蔵庫を運

んでいる。

ビログ、段ボールを開けている。

カミール「ビログ! 段ボールを開けちゃダメ。後で」

カミール、注意している。

ビログ

、段ボールを開けている。

三枝「賞味期限切れの日本製品はさすがに子

供たちには食べさせられないのと、私と湯

野さんで全部食べます」

キム「おなか壊すなよ。壊しても文句を言つ

てくるな。ようやく約束を果たせた」

タン、小切手を三枝に渡している。

タン「薬でも持つてこようか、病気になつた時に無料で診察するかとか考えたが、さすがに無理があるので、俺は小切手を渡す。

100万は少ないかもしねが、俺が生きている限り、毎年寄付をする。それでフイリピンからストリートチルドレンを消し去ってくれ。これは中国人の悲願だ」

三枝、タン・セバスチャン・キムに握手をしている。

三枝「皆さんの期待に全力で答えたいと思います。今日はドンドン理事長は不在ですが、改めてお礼に伺わせます」

○トンド・STS・TONDO支部・内業者、BABI BOXを設置してい

る。

受け入れ口には B A B Y B O X の文字。その下に注意書きがある。注意書きには「赤ちゃんを入れたらすぐに扉を閉めてください。閉めると外側からは開けることはできません。匿名で預けることができます。インター ホンでスタッフと話せますが、不在の場合は伝えたいことをメモに書いてください」と書かれている。

三枝、ティトボーリ、パパジー、アンジエリン、外から人形を入れて、確認

している。

三枝「いいじやないか、パパジー、残りの 3

つも頼む」

ネルソンやつてくる。

ティトボーリ「迷惑な奴がやつてきやがつ

た」

ネルソン「おう、日本人！久しぶりだな。

俺の忠告を聞いてN P Oを立ち上げたんだ

ろ
—

x

x

x

(フラッシュユバック)

ネルソン「物売りなんかやめて、日本人にしかできないことを考えろ。少しはスラムの役に立つようなことをな」

x

x

x

ティートボーリー「お前のアドバイスなんて屁みたいなもんだろうが。それはそうと俺に借

414

りを返せよな。お前が盗聴器でどじつたこと忘れないぜ」

ネルソン「やいやい言うなつて、ところで

な、日本人よ」

ティートボーリー「ボスのことを日本人って呼ぶな。ぶつとばすぞ！」

ネルソン「おー怖！。前にも言つたが、貧乏

な日本人はオーバーステイでも入管に収容されないと言つただろ、ところが今のお前

はどう見たつて金を持つている。きつちり

しないと入管の餌食にされるぞ！」

アンジエリン「えー、ボス、まだオーバース
テイなの？　いい加減にしなさいよ」

三枝「バスポートは1カ月前に申請したので
取りに行く。ビザはそろそろやらないとは
と思つていた」

アンジエリン「仕事はしなくていいから、早

くやつて」

ネルソン「いいこと教えてやろう、お前が直

接人管には行くな、下手したら強制送還さ

れてしまふ。下院議員とか政治家の知り合

いがいるんだろう。そいつに任せるのが一

番だぜ。金はかかるが就労ビザを取つて、

一件落着。簡単だ」

ロビンとジミー、ゆっくり歩きながら

○同・前
ジミー「多分、ティトボーカだ。盗聴器を付
ら、中の様子を窺つている。」

けた子供を母親がどこかに連れて行つたと
きも見かけた。ナルソンともよく話してゐ
し、ビログの母親ともな」

ロビン「そういえばビログも。他に何人か、
子供の姿が見えない。あいつNPOの支部
長なんだろ！ストリートチルドレンを半
減させるだと！できもしない理想を掲げ
やがつて。静かにさせてやらなきゃな。き
つちりと思い知らせてやる」

○サンタメサ・STS Cサンタメサ支部。内

スタッフ、テレビを見ている。

テレビにはロメロが映つている。

ロメロ、体をひねりながら目を大きく

開いて見ている。

ロメロ「いいタイミングで子供を連れて行つ
たな。くーーつ、だけど、失敗した。テレ
ビに映るのがわかつていたら、もっと洒落
た服を着ていったのに」

○ サンタアナ・S T S C 本部・内

アンジエリン、三枝、ドンドン、テレ

ビを見ている。

スタッフが歓声をあげている。

ドンドンとアンジエリンがインタビュ

ーされていて、三枝はドンドンの横に

立っている。

ドンドン、「緊張してたからなあ、アンジエリ

ンは落ち着いているのに、俺は声が上ずつ

ドンドン、スタッフに聞いている。

スタッフ「いいと思しますよ、わかりやすく

説明しますから」

ドンドン、息を大きく吐いている。

スタッフ「

て い る」

○ パサイ・日本大使館・前

三枝、アンジエリン、ゲートから出て

くる。

アンジエリン「やっとパスポート取れたね」

三枝、パスポートを見ながら、

、

三枝「わざわざついてこなくてもよかつたのに」

アンジエリン「ボスは自分のことになると、まつたく無頓着だから、私が見張つとかない」とね」「監視のお役目ご苦労様」

○サンタアナ・S T S C・児童養護施設・ゲ

ート

デレク、スタッフ、5人の子供と二人の母親を連れている。

いかついガードマンに止められている。

る。

デレク、びびりながら、

デレク「あのあの、パヤタス支部長のデレクです。ストリートチルドレンと母親を連れ

てきた」

ガードマン「I Dを見せて」

デレク、I Dを見せて

ガードマン、電話している。

エリ、走りながら手を振っている。

エリ、ガードマンと話してから、全員

を案内している。

エリ「次からはＩＤだけで簡単に通れるよ」

ン」

エリ「デレクは初めてだっけ」

デレク「あー、この様子がよくわからない

から、まずは子供を連れてきて勉強しよう

と思つて」

エリ「わかった。手続きするからついてき

て」

○ 同・事務所・内

エリ、デレク、母親と子供たち、入つてくる。

スタッフが仕事をしている。

エリ「座つて」

デレクたち、座る。

エリ「この子たちは？」

(フラッシュバック)
X X X

子供たち、布で口を覆い、ゴミを漁つ
ている。ハエが無数に飛び交ってい
る。

X X X

デレク「5人共パヤタスでごみを漁つて生活
している。不衛生だし、危険だし、母親た
ちを説得して連れてきた」

エリ、母親たちを見ながら、用紙を渡
している。

エリ「預けますか？」食事から学校まで何も
かも無料です。質問がありますか？なけ
ればこの用紙にすべて記入してください」

母親1「会えなくなるのですか？」

エリ「いつでも会えます。引き取るのも自由
です。私たちは子供を働かせているのも自由
強く反対しています。学校に行き、大人に

なれば社会の一員として活躍できるよう、

必要な支援を行います」

母親たち、用紙に記入している。

デレク、感心している。

デレク「エリ！ いつのまにそんなしつかり

したことを言うようになったの？」

エリ「アンジエリンと相談して覚えたんだ」

母親、用紙を渡している。

母親2 「5人共預けます。何日か後に見に来

ていいですか？」

エリ「いつでもどうぞ」

エリ、立ち去ろうとするデレク呼び
止める。

エリ「産後鬱の母親の赤ちゃんはどうする

の？ 養子に出せる？」

デレク「どうにもできないんだ。母親の症状

が悪化して精神病院に入院してしまった。

薬物療法やカウンセリングで治療している

けど、退院するのはいつになるかわからな

い」

エリ「わかつた。長い目で育てるよ」

デレク「ありがとう」

○トンド・パパジーと三枝の家・三枝の部屋
日本の食材が山積みされている。
アイナ、アラ、うまい棒を食べている。

三枝、食材を見上げながら、ため息を
ついている。テーブルの上には梅干し
と日本茶がある。

アラ、そつと手を伸ばし、梅干しを口
に入れ、ものすごい表情になつている。

三枝、アイナ、大笑いしている。

○サンタアナ・S T S C 本部・財務部長室
三枝、ビリー、キコ、キコの父親、ド
ンナ、ラニー、アンジエリン、ソファ
に座っている。

ラニー、二つのベビーカーの赤ちゃん

を見て いる。

三枝「ご無沙汰しています。今日はお揃いでどうしたのですか？赤ちゃんは二人とも元気そうですね」
ビリー「いやあ、テレビを見ていたら、三枝さんが映つていて、NPOを設立したと知つて驚きました」
三枝「私はただ立つていただけですよ」
アンジエリン「私がしゃしゃりでしまつたから、ボスが話せなかつたの。すみません」
ラニー「三枝さんつて金の亡者かと噂していたんですよ。違つたようですね」
ドンナ「三枝さんは私にとつては真っ白い羽の生えた天使。あのお金だつてこういうことに使つてくれるならすごくうれしくて」
アンジエリン、大笑いしている。
アンジエリン「天使って？ おっさんだよ」
三枝、アンジエリンに笑いながら、し
かめつ面。

三枝「ぶーーーーー」

父親「それで少しでもお役に立てたらと思つて、今日は来た」

キコ、カバンから小切手を出して、机の上に置く。

キコ「少ないけど小切手5枚持ってきた。少しは役に立つかな」

三枝、深々とお辞儀をしている。

三枝「ありがたく頂戴します。助かります」

ドンナ「それで以前、話したと思うけど、レズビアン、ゲイ仲間が子供を欲しがつている。そろそろ紹介してもいい？」

三枝「何か月か待つてもらえますか？今は

S T S Cが始まつたばかりで違法な養子斡旋はストップしています。落ち着いたら必ず連絡します」

ドンナ「わかりました。待っています」

○ヴァレンズエラ・リムの家・ダイニングルーム

三枝、リム、ドンドン、リンロン、肉

まんを食べ、中国茶を飲んでいる。
ヴィルマ、赤ちゃんをあやしている。

三枝「お恥ずかしい話なんですが、実は私は
オーバーステイの状況にあり、それを解消
するためにお力添えをいただけないかとお
願いに参りました」

ドンドン「三枝さんが強制退去させられると
本当に困る。親父、なんとかなるだろ！」

頼む」

リム、とぼけた顔で、

リム「ありやりや、えらく丁重な。なんとか
してやりたいが、俺にもできないことがある
る」

ドンドン「嘘だろ！」

リム「あー嘘だ」

三枝、ずつこけている。

リム「まかせておけ。強制送還なんてさせない。
うちのサンダル工場で働いてもらうことに
として3年の就労ビザを取つてやる。た

だし、金がかかるぞ！ 入管の担当者に賄

賄が必要で、多分200万くらいはかかるかな。それでいいか？」

三枝、パスポートを渡している。

三枝「はい、今までほつたらかしにしていた

私が悪い。それからお金なんですが、ST
SCにほとんど寄付してしまい、手持ちがありません。STSから返却してもらう
わけにはいかないので、ドンドン理事長！
200万お借りできないでしようか？」

ドンドン「わかった、いつでもいいから返してくれたらいい」

三枝、深々と頭を下げている。

○サンタアナ・STS児童養護施設・厨房

湯野、マイキー、料理を作っている。
アンジエリン、手伝っている。
キカイ、こにこしながら見て
いる。

アンジエリン「湯野さんの手つきを見ている

だけで惚れ惚れしてしまって！」

キカイ「世界一のシェフの包丁さばきを目の前で見れるなんて！」

アンジエリン「マイキーが羨ましい。いつでも食べられるんだよ。本当にラッキー」

マイキー、舌を出している。

三枝、やつてくる。

三枝「本当にまかないをわざわざ作りにきたんだ。5つ星の料理長がすることか！」

湯野「アンジエリンさんが、いついいつとうるさいので」

三枝「アンジエリン！ 湯野さんをこき使うんじやないよ」

アンジエリン「へへへ」

アンジエリン「マイキー、皿やスプレー

ンなどを用意している。

アンジエリン、マイキーに小声で、

アンジエリン「ベッドにもぐりこんだ？ なんとなく湯野さんと距離が縮まつたよう見えるのだけど」

マイキー、アンジエリンを部屋の隅に連れていく。野さんのお子供がほしい」とマイキーはラッシュバックで湯野が部屋に入る前に、湯野のベッドに寝ている。シーツで顔を隠しながら、半分の約束なんか破つていよいよ。湯野さんがお酒を飲んでいたから、私も少し頂戴つて、お酒は苦手なんだ。マイキーは湯野さんと一緒にベッドに潜り込んだ。「マイキー、約束なんか破つていよいよ。湯野さんのお子供がほしい」とマイキーはラッシュバックで湯野が部屋に入る前に、湯野のベッドに寝ている。シーツで顔を隠しながら、半分の約束なんか破つていよいよ。湯野さんのお子供がほしい」とマイキーはラッシュバックで湯野が部屋に入る前に、湯野のベッドに寝ている。シーツで顔を隠しながら、半分の約束なんか破つていよいよ。湯野さんのお子供がほしい」とマイキーはラッシュバックで湯野が部屋に入る前に、湯野のベッドに寝ている。シーツで顔を隠しながら、半分の約束なんか破つていよいよ。湯野さんのお子供がほしい」とマイキーはラッシュバックで湯野が部屋に入る前に、湯野のベッドに寝ている。シーツで顔を隠しながら、半分の約束なんか破つていよいよ。湯野さんのお子供がほしい」とマイキーはラッシュバックで湯野が部屋に入る前に、湯野のベッドに寝ている。シーツで顔を隠しながら、半分の約束なんか破つていよいよ。湯野さんのお子供がほしい」とマイキーはラッシュバックで湯野が部屋に入る前に、湯野のベッドに寝ている。シーツで顔を隠しながら、半分の約束なんか破つていよいよ。湯野さんのお子供がほしい」とマイキーはラッシュバックで湯野が部屋に入る前に、湯野のベッドに寝ている。シーツで顔を隠しながら、半分の約束なんか破つていよいよ。湯野さんのお子供がほしい」とマイキーはラッシュバックで湯野が部屋に入る前に、湯野のベッドに寝ている。シーツで顔を隠しながら、半分の約束なんか破つていよいよ。湯野さんのお子供がほしい」とマイキーはラッシュバックで湯野が部屋に入る前に、湯野のベッドに寝ている。シーツで顔を隠しながら、半分の約束なんか破つていよいよ。湯野さんのお子供がほしい」とマイキーはラッシュバックで湯野が部屋に入る前に、湯野のベッドに寝ている。シーツで顔を隠しながら、半分の約束なんか破つていよいよ。湯野さんのお子供がほしい」とマイキーはラッシュバックで湯野が部屋に入る前に、湯野のベッドに寝ている。シーツで顔を隠しながら、半分の約束なんか破つていよいよ。湯野さんのお子供がほしい」とマイキーはラッシュバックで湯野が部屋に入る前に、湯野のベッドに寝ている。シーツで顔を隠しながら、半分の約束なんか破つついよ。

アンジエリン「わーお、やるもんだねー、
ーねー、それから？」
マイキー「秘密！」
アンジエリン「ちえつ」

第10話

○ トンド・パパジーと三枝の家・三枝の部屋

アイナ、アラ、カレンダーを小脇に抱え、ドアを蹴飛ばして入ってくる。三枝、パソコンの前に座つているが、驚いて顔をあげる。

三枝、「どうした」
アイナ、アラ、三枝の両側に座り、じつと三枝の顔を見ている。
三枝、パソコンを閉じて、

アイナ、カレンダーを広げている。

カレンダーは12月。あと10日でクリスマス

アイナ「ボスリー。

アイナ「ボスリー。

アイナ「ボスリー。

。

アラ「クリスマス、ジングルベル」

。

。

。

アラ「クリスマス、ジングルベル」

。

。

。

三枝「おお、そうだよな」

。

。

。

アイナ「プレゼントは？」

。

。

。

三枝「欲しいものがあるのか？」

。

。

。

アイナ「アラ、それは違うの。ケーキはマミ

。

。

。

「が買ってくれるでしょう」

アラ「ルービックキューブ」

アイナ「ベイブレード」

アラ「ねるねる」

アイナ「黒ひげ危機一髪」

三枝「ウワー、マニラにあるかな？」ネット

ショップ？ 探すわ」

アイナ、アラ「やつた！」

○ マカティ・タンの病院・院長室

タン、三枝、ドンドン、上院議員の秘書、ソファに座っている。

ドンドン「タンさん、先日はわざわざ施設までお越しいただいて、寄付をしていただき、本当にありがとうございました」

タン「期待しているからな」

タン、左手を秘書の膝に置いている。

タン「紹介する。彼は俺が選挙参謀をしている上院議員の秘書だ」

秘書、ドンドンと三枝に名刺を渡して

いる。

三枝、名刺を確認している。

秘書「名刺を貰えますか？」

ドンドン、片手で名刺を差し出している。

三枝、両手で名刺を差し出している。

タン「それでな、上院議員がフイリピンの大

手財閥からの支援を取り付けている。毎年

1億円をSTSCに寄付するということ

だ」

三枝、ドンドン、顔を見合わせている。

三枝「1億円ですか？夢のようなお話です

す」

秘書「ただし、そのうちの1割を上院議員に

還元してほしい」

ドンドン「100万を使途不明金として処理し、上院議員に渡すということです

か？」

秘書「そうだ」

三枝、顔を両手で覆つて、ドンドン、指でこめかみを押さえながら、相談している。

三枝、厳しい表情で、

三枝「1億円は喉から手が出るほど欲しい。しかし、NPOの経理は何よりも透明性が求められます。交際費ですら厳しく制限されおり、裏金や使途不明金などは一切認められません。他の支援者の信頼を損ないますし、将来的に政府からの助成金を受ける可能性も閉ざされてしまします。NPOは一般企業とは異なり、公益性と信頼が全てです。せっかくタンさんにご尽力いただいたのですが、この話はお受けすることができないのです」

秘書「秘書、冷めた態度で、
秘書「そういうことでしたら、この話はなかつたことに」

三枝、ドンドン、歩きながら話してい
る。

三枝「私の判断は間違っていますか？」素直に受けるべきだつたかもしません。ごまかす方法を考えてから返事をしてもよかつたような・・施設の改装費とか架空の工事をでつちあげるとか・・1億円をどぶに捨てたような嫌な気持ちです」

ドンドン「俺が財閥を片つ端から当たつてみる。脈があるということだろう。あんな話に乗せられてたまるか！」

タン、走つてくる。

タン「ぬか喜びさせてしまつたな。上院議員も金が必要だから許してくれ！」ドンドン！下院議員に当選したら、直接、財閥に会いに行け！その時は俺がお膳立てしてやるから」

三枝、ほつとしている。

ドンドン「よろしくお願ひします」

タン「それからな、三枝！」クリスマス明け

ている。ラップ、缶を振つて、歩行者を見上げる。

○ トンド・道路上ベル、段ボールを敷いて横になつてい

どこにいる？」「なに！」妊娠したのか？今

ティトボーア「なに？」
ティトボーア「おおお、ベルか、どうし

ティトボーア「おおお、スマホに着信。」
ティトボーア「スマホに着信。」

三枝「行きます」
三枝、「行きます」

か！リムも湯野もセバスチヤンもキムも
来るぞ」
三枝、につっこり笑つて、

にカンルーバンゴルフクラブに行かない

テイトボーアイ、あきれた表情でやつて

くる。

ティトボーアイ「おまえら、クリスマスがもうすぐだというのに、またホームレスに後戻りかよ。あの金は全部使つちまつたつてこ

とだよな」

ベル「楽しかったなあ」
ベル、大儀そうに起き上がる。

x

x

(フラツシュバック)

100

ベル、ラツプ、ダバオ行の長距離バス
にお土産をたくさん持つて、乗り込ん

でいる。

ベル、ラツプ、海でTシャツのまま遊

んでいる。

ラツプ、カラオケボックスで歌つてい

る。

ベル、新品のアイフォンの箱を開けて

いる。

ベル、ラップ、友人たち、ジヨリビー
でコーラを飲み、ハンバーガーとフレ
ンチフライを食べている。

x

x

x

ベル「ミンダナオにも行つたし、ラップの故
郷にも里帰りした。友達にいっぱいごちそ
うしたし、毎日カラオケで歌つて、そう
だ、海にも行つた。アイフォンの最新のや
つも買つたし、でもお金はなくなつちやつ
て、ここに帰つてきた。それから毎日必死
にセックスして、ようやく妊娠したんだ
よ。また赤ちゃん、買つてくれるでしょ」

ティトボレイ「うんうん、多分いけるはずだ
が。それでもまたホームレスとは」
ラップ「妊娠3カ月くらいなんだ。病院に入
れるないかな」

ティトボレイ「うん、まあ相談してみるけ
ど、いくらなんでも入院は早すぎるとと思
うが」

ベル、両手を合わせている。

ベル「ティイトボーカイ！ お願ひ！」

ラップ「Y.O！ 豪華な病院 ドキドキのチ
ラップ、踊りながらラップを奏でてい
る。」

ラップ「Y.O！ 豪華な病院 ドキドキのチ
エツクイン バックにドンと300万ア

イフオン片手に カラオケ三昧 モネア
病院 Y B A B Y H O M E L E S S M O N E
夢物語

ティートボーカイ「お前、うまいな」

ティートボーカイ、舌を出して空を見上げ
て呟く。

ティートボーカイ「お前、うまいな」

○サンタアナ・S T S C 本部・理事長室

三枝、ドンドン、ティートボーカイ、ソフ
アに座つて話している。

ティートボーカイ「ホームレス夫婦が妊娠3カ月

ドンドン「一応つて？」 どういうこと？
ドンドン「一応つて？」 どういうこと？
り気じやないみたいだな」 乗

ティトボーア「あいつらと話しているとムカムカして。実は金をすべて使い果たしてホームレスに後戻り。入院させろだの。また300万もらえるだろうとか、言いたい放題で」

ドンドン「ふー、まあ、なんとも」

三枝「さあて、どうするかな。要望を聞いてもいいし、突き放してもいいし、半年ほど無視するのもありだし、理事長が決めてください」

ティトボーア「俺もそう思います」

ドンドン「ティトボーア、知らせてくれてありがとう。ヴィルマと親父に相談するわ。

俺の気持ちは食べ物に困らないように、少しだけ援助して、半年たつてから考えるのがいいかな」
ティトボーア、うんうんと頷いている。

ティトボーアイ、歩いている。

椅子に腰掛け、外を眺めていたおばあさんが話しかかる。

隣の墓の後ろに隠れているジミーがナイフを抜き、身構えている。

おばあさんが椅子から立ち上がるうとして、少しよろける。ティトボーアイがおばあさんの体を支えた瞬間、ジミーが右手にナイフを握り締め、そのまままっすぐティトボーアイの背中を突き刺す。

ティトボーアイ、驚きの表情で振り返るが、バッタリ倒れこむ。

ジミー「けけけ、ざまみろ。お前にとっち

やー最高のクリスマスプレゼントだろ」
おばあさんの悲鳴が響き渡る。

ジミー、笑いながら、ゆっくりと歩い

50mほど離れたところにいたロビン、両手を大きく上げている。
ていく。

人があつというまに集まつて、テイト

ボーリを取り囲んでいる。

野次馬 1 「ナイフは抜くなよ」 テイトボーカーが刺された

おばあさん、必死に叫んでる。

おばあさん「刺したのはジミー」

救急車を呼ぶ声が聞こえてくる

○サンタアナ・STS C・児童養護施設・厨

房

パパジー、鍋の中を見ている。
パパジー、スマホに着信。
パパジー、スタッフ、調理している。
パパジー、スマホを見て、首をかしげ。

てくる。

キカイ、何事かと手を止めている。

パパジー「ちょっと待て！落ち着いて話せ。なにー、ティトボーアが刺された？」

どういふことだ」
キカイ、火を消して、パパジーのそばに駆け寄る。

キカイ「スピーカーにして」

パパジー、スピーカーにしている。

ネルソン「ティトボーアが墓地で少年に背中を刺された。先ほど、救急車で病院に運ば

れた。容体は不明」

パパジー「病院はどこ？」

ネルソン「まだわからない。わかり次第、知

らせる」

パパジー「頼む。それで犯人は捕まつたの

か？」

エルソン「今から捕まえにいく。少年ギャング団のジミーという餓鬼だ」
パパジー、キカイ、焦りながら、あち

こち連絡している。

○ トンド・墓地・ロビンの家

ネルソン、警官2名、家の中に入つて
いく。

ロビン、ジミー、少年たちと話してい
る。

ネルソン「ジミー、殺人未遂容疑で逮捕す
る」

ジミー「心配するな。俺は未成年だから大丈
夫だ」

少年1「ジミーに向かつて、

少年1「ボス、本当に大丈夫かな」

ネルソン「お前たちのボスはロビンだろう

ロビン「俺はボスじゃない。ジミーがボス

だ」
ネルソン「ロビンも教唆罪及び児童福祉法違
反容疑で逮捕する」

警官、ロビンとジミーに手錠をかけている。

ロビン「どうせすぐに帰れる。わははは」
ロビン、少年たちに目配せしている。

○ トンド・病院・ティトボーアがいる大部屋

ティトボーア、寝ている。
三枝、パパジー、キカイ、アンジエリン、ベッドの横でティトボーアを見て

いる。

ロメロ、カミール、エリ、デレク、スタッフ、勢いよく入ってくる。

デレク「容体は？」

アンジエリン、パパジー、キカイ、三枝、沈痛な表情で少しの間、何も答え

ない。
エリ、ティトボーアのそばに行き、心配そうに見ている。

エリ「死んではない。生きている」
アンジエリン、キカイ、我慢できずに

笑いだす。

ロメロ「なんで笑ってるんだよ」

アンジエリン「ははは、だつて・・・肩甲

骨のあたりをグサッと刺されたの。病院に運ばれてきたときはナイフが突き刺さったまま。でもねーー、ど、ど、どういうわけか内臓にまつたく損傷がないの、悪運が強いというか、笑つてはいけないのだけど、医者が笑ってるんだよ。例えて言うなら、スペアリブの薄い肉と骨の間に、きれいにナイフが刺さったようなものだつて」

ロメロ「スペアリブって？ わかるようなわからないような、でも痛いだろう」

キカイ「激痛だろうね」

デレク「そんなことあるのか？」

ティートボーイはまだ寝てるけど」

パパジー「麻酔でね。一応手術はしたけど、

開いて内臓が損傷ないか確認して、縫合した。まあ何日かは入院するけどね。おそらくすぐには復帰する」

ロメロ「わはー、よかつたー」

パパジー「正直、ラツキーだった。殺人未遂でジミー。ロビンは教唆罪で逮捕された」エリ「その人達が犯人なの? もっと詳しく教えて」

パパジー「刺したやつはジミー。墓地の少年ギヤング団のN.O.2。ボスはロビン。ジミーは未成年らしい。ティトボーアは少年ギヤング団を解体して、施設に収容しようと考へてた。それで盗聴マイクを仕掛けたり、メンバーの何人かを引き抜いて施設に送り込んでいたんだ」

エリ「ティトボーアはその恨みで刺されたってこと?」

パパジー「多分な。取り調べていくうちにわかつてくるだろう」

ティトボーア、薄目を開けているが、目が泳いでいる。カミール、気が付いて、ティトボーアの顔を覗き込んでいる。

カミール「目が覚めたみたい」

三枝、ベッドのそばに立っている。

ティトボーア「力のない声で三枝に話す。」

ティトボーア「ボス、すみません、あんな餓鬼にやられるなんて俺も衰えたな。以前なら気配を察して機敏に動けた」

三枝「死んだと思ったぞ。もう少しづいでたら、お陀仏だつた」

ティトボーア、驚いた表情で起き上がる。すると

三枝、ティトボーアを押さえつけている。

る。

三枝「おいおい、起きるのはダメだ」

ティトボーア、素直に従っている。

ティトボーア「もしかしてたいしたことないのか? グサツと刺されたとき、もうダメかと思つたら、意識が飛んで、そのあとは何も覚えていない」

パパジー「あーしたいしたことない」

テイトボーア、みんなを見回してい

る。

ティトボーア「たいしたことないんだつたらなぜ大勢で見舞いに来ている？昔、喧嘩して大怪我したときは、見舞いなんて誰も来なかつたのに」

カミール「やくざの兄さんでも真面目に働いてるから、みんな心配する」

ドンドン、ヴィルマ、入つてくる。

ティトボーア、再び起き上がりうとす

ティトボーア「理事長まで来ちやつた」

カミール、ティトボーアを押さえつけ

ている。

三枝「理事長！心配には及びません。ティ

トボーアは不死身です」

ドンドン「ナイフで背中を刺されたんだろ」
パジー「それも深々と。ところがすつとこ

どつこい、ピンピングしている」

ドンドン「俄かに信じられないけど・・・」

○パヤタス・STS C・パヤタス支部

マリア、デレク、ソファに座り、話している。テーブルの上に小切手が置かれている。

デレク「どうしたの？」

マリア「昨日結婚したの」

デレク「それはそれは、おめでとう」

マリア「ありがとう。・・・ずっと考えていました。

このお金どうしようかなつて。教会に寄付

449

しょうと思つたけれど。私は信仰心があまりないから、踏ん切りがつかなくて

デレク「貯金しとけばいいじやない」

マリア「それもそうなんだけど。やはり子供

を売つたといふのは一生ついてまわる。このお金を持つてゐるだけ不幸になる」

マリア「なんどなくはわかるけど」

デレク「なんどなくはわかるけど」

マリア「それでデレクたちがN P Oを作つた

と聞いて、フェイスブック見たのよ。そしてN P Oを作つた

たらここに寄付するのが一番いいって思ったの。だから小切手持ってきた。あなたたちにチップを30万払った残り270万がある。使つて？これで子供を売った罪が消えるとは思わないけど」

デレク「でっかいクリスマスプレゼントだな。みんな喜ぶ。マリアの新しい生活に幸あれ。メリーカリスマス」

○カローカン・ジュニアハイスクール・内
ジヨバイ、新しい制服を着て、友人と話している。

ジヨバイ「家を出て、学生寮に住んでいるの。1年以上休んでいたからね」
友人「何があつたの？」

ジヨバイ「今は話したくないけど、とつても嫌なことがあつた。でもジー・ザスが私を助けてくれたの」

友人「ふーん、よくわからなけれど。元気そ
うだからいいか。明日、クリスマスパー

P H A N T が ある の 。 そ れ で W H I T E L E

イ レ が ある の 。 そ れ で W H I T E L E

に 行 か な い ? 5 0 0 円 つ て 決 め ら れ て い

ジ ヨ バ イ 「 う ん 、 行 く 」

○ ト ン ド ・ パ バ ジ ー 「 う ん 、 行 く 」

○ ト ン ド ・ パ バ ジ ー と 三 枝 の 家 ・ 前

メ イ リ ー ン 、 パ バ ジ ー 、 ス タ ツ フ 、 電
飾 を 飾 り 付 け 、 大 き な パ ロ ル を 看 板 の 451

クリス マス ソ ン グ が 大 音 量 で 流 れ て い

ク リ ス メ イ リ ー ン 、 パ バ ジ ー と 三 枝 の 家 ・ 前

下 に 取 り 付 け て い る 。

ず さみ な が ら 、 シ ャ ボ ン 玉 で 遊 ん で い

ア イ ナ 、 ア ラ 、 ク リ ス マス ソ ン グ を 口

○ ト ン ド ・ 病 院 ・ テ イ ト ボ ー イ が い る 大 部 屋

リ ン ゴ 、 バ ナ ナ 、 マ ン ゴ 、 ぶ ど う が 机

聖 人 の カ ー ド が 立 て か け ら れ 、 口 ザ リ

の 上 に 置 か れ て い る 。

オが吊るされている。

現金の入った封筒が置かれている。

エリ、マンゴを切つている。

ティトボーアのスタッフ、立つている。

エリ、マンゴを切つている。

ネルソン、見舞いに来ている。

ティトボーア、横になつて、目

は開いている。

ネルソン「たいしたことなくてよかつたな」

ティトボーア「あー、それで、ジミーは？」

ネルソン「ジミーは起訴できる。1年半前に

逮捕したときに14歳と主張している。出生証明書

今回も14歳と主張している。出生証明書

がないから正確な年齢はわからないが、1

年半経つて同じ年齢というのはありえない。

問題はロビンの関与だ。彼がジミーに

刺せと命令したことを見ぬくことはなる

と、ロビンを裏切つて自白してくれないとなる

感じる。ジミーの証言があればロビンの教

唆は明らかだ。盗聴データもあるから立証できるだろうし、なんとかなるだろう」

エリ、マンゴを皿にのせて、配つている。

ネルソン「それからな、お前に借りを返す。少年ギヤング団のメンバー50人を警察が預かっている。家族を呼んで警官が対応している。家族が納得してくれればそのままS T S Cの施設に渡すつもりだ」

エリ、マンゴを配るのを止めて、

エリ「うわー。もちろん彼ら全員を受け入れるけど。ただし少年とはいえ、悪の道に深く染まっているから、更生させるのは大変。私たちだけでは到底無理。専門家がすぐ必要だわ」

○サンタアナ・S T S C本部・内

三枝、アンジエリン、パパジー、エリ、カミール、ソファに座り、話している。エリ「少年ギヤング団の少年たちがもうすぐ

やつてくる。私たちだけではノウハウもなく、管理できない。更生させる専門家を至急呼んでほしい」

アンジエリン「以前勤めていたNPOにふさわしい人たちがいる。まずは講師として来てもらいたい、少年ギヤングたちにどう接するか指導してもらいます。現場での具体的な対応方法に助言・指導を受けられます」

三枝「よろしく頼む」
エリ、大きく息を吐いている。

カミール「ふーよかった」

○サンタアナ・STS C児童養護施設・内

翌日

アンジエリン、マイキー、話している。

アンジエリン「ボランティアは交通費も出ないのに来てくれてありがとう」
マイキー「時間があるし、メロディはベビー・シッターが見てくれている。湯野さんを紹介してくれたせめてものお礼」

ネルソン、警官、子供たち15人と母

親たちを連れてくる。

アンジエリン、心配そうに見ている。

講師、指示を出している。

カミール、エリ、スタッフ、子供を座
らせて名前、性別、年齢など聞いてい
る。

リガヤ、母親と子供たちと話している。

リガヤ「知ってる子供ばかり、頑張つて更生
させてやる」

ネルソン、リガヤに気がついて、

ネルソン「盗聴器の時は世話になつたな。こ

こで働いてるのか」

リガヤ「はい、ギヤング団をいつも見ていた

から少しは私でも役に立てると思う」

ネルソン「焦らずにやることだな」

ネルソン、カミールを見て、

ネルソン「第一陣だ。次から次へと放り込む

からなー

カミール「まかせて、どんどん連れてきてー

○サンタメサ・S T S C サンタメサ支部・内

スタッフ、掃除している。スタツフに話している。

ロメロ、B A B Y B O Xを見ながら、

ロメロ「クリスマス休暇だけど、赤ちゃんが

入るかもしないので、俺が毎日、見に来

入るかもしないので、俺が毎日、見に来る。お前たちはストリートチルドレンを探

してこい。トンド支部は50人。パヤタス

支部も何人か入れている。まだ二人しか施

設に入れてないんじや話にならないぞ。全

員クビになる」

456

○サンタアナ・S T S C 児童養護施設・児童

部屋(夜)

手作りの装飾が飾られている。壁には大きな紙に手書きで

M E R R Y

C H

R I S T M A S °

テーブルにはケーキ、フライドチキン、

スペゲティ、韓国インスタントラー

メン、アイスクリーム、アイスティな

どが並べられている。

その横にはラッピングされたプレゼント
トがいくつもある。

カミール、エリ、キカイ、スタッフたち、ビログ、子供たち、クリスマスソングを歌っている。配達人が大きな荷物を抱えて入ってくる。

エリ、配達伝票を見ている。

エリ「キムさんからだ」

キカイ、カミール、エリ、うれしそうに段ボールを開けている。子供たち、スタッフたち、覗き込んでいる。

中にはカルビ10kg、トッコク餅入りスープ、ビビンバ、ハイチユウなど

韓國のお菓子も入っている。

カミール「まるで韓国クリスマスみたい」

エリ「キムさんにお礼のテキストをみんなで

書いて送るよ」

○ヴァレンズエラ・リムの家・ダイニングルーム（夜）

部屋の中に点々とリンゴが置かれている。

部屋の隅にはパイナップルツリーがあり、その前にはプレゼントが置かれている。

テーブルには北京ダック、火鍋、点心、派手な色の大きなケーキがある。

リム、リンロン、ドンドン、ヴィルマ、赤ちゃん、長男、マリリン、子供二人、長女、テーブルを囲んでいる。

メイドたち、ホットワインとアップル

ジユースを注いでいる。

リム、マリリンに話している。

リム「ずいぶん前に、あなたに代理母になつ

てくれなんて、失礼なことを言つたことを謝りたい。ずっと謝りたかったけど、なか

なか会えなくて言う機会がなかつた。今日はクリスマスなので祝う前に心からの謝罪をする」

リム、両手を胸の前で合わせている。マリリン「私も感情的になつてしまい、怒りすぎました。今はもう気にしていません。ドンドンさんやヴィルマさんのことを思つて言つたことだとよくわかつています。お二人が幸せそうなので本当に良かつた」

ドンドン「いいクリスマスだな」
リンロン、「赤ちゃんを抱きながら、
リンロン「メリーカリスマス」

○ トンド・道路上（夜）

ベル、段ボールの上に寝転がりながら、ラップに文句を言つていて。ラップ、少し離れて、ぼーっとベルを見ている。

ベル「どうしてティトボイは来てくれないの？」
あーあークリスマスは病院で過ごし

たかつた」

ラップ「ティトボーアもクリスマスで忙しい
はずだ。今頃、おいしいものでも食べて、
酒飲んで酔っぱらつてるだろう」

ベル、缶を振つている。

ベル「ぼーっとしてないで少しは稼いでこい
よ。誰も通らないから、1円も入つてない。
食べなくては元気な子供は生まれないよ」

ラップ、渋々立ち上がる。

ラップ「行つてくる。あーー惨めだな」

460

○タギング・フォートボニファシオ陸軍基地・

ミラーの家・リビング（夜）

アドベントリースに4本のろうそくが
立つていてる。玄関に靴下が置かれて
いる。

る。

その横に大きなクリスマスツリー。

テーブルにはガチョウの丸焼き、サワー
クラウト、ヴァニラップディング、レ
ープクーヘン（ジンジャーブレッド）、

ワインが並べられている。

ミラー、シオニ、少女、メイドが食卓を囲んでいる。

シオニ、少女を見つめている。

シオニ「この子のおかげで病院に行くこともなくなった。ようやく泣かなくなつたので、兄弟がいな寂しさが和らいできたのかなと思います」

ミラー。「さあ、食べようか」

シオニ「メリーカリスマス」

○ オルティガス・キコの家・リビング・テーブルの上にはビール、ジン、ウイスキー。ブランデー、カジキ、カツオ、ラップラップ（魚）エビ、イカ、などシーフード料理が置かれている。クリスマスソングが流れている。キコ、ビリー、ドンナ、ラニー、友人のゲイカップル、レズビアンカップル

が 8 人、ベビーシッター、思い思に
酒を飲んでいる。ベビーシッター、赤ちゃんを抱いてい
る。ドンナ、「うちの子のほうがどうみたってかわ
いいよね」ドンナ、赤ちゃんを抱いている。
キコ、「そんなわけないだろう、うちの子のほ
うが可愛いに決まっている」キコ、赤ちゃんに手を振りながら、
ラニー、「はいはい、どちらもかわいい。」
ラニー、「うだうだ、さあ飲もうぜ」
ビリー、「そんなことで喧嘩しないでよ」
ドンナ、「俺も赤ちゃんが欲しいな」
友人 1 「俺も赤ちゃんが欲しいな」
ドンナ「紹介してあげる。私たち、寄付もし
たし、便宜を図ってくれると思う。でも何
か月か待つてと言わわれているの」
キコ、赤ちゃんを抱きながら、酒をラ

キコ 「メリーカリスマス」 ツパ飲みしている。

w ○ アラバン・ナネットの家・リビング

ナネット、友人、メイド、話している。

ベビーシッター、大きなクリスマスツ

リーを飾り付けている。

赤ちゃん、ベッドで気持ちよさそうに

寝ている。

友人、赤ちゃんのための靴下などベビ

ー用品をカバンから出している。

メイド、コーヒーを運んでいる。

ナネット「今までごめんなさい。何度も連絡

してくれたのに断つてばかりで」

友人「ううん、元気になつてよかつた。クリ

スマスだからショッピングモールは閉まつ

ているけど、ホテルのレストランなら大丈

夫。おいしいものでも食べにいかない? も

ナネット「行こう。クリスマスだものね。も

う一人友達呼んでいい?」

友人、大きく頷いている。

○ マカティ・レガスピビレッジ・湯野のマン
ショーン自宅・リビング・（夜）

る。

メロディの枕の横にプレゼントが二つ
置かれている。

テーブルの上には大皿に海鮮ちらし、

料理、ケンタッキーのチキン、いちご

メロディ、湯野の膝に座つて料理を指

マイキー、日本酒をグラスに注いでい

ベビーシッター、メイド、ジュース、

ビルを運んでいる。

アンシェリン 大喜なハックハックを

る。

湯野 「待つてたよ、いいタイミング」

アンジエリン、にこにこしながら、メ

ロディにプレゼントを渡している。

アンジエリン「メロディ、メリーキリストマス」

メロディ、すぐに開けている。

メロディ「お姉さん、メリーキリストマス。あ

りがとう」

アンジエリン、湯野にバツクバツクを

渡している。

湯野 「何?」

アンジエリン「これはボスから。キムさんから大量に賞味期限切れの日本食材をもらつて、食べきれないから助けてほしい。クリスマスプレゼントではないって」

湯野 「レトルトカレーとか缶詰とか問題なさ

るのに、お邪魔だよね」
アンジエリン「クリスマスは家族でお祝いす

マイキー「いいのいいの、湯野さんも、アンジエリンが来るからって、張り切つて作つてくれる」

アンジエリン、お節料理を指さしている。

アンジエリン「うれしいーーー。それにしてもこの綺麗な料理は何? 見たことないものがいっぱい並んでる」

湯野「日本はクリスマスの日にはケーkeeとケンタッキーだけなんだ。それだとさびしいので海鮮ちらしとお正月に食べる料理を作つた」

アンジエリン「それにしてもこの人数でこの料理は多すぎない?」

湯野「アンジエリンさんはティクアウト大好きだろう。初めて俺の店に来た時にたくさん持ち帰りしたのを見たぞ」

アンジエリン「うわー覚えていいんじゅうですか?」

恥ずかしい。といふことはこれを持ち帰りしてもいいの?」

湯野「この料理を三枚に持つていってほしい。」

きっと長い間、食べていいない料理だから、喜ぶと思う」

アンジエリン「わかりました」

メイド、アンジエリンのグラスに日本酒を注いでいく。

湯野「それじゃあ、メリークリスマス、乾杯」

全員「メリーカリスマス」

○マカティ・ダスマリナスピレッジ・セバス

チャンの家・リビング（夜）

巨大なクリスマツリーが飾られている。その下にはプレゼントが30個以上ある。

テーブルには大きな豚の丸焼きが2匹。

何種類ものフィリピン料理、どぎつい色のケーキは8個、飲み物などは各種揃っている。

セバスチャンを含めて大人30人、子供が15人が集まっている。

メイド、運転手、ベビーシッターなど

が20人いる。

全員、飲み物を持つている。

孫がセバスチャンに話しかける。

孫「おじいさん、クリスは辞めてしまつたけど、新しい家庭教師は来るの？」

セバスチヤン「探してるからもう少し待つて」

孫「きれいでやさしいお姉さんがいいな？」

セバスチヤン、孫のおでこをつづいて

いる。グラスを高く上げて、

セバスチヤン「メリーカリスマス」

全員「メリーカリスマス」

○サンタメサ・STSサンタメサ支部・中

(夜)

ロメロ、赤い顔をしながらカギを開けて、ライトのスイッチを入れる。中に入り、ベイビー・ボックスを覗く。赤ちゃんが入っている。

ロメロ「ウワー、びっくりした。本当に入

つていてる」

ロメロ、ベイビーボックスの中を隅々まで調べている。

ロメロ「メモも何もない。どうする？」力ミールはいないし、施設に持つていいくか？
それともボスの家？ パパジーもいるよな。
よし、ボスの家に赤ちゃん持つていこう。
いやいや、怒られるかな、クリスマスなのに
に、えいやーままよー

○ジプニー・内（夜）

ロメロ、ジプニーの助手席に赤ちゃんを抱いて座り、外を見ている。
人がたくさん外に出ていている。子供たち
はおもちゃのラッパを吹いている。爆竹が大きな音を立てている。打ち上げ花火が空高く上がっている。道路に置かれた仕掛け花火が派手に炎をまき散らしている。空中を花火がヒューッと音を立てて飛んでいる。

赤ちゃんが泣きだしている。

ロメロ、赤ちゃんが火の粉を被らない

よう体で守つている。

○ トンド・パパジーと三枝の家（夜）

アイナ、アラ、おもちやのラツパを吹いている。
近所の子供たち、クリスマスソングを歌い、家の前に整列している。
メイリーン、小銭を子供たちに渡して
三枝、パパジー、ティトボーアイ、デレ
ク、メイリーン、キカイ、店の前に机
と椅子を並べてビールを飲んでいる。
看板の下のパロルの電飾が点滅している。
机には直径10cmの丸いエダムチー
ズボール、クリスマスハム、メリーカルボナ
リスマスと書かれたケーキ、チキンの丸
トラ、ローカルなお菓子、チキンの丸

焼きが置かれている。

その横にラッピングされたプレゼント
が6個積まれている。

花火、爆竹は段ボールに入っている。

爆竹、花火が飛び交っている。

デレク、大きな仕掛け花火を道路上に

置き、点火している。

メイリーン、耳を塞ぎながら、ティート

ボーリに話しかける。

メイリーン「ビルなんか飲んで大丈夫?

医者は飲んでもいいって言つたの?

退院

しよう」

ティートボーリ「まだ痛いよ。でもクリスマス

の許可は出たの? まだ傷は治つてないで

に病院で独りぼっちは耐えられない。さす
がに誰も見舞いに来てくれないし、先生に
無理言つて退院させてもらつた」

キカイ「じつとしてなさいよ。動くと傷口が
開く。爆竹なんて触つたらダメー

三枝、アイナとアラを呼んでいる。

アイナ、アラ、ラツパを吹きながらやつてくる。

三枝、プレゼントを渡している。

三枝「ルービックキューブ、ねるねる、ベイブレードはあつたけど、いくら探しても黒ひげ危機一髪が見つからない。日本ならどこでにでもあるのになあ。それでラブブとクロミのグッズにした。ごめん」

アイナ、アラ、三枝に抱きついている。

アイナ、アラ「ありがとう」

ロメロ、赤ちゃんを大事そうに抱えながら、ジプニーから降りて歩いてくる。

デレク、ロメロを見て驚いている。

デレク「おい！ ロメロ！ 何を抱いてる？」

三枝、ティトボーアイ、パパジー、キカイ、メイリーン、笑いながら見ている。

アイナ、アラ、ロメロに駆け寄る。

アイナ「メリクリスマス、おいしいものいっぱいあるよ」

ロメロ、お金をアイナとアラに渡して
いる。

ロメロ「アイナ、アラ、ごめん、急に来るこ
とになつて、プレゼントを用意していな
けど、ハイ、100円あげる。メリーカ
リスマス」

アイナ、アラ、ロメロの手の甲をおで
こにつけて軽く会釈している。

ロメロ「わーお、M A N O P O をしてくれた」
ロメロ、三枝の横に座り、赤ちゃんを
見せている。

ロメロ「さつき、ベイビーボックスを見たら
赤ちゃんが入ってた」

三枝「ええつ、クリスマスの日にか！」

パパジー「それつてジーザスの生まれ変わり
かもな、俺たちにとつては縁起がいい！」

ロメロ「カミールはサンタアナだし、俺だけ
では何かあつたら困ると思つて、ここか施
設かどちらに行こうか迷つたのだけど、こ
ちらのほうが楽しいかなと思つて」

三枝 「女の子か？」 メモとかなにかないの

か？」

ロメロ 「女の子。メモも手紙も何もない」

キカイ 「私が預かる。明朝、サンタアナに行

くから届けてあげる」

ロメロ 「ラッキー、ここにきてよかつた。ク

リスマスなのに何をしてると怒られるかと

思つた」

パパジー 「パパジー、笑いながら、指さしている。全員、見ている。」

アンジエリン、風呂敷包みを慎重に抱えながら、トライシクルから降りてい

る。 キカイ 「なにか大事そうに持つているわよ。

まさか赤ちゃんじゃないよね」

アイナ、アラ、すぐさま駆け寄つて、

M A N O P O をしている。 アンジエリン、微笑みながら、お金を渡している。

アイナ、アラ、お互を見つめて笑つ
て いる。

アンジエリン、三枝に風呂敷を渡す。

アンジエリン「はい！ 湯野さんからボスに
クリスマスプレゼント」

三枝「はあー、湯野さんから？ なんだろう？」

三枝、風呂敷をほどいて中を見ている。

三枝、微動だにしない。。

ティトボーリ「ボス、どうした？」

三枝、涙ぐんでいる。

キカイ、中を覗いて、

キカイ「何？ どうしたの？ 料理じやな
い！ 泣くようなもの？」

三枝「これはな、1年に一度だけ、新年に食

べる料理なんだ。長い間食べていなかつた」

三枝、湯野に電話している。

三枝「湯野さん、お節料理ありがとうございます」
しています」

アンジエリン、三枝のスマホを奪い、
話している。

アンジエリン「アンジエリンです。三枝さん

嬉しさのあまり泣いたよー」

三枝、アンジエリンからスマホを奪い

返す。

三枝「メリークリスマス」

三枝、電話を切る。

アンジエリン「料理ってすごいよね。ボスが

泣いてるなんて初めて見たー

デレク、料理を見て、

デレク「少し食べていいかな? 泣くほどお

いしいのだろう?」

三枝、お節料理をテーブルに並べてい

る。

三枝「みんなで食べよう」

メイリーン、コップにビールを注いで

全員に配つている。

メイリーン「ティトボーカーは少しだけだよ。

アンジエリンも飲もう。デレクもロメロ

も! 飲もう!」

全員「メリーカリスマス」

○ トンド・墓地・S T S C トンド支部

翌日。

三枝、ネルソン、パパジー、ティトボ
ーイ、ソファに座り、昨日の残り物を

食べている。

母親が二人、子供を連れて入ってくる。

ネルソン「決心がついたか、サンタアナの施
設を見てきたのだろう」

母親「よろしくお願ひします」

ティトボーア「ここのは責任者は俺だからいつ
でも相談にのるよ。明日の朝、もう一度来

てくれるか、何人か一緒に行くことになつ
ている。みんなでサンタアナに行こう」

母親、子供、帰つていいく。

ティトボーア「ネルソンがここまでやつてくるとは思いもしなかった」

ネルソン「借りは返すと約束しただらうが」

パパジー「今回は見直した」
ネルソン「お前らに褒められたつてうれしく
ねえよ」

三枝、3人の顔をまじまじと見て いる。

x x x

(フラツシユバツク)

ネルソン「物売りなんかやめて、日本人にしかできないことを考えろ、少しはスラムの役に立つようなことをな」

x x x

パパジー「時間はあるからゆっくり考えてみて、死んだと思えばなんだってできる」

x x x

三枝「ティトボーアイは刺されるし、アンジエリンやパパジーは転職したし、マイリーンはどうまいつていたお店をやめて、引っ越しすることになるし、俺がやつてきたことはどうなのかな?」

思つてないぜ」

パパジー「俺たちが望んだことだ。ボスのおかげでみんな下流階級から抜け出そう+している。ボスのやつてきたことは間違つていない」

三枝「少しはスラムの役にたてたのかな」

ネルソン「あー俺のおかげだな。犯罪者にし

てはよく頑張ったと思うよ」

ティートボーア「ボス！　まだまだたいしたことはやつてないだろう。感傷に耽つてどうする。これからだろうが」

○ラグナ・カルルーバンゴルフクラブ・レス

トラン・入口（朝）

リム、三枝にバスポートを渡してい

る。

リム「3年の就労ビザとI.Dも取れた」

三枝「ありがとうございます。これで心置きなく仕事に打ち込めます」

三枝、リム、セバスチャン、タン、湯野、キム、友人2名、朝食を食べている。

三枝「ようやくゴルフができる」

リム「待ってたぞ、ハンデなしで夕食を賭けよう」

三枝「望むところです」

リム「練習はしてるのか?」

三枝「イントラムロスの練習場で200球ばかり」

リム「ようし、手加減しないからな」

セバスチャン「俺も賭けに参加させろ」

リム「最後までパットを打つならな、OKはないぞ」

セバスチャン「よし、時間はかかるがやる

か」

タン「三枝はここが一番好きなんだろ」

三枝「カナルーバンはフィリピン感満載です。もう少しメンテ

がよければ文句なしなんですが」

キム「さあ、スタート時間だぞ、行くぞ」

全員立ち上がる。

○同・通路

タン、三枝、歩きながら話している。

タン「上院議員が謝意を示してきた。S T

S Cを心から応援したいそうだ。それで裏金の話は聞かなかつたことにしてくれと。だから1億の寄付を財閥から直接受け取つてくれ。多分、財閥からなにか言われたのだろう」

三枝、深々と頭を下げて、タンの手を握っている。

三枝「もう感謝するしかありません。これで

S T S Cはやつていけそうです」

○同・1番ホール
リム、セバスチヤン、タン、湯野。キム、友人2名、キヤディイ8人、見てい
る。

三枝、にこにこしながら、ドライバーをかつ飛ばす。

全員「ナイスショット」

STS立ち上げにイベントは？

リムにZIPOnお資料を送る
ドンドンの子供の洗礼式

アンジエリン書類が完璧

○トンド・墓地

ネルソンとパパジーと三枝語る
来るたびに、子供が増え

ホーリーウィーク

人はいくらでも集められる

ネルソンとの会話差し込み

バドミントン

の人の子持ちの家族、父親はタクシードの運転手、補導歴あり13歳の男子、親が扱いかねている。

洗礼式

田舎から連れて来る、田舎はもつと貧乏、危険！

外国からつれてくる

サラブレッドのように子供を産む牧場を作る

ネットでぼぢゅう

ロメロをおもしろくしろ陽気な馬鹿キャラが

必要、誘拐してくる刑務所OK。刑務所内で女囚に産ませる

暗号資産

キヤツチボールしよう！』

三枝 「まだ暑いから夕方しよう」

アイナ、アラ「やつたー！」

それには子供な
んて大嫌いだ。欲しくもない。
るとすぐつけあがるし

やさしくす

○トンド・墓地

x

ゴミの山で働く少年たち。
(フラツシユバツク)

x

x

x